

とあるアイルーの鎧袖一触

榛猫(筆休め中)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こんな噂を聞いたことはあるだろうか……。

女王領域で生まれ、異質な力を持つて育った獣人種の噂を……。

曰く…その猫が拳を振れば相手の身体は肉片と化すと……。

曰く…跳躍だけで月まで行ったことがあると……。

曰く…その獣が本気を出せばこの次元は数秒と保たず崩壊するだろうと……。

曰く…その獣、獣にあらず、獣の皮を被った化物だ…と……。

これは後に『世界のバグ』とまで呼ばれた一匹の獣人種の獣生を描いた物語である……。

これは緋月弥生様が現在執筆している『天地鳴動の星焰竜』の三次創作です。

緋月様の原作よりシリアスorカオス展開は皆無に等しいと思つてください……。

尚、今作の初期話は原作で言うところの女王領域が誕生し、修羅種が出てき始めた頃の時間軸となります……。

ここから見られる方は是非とも緋月様の『天地鳴動の星焰竜』をお読みになってからいらしてください。

活動報告でアンケートをとっています。そちらもご協力ください

※9／11評価を一言コメありにしました、詳細はそちらも活動報告に書いてありますのでご閲覧ください

※9／24タイトル、あらすじを変更しました。

目次

| | |
|-------------------------|-----|
| 作者報告コーナー | 1 |
| 目が覚めたら森の中だったのですニヤ | 7 |
| 女王領域ってなんなんですかニヤ!? | 10 |
| ボク、強くなったのですニヤ? | 13 |
| 狩りの手伝いですニヤ! | 17 |
| アイルーでもハンターになれるのですニヤ!? | 25 |
| ハンターってみんなこんな人外?なのですニヤ? | 31 |
| ボク、ニヤンターになりますニヤ | 36 |
| ニヤンター初仕事ですニヤ! | 46 |
| 街での一時ですニヤ! | 55 |
| 帰ってきたのニヤ!女王領域! | 60 |
| 星焰竜に挨拶ですニヤ! | 66 |
| さらなる強化ですニヤ! | 74 |
| 旅に出ますニヤ! | 83 |
| 弟子募集はしてないのですニヤ! | 87 |
| マジモード... 突入ニヤ... | 95 |
| 経過報告ですニヤ! | 106 |
| お願いがありますニヤ | 112 |
| ボクの星にツ...落ちてるんじゃないニヤツ!! | 120 |
| 祖龍って...彼の祖龍ですかニヤ!? | 124 |
| 折角だし貰っておきますかニヤ! | 127 |
| V S バルカンですニヤ! | 132 |
| V S ルーツ戦ですニヤ! | 137 |

とある村ハンターの渡航記録

ぼ：ボクの家が：ですニヤ！

ボク：死んだのですかニヤ!?

ボクはボクだニヤ！

新大陸編

渡航？いいえ、渡龍ですニヤ！

古代樹の森ですニヤ！

テトルーさんと一緒！ですニヤ！

バカヤロー！ニヤ！

邪魔を：するニヤア!!

大蟻塚の荒地ですニヤ！

弟子志願者との再開：：ですニヤ！

追い出されました：：ニヤ

思いを馳せますニヤ

新たな出会い：：ですニヤ!!

苦労の帰還ですニヤ!!

懐かし友たちとの再会ですニヤ!!

様子見：：ですニヤ!!

女王領域編

作者報告コーナー

アイルークン「というわけで始めました！作者報告のコーナー！！」

斉木『ニヤ…？』

幽々子「多分、などニヤ、をかけたんだと思うわ〜」

17島「なるほどな…」

アイルークン「…とりあえず自己紹介していくニヤ！」

(((((無理やり話逸らした…)))

上条「じゃあまずは俺からだな。

『新約、とある提督の幻想殺し』で提督をやってる上条当麻だ」

悟誠「次は俺だな！

『龍に選ばれし赤龍帝』で孫悟空の義息をやってる孫悟誠だ」

一誠「次はオラだな

『DRAGONBALL D改』で赤龍帝やってっぞ、兵藤一誠だ！」

榛名「お次は私ですね

初めまして『榛名さんの苦労話』で一味の姉役をやらせていただきます。榛名です」

齊木「次は僕か…。」

『鎮守府提督のΨ難』で提督をやらされている、齊木楠雄だ…。」

アイルーくん「お次はボクだニヤ！」

『女王領域の獣人種』でニヤンター、ニヤイダーをやってるアイルーですニヤ！」

幽々子「お次は私ね〜♪」

『駒王の街の亡霊姫』でオカ研の副顧問をさせていただいてます西行寺幽々子と申します」

17号「次は俺か…。」

『17号は戦艦霧島に憑依するようですよ?』で霧島をやっている。17号だ」

霧島「私の中にいる元の霧島です」

燐空「最後は俺か…。」

『Re, 喪失から始める幻想生活』で放浪者をやってる。霊焰路燐空だ。」

呼びにくければリクって呼んでくれ」

アイルーくん「ありがとうございますニヤ!ここにいる人たちがギオス。r 榛猫の書いている作品の主人公たちだニヤ!これからこの人たちと今後の予定について話していくニヤ!」

上条「つーか、今度はなんで俺達集められたんだ?」

悟誠「また長期休載とかか?」

幽々子「あの子は気まぐれなところがあるものね〜」

17島「気まぐれすぎて俺達は気が気じゃないんだがな…」

燐空「17島さんに激しく同意だよ…」

アイルーくん「更新頻度はボクは知らないけど以前やってたらしい週替わり更新にしていくらしいニヤ」

上条「ああ、あの方法ね…」

悟誠「大丈夫なのか？」

一誠「まあアイツの事だから何か考えがあつてのことなんじゃねえか？」

榛名「そうだと良いのですけど…」

斉木『案外何も考えていないかもしれないぞ？』

幽々子「考えていることを祈るばかりね〜」

17島「問題ない、更新が滞ることがなければそれでな」

燐空「作者信用ねえんだなあ…」

上条「そういや思ったんだけどさ、週替わりにするってことは前みたいに作品ごとに組み分けがあるんだろう？」

悟誠「そういえば前はあったよな、何がありましたっけ？」

一誠「えーつとな… あん時は確か、前の『ドラD』が週六更新で…。」

悟誠「『龍選』が週五だったっすね」

榛名「『榛クロ』は週四でした」

斉木『おまけで『新約とある』と『鎮Ψ』が週三だったな…。』

5

幽々子「『亡霊姫』は週二の更新だったわねー確か」

17島「『17戦霧』は週一更新だったな、途中で止まったが…。」

燐空「その頃からやってたのかよ… で、今回はどういう分け方なんだ？」

アイルーくん「それについては後から書く活動報告を見て欲しいそうニャ」

斉木『露骨な誘導だな…。』

アイルーくん「さつきも言った通り、詳しいことは作者の活動報告を見て欲しいニャー！」

上条「どうやら今後の更新の予定や優先度なんかも書いていくつもりらしい」

悟誠「つもりねえ、いったいそれがいつまで続くのやら…」

一誠「まあ試してみたらいいじゃねえか、色々やってみりゃ方法を思いつくかもよ?」

榛名「今は作者を信じるしかないですね…」

齊木『僕の所は直に終わるだろうから早めにしてほしいものだが…』

幽々子「それも作者のやる気次第かしらね〜」

17島「久しぶりに動けるんならそれでいいさ」

燐空「17島さんの言う通りですね」

『『『『そういうことなのです、こんな作者ですがよろしくお願いします』』』』

いうモノニヤンだろうけど…

ボク、いつの間に死んだニヤ？

普通に部屋のベッドで眠りについたはずニヤンだけど…

…まあ、いろいろ考えてても仕方ニヤいし、今は生き残ることだけ考えるニヤ！

常識的に考えればここはモンスターハンター、通称モンハンの世界って認識で間違いないはずニヤ、ということはそこらじゅうにモンスターがウヨウヨいるはずニヤ

そんなところで呑気にしてたらあつという間にお陀仏ニヤ！

かといって武器なんて扱ったことないから使えるわけもないしニヤ…

ボクに出来ることといえばパンチやキックなんかの格闘くらいしか出来ないニヤ

それならボクが出来る強くなれる方法の一つ！

筋トレニヤ！

というよりそれしか思いつかないニヤ…。

ボクのリスペクトする大先生ニヤイタマ先生の特訓方ニヤ！

腕立て伏せ百回！

スクワット百回！

上体起こし百回！

そしてランニング十キロ！

これを毎日やるニヤ！

そうと決まったら早速実行ニヤ！

くくNow Loadingくく

キツツイニヤ…。

ニヤイタマ先生の特訓キツイニヤ…

ニヤイタマ先生の弟子に通常レベルだつて言つてたけどあれはか

なりキッツいニヤ…

でもやりきらないと強くはなれないニヤ！

キツくても生き残るために頑張るニヤ!!

くくNow Loadingくく

筋トレの合間に気づいたんニヤけど、ちよくちよくアオキノコつばいキノコが生えてるニヤ、これは食べられる物なのかニヤ？

スンスン… 大丈夫そうニヤ！

他にもいろいろ探してみるニヤ！

くくNow Loadingくく

ニヤんでかわかんニヤいけど、どれが食べられる物や使い方が手に取るようにわかるニヤ、まるで体が覚えているみたいに勝手に動くニヤ！

この身体便利だニヤー♪

あ、回復薬調合してみようかニヤ

女王領域ってなんなんですかニヤ!?

見知らぬ森の中でアイルーとして目覚めてから一月が経った頃ニヤ!

筋トレで鍛えてたからか少しだけ肉付きが良くなった：気がするニヤ

でもまだまだニヤ! 血反吐や毛玉を吐き出してるようじゃニヤイ
タマ先生には追いつけないニヤ!

と、話がそれたニヤ。

一月この森の中で生活してて身についたスキルがあるニヤ!
それは草食獣たちの言葉が分かるようになったニヤ!

日課のランニングをしている時によく見かけるアプトノス達の観察を続けていたらいつの間にか言葉が理解できるようになってたニヤ!

話してるうちにアプトノスのアプさんと仲良くなれたニヤ。

アプさんに色々聞いてみたらここは女王領域っていう場所らしいニヤ

なんでも密林に砂漠、凍土から火山に至るすべての地域がこの女王領域にまとまっているらしいニヤ

それにも驚いたけど一番驚いたのは女王領域に住まうモンスターの種類ニヤ

ここ女王領域は他^{外の地域}地域に生息しているモンスターより強いらしいニヤ

そう言われて気付いたニヤ。アプさん含め、見かけるモンスターは大体身体が一回り以上大きかったり、リオレウス亜種や希少種みたいに体色が変化してたりしてたニヤ…。

ここに来るハンター達の話だとそういったモンスター達は修羅種と呼ばれているらしいニヤ

ボクも女王領域に住んでいるからアイルー(修羅種)みたいな扱いになるのかニヤ?

ボク、強くなつたのですニヤ？

はあ…釣れないニヤ…。

あ、初めましてボクアイルーですニヤ。名前はまだニヤい…。と言つてもボクは某有名小説のネコでも未来から来た青狸型だかネコ型だかのロボットとかじゃニヤいけど…

ボクがアイルーとして目覚めてからもう半年が経つたニヤ！

あのトレーニングのおかげで力も大分ついてきてドスランポスくらいニヤら普通に倒せるようになったニヤ。

ボクはモンハンは3rdまでしかやったことニヤいからたまに他のモンスターを見かけてもさっぱりわからニヤいニヤ…。

と、話が反れたのニヤ…。

今のボクは死ぬ気でやればアオアシラまでなら何とか倒せるニヤ。といつても倒した後に僕自身も倒れちゃうからあまり意味はニヤいんだけどニヤ？

そんなわけでボクは今釣りに来てるのニヤ！

え？ネコが釣りなんかで出来るのかって？

答えは当然Yesニヤ、本来なら普通のネコは釣りなんかできないニヤ。

けど、ボクは獣人種ニヤ、人間だった頃に見ていた実況動画にはアイルー達が釣りしているシーンがあったりしたからそのあたりは無問題なのニヤ！

そもそも釣りをするだけなら竿も含めて全て現地調達で揃えられるニヤ。

竿の持ち手となる部分にはしなりの良い木の枝や竹を使うニヤ

釣り糸はそこらに垂れているツタを使えばどうとでもなるニヤ、ただし！すぐに切れちゃうようニヤ脆いものはアウトニヤ！

エサに関してはそれこそ簡単ニヤ、海辺近くの岩場や湿気の多い土なんかを掘り返せばミミズやらカエルやら腐るほどいるニヤ。

まあでも、これはあくまでこつちの世界での常識だから、元の世界

じやとてもできない芸当だニヤ…。

と、それで食料調達に釣りをしているんニヤけど、さつきから一発もヒットしないニヤ

もうかれこれ三時間近くはやってるのに一発もかかんニヤい…。

だあああ!!もう止めニヤ!

いつまでも続けてたら日が暮れちゃうニヤ!

もう他のモンスターが食べ残したお肉とキノコとかを探しに行くニヤ

そういえば釣りをしたら遠くの空に見たことのない白銀の龍が飛んでたんニヤけどあれはいつたいたいなんてモンスターなのかニヤ?

くくNow Loadingくく

食料食料くどこかニヤく♪

「グオオオオオオツツ!!」

ん?ゲツ… アオアシラニヤ…。

もしかして、ボクがハチミツ持つてることに気が付いたのニヤ?

でも駄目ニヤ!これはボクが見つけた食糧ニヤ!オマエニヤんかに渡さニヤいニヤ!

それでも欲しいニヤらボクから奪って見ることニヤ!

「グオオオオオオツツ!」

アオアシラ（修羅種）がボク目掛けて突っ込んでくる。

でも甘いニヤ!オマエの動きはもう大体読めてるのニヤ!

ボクは横つ飛びに飛んで突進を躲すニヤ。

「喰らえニヤ!」

『弱本気ネコパンチ!』

正拳突きに近い動きでアオアシラの横足にパンチを食らわせる。

「グウオオオオツツ!!」

【ズデンツ!!】

運がいいニヤ!一発で転んでくれるニヤんてラツキーニヤ!

転んでる今がチャンスニヤ!

『連続本気ネコ乱撃』

パンチや蹴りを高速でアオアシラの頭目掛けて猛然と叩き込むニヤ!

ニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤニヤツツニヤツツ
チャアアツ!!

「お前はもう死んでいる...ニヤ」

別に某暗殺拳の百裂拳って訳じゃニヤいけど言ってみたかったのニヤ...。

つてこんなことでアオアシラが死ぬわけが...

ア...乱打しすぎてアオアシラの顔が陥没しちゃったニヤ...。

なんかゴメンニヤ、アオアシラ...。

お詫びにオマエのお肉は大事に頂くニヤ

\\ Now Loading \\

解体 完了ニヤ!

いやあこれでしばらくお肉に困ることはニヤいニヤあ♪

毛皮とかも何かで縫えれば服みたいにできるかニヤ?

ボクアイルーだからそこまで必要じゃニヤいけど...。

でも、取っておけばきつと何かしら使い道があるはずニヤ!

それじゃあ寢床に帰るニヤ!



そんな風に意気揚々と寢床に帰っていくアイルーを見ていた観測隊は本部にこう報告したという…。

『あれは本当にアイルーと呼べるものなのか…と』

その後、ギルドがそのアイルーについて調べるがその情報は一切つかめなかったという…。

狩りの手伝いですニヤ！

【ズシイインッ!!】

ハア… つまんないニヤ、ババコンガ亜種の修羅種亜修羅コンガだったから期待してたのに期待外れだったニヤ…

あ、自己紹介がまだだったニヤ。

転生獣人ネコ、アイルーです！ヒヤツハーニヤアアア!!!

といってもボクはどこぞの飲んだくれ商船改装空母じゃないからこのテンションは合わないニヤ…。

修羅アシラを運よく倒した日からさらに半年が経ったニヤ

ボクは最初の頃に比べて見違えるほどに強くなっているニヤ！

最初の呟きでもわかる通り、今さつきババコンガ亜種の修羅種亜修羅コンガを倒してたのニヤ。

最近よくモンスターに絡まれるから面倒臭いニヤ…。

どうしてこんなことになったんだっけニヤ…？

…… ああ！思い出したニヤ！

あれは一月くらい前にアプさんに着いて女王領域の沼地に行ったときの事だったニヤ…。

アプさんの用心棒も兼ねてボクが辺りを警戒してたらフルフル修羅種修羅フルが襲ってきたのニヤ。

アプさんを狙ってたみたいニヤったから横から一撃叩き込んだらあっさり弾け飛んだのニヤ…。

それからニヤ… 一日おきに大型モンスターたちが喧嘩を売ってくるようになったのニヤ…。

イヤンクツク、ドスファンゴ、ダイミヨウザザミ、ドスジャギ、ラン、ゲネ、イー、フロ、バギ、それと名前も知らないモンスターたち…。いろんな奴らがボクに挑んできたニヤ、みんな返り討ちにしたけどニヤ

ほら、そんなことを言ってる傍から来たのニヤ…。

「ゴアアアアアアアツツ！」
修羅レックステイガレックス修羅種ニヤ、ゲームではかなり苦戦させられたからその修羅種なら期待できそうニヤ！

「こいニヤ！ボクを楽しませてみるニヤ！」

「ゴアアアアアアツツ!!」

バインドボイスを超える声量で吠える修羅レックス。

正直言つてうるさいだけニヤ…。

耳を軽く塞いで堪えるニヤ。

「ガアアアアアアツツ！」

効果が無いと悟ったのか修羅レックスはボクに向けて凄い速度で突進してきたニヤ

でも僕はその場から動かニヤい、威力を見るためニヤ。

修羅レックスの突進が当たる寸前、唐突に修羅レックスがモーシヨンを変えてきたのニヤ。

ぶつかる寸前に原種もよく使っている回転攻撃に移行し始めたのニヤ。

しかもそれは一回二回どころの回転じゃなかったのニヤ。

回転を始めた修羅レックスはまるで扇風機の羽を強で回した時のように超回転を始めたのニヤ！

その回転のままボクに凄い速度で近づいてくる修羅レックス。

あまりの回転の速さに周りの空気が渦巻いて竜巻みたいになっちゃってるニヤ！

これは新たな技名を考えなきゃニヤ！何にしようかニヤ…？

なんだか暴風の大嵐みたいに辺りのものを手当り次第に凧いでるしやっぱり回転してるから…。

よし！『轟龍卷』ニヤ！

というかまだやってたのニヤ？『龍龍卷』

見た目は凄くカッコいいけど威力は大したことないニヤあ…



テイガレックスは焦っていた…。

目の前の獣人種に…

彼は今全力の必殺の一撃を叩き込んでいる。

この超回転は突進すると見せかけて直前に急激の動きを変え、相手が動揺したところに重く素早い一撃を何発も叩き込む彼の必殺のモーションだ。

しかし目の前の獣人種は効いているのだかないのか全くわからない…。

彼の超回転を受けて表情一つ変えないどころか一ミリも動かないのだ…。

これでは攻撃が通っているのかいないのか判別できない…。

痺れを切らした彼は不意に回転を止め、目の前の獣人種を噛み殺そうと顎を開き突っ込もうとした。

……が！

【ゾクウツツツ!!!】

そこまでしようと思つたところで彼の身体に物凄い悪寒が走り、本能的に距離を取るためバックジャンプをして目の前の獣人種から距離を置く。

「…回転はもう終わりかニヤ？」

今突っ込んでいたら… やられていた…。

コテンと可愛らしく首を傾げていて隙だらけなのは間違いない…。間違いないのだが…。

彼の本能がけたたましく警告を発している。

『目の前の存在に手を出すべきではない、逃げるべきだ…』と…。
しかし逃げるという選択は彼のプライドが許さなかった…。

彼は絶対強者だ、そんな強者があんな小さな存在相手に逃げていいはずがない。

本能がけたたましく警告していても、彼のプライドがそれを許さないのだ…。

目の前では獣人種がなにやらニヤーニヤー言っているが彼の耳には何一つ入ってこない。

すると不意に、目の前の存在がクルクルと回り出した。

何かと思い見てみるとそれは先程彼がやっていたことの模倣のようだ。

そんな動きで必殺の真似事をするだと…？

刹那、彼の中で何かが切れた…。

あの技は彼の誇りだ。それを軽々しく真似され、彼の怒りは限界を越えていた。

プライドも本能もかなぐり捨てて、彼は怒りに身を任せて吠える。

「ゴアアアアアアツツ!!」

怒り状態…。それは怒りで身体能力を飛躍的に上げる代わりに冷静さを失い、攻撃の正確さすらも雑になる状態…。

謂わば諸刃の剣なのだ…。

だが、もう彼にはそんなことを考えている余裕はなかった。

怒りのままに身を任せ猛然とクルクル回る獣人種に突っ込んでいく…。

しかしそれが彼が最後に見た光景となるのであった…。



いったい何だったのニヤ？あの修羅レックス。。。
ヒトが折角真似してやってみてたのにいきなり突っ込んでくる
ニヤんて失礼にもほどがあるニヤ！

でも回転中に尻尾が当たったらすごい勢いで吹っ飛ばされていっ
ちやたけどニヤ。。。。

しかも思いつきり岩肌に叩きつけられちやってるニヤ。

修羅レックス。。。ご愁傷様だニヤ。。。。

オマエの素材は大事に使わせていただくニヤ。

さて、それじゃあ。。。。

【ギランツ】

解体開始ニヤン♪

♪♪Now Loading♪♪

解体 完 了ニヤ！

それにしてもあまり気にしてなかったけどアイルルの懐って凄
いのニヤ。

ニヤんたって某ネコ型ロボットが付けてる四次元ポケットみたい
になってるのニヤ！

どういう仕組みかわかんないけど、この中に物を閉まっておけば中
身が腐ることも劣化していくこともないのニヤ！

というわけできつき解体した修羅レックスの素材をばいばいばー
いするニヤ！

さて、後に残ったのは。。。うわあ。。。見事に白骨化しちやってる
ニヤ。。。。

これって泥の中とか岩の中に埋めて置いたら化石になったりしないかニヤ？

なんだか面白そうだし埋めてみるニヤ！

〓 Now Loading 〓

埋め立て完了ニヤ！

今日のやることはこれで終わりかニヤ？

そろそろかえってゆっくりしたいんニヤけど…。

「オオオーン！」

あ、ジンくんニヤ！どうしたのニヤ？

「ウオオオーン！」

なるほどニヤ、狩りを手伝ってほしいのニヤね、もちろん手を貸すニヤ！

「オオオーン！」

礼なんていらぬニヤ！ボクとジンくんの仲じゃないかニヤ！

「オオオーン！」

そうニヤね、早速行くニヤ！

え？さつきから何をしているのか、かニヤ？

何って修羅オウガのジンくんと一狩り行ってくるのニヤ！

え？どうして牙獣種の言葉が分かるのかって？

そんなの観察して覚えたからに決まってるニヤ！

因みにジンくんとは前にさつき修羅のレックスの奴みたいに襲ってきたから手加減してボコボコにしてやったら仲良くなれたニヤ！

ジンくん曰く…『お前はオレの永遠のライバルだ！』だそうニヤ。

まあ『昨日の敵は今日の強敵トモ』ってことわざもあるから特に気にしてないニヤ。

とまあ、ジンくんの紹介はこのくらいにして、早速一狩りにレッツゴーニヤ！

〓 Now Loading 〓

いたいた、あれが今回のジンくんの獲物ニヤね？

獲物は修羅ルガニヤ。イャンガルルガ修羅種

ボクは今回大つぴらには動かないニヤ

ボクが出ると大体の奴らが『フンツきたねえ花火だ...』状態になるからニヤア...

だからボクが今回やることは...。

修羅ルガが逃げるのを阻止すること！

これに尽きるニヤ。

ジンくんは対空攻撃に向いてニヤいから修羅ルガが羽ばたきだしたらボクが跳び上がって叩き落すニヤ！

さて、説明している間に戦いが始まったみたいニヤ。

修羅ルガの攻撃を紙一重でかわしながらジンくんが叩き付けを食らわせてるニヤ！

修羅ルガも負けじと尾で弾いたりくちばしで突き返したりしてるニヤ。

どっちも良い戦いニヤ！こんなこと言ったら失礼だけどどっちも頑張れニヤー!!

〓 Now Loading 〓

ふう、白熱した試合だったニヤ…。

あ、戦いの結果はジンくんの勝利だったニヤ。

修羅ルガも善戦してたんニヤけど、やっぱり属性には勝てなかったニヤ…。

それで案の定ピンチになって逃げだそうとしたからボクが跳び上がって頭から軽く叩きつけてやったニヤ！

後はジンくんがそれに合わせて真帯電状態からの電撃弾で止めを刺して終わったニヤ。

「お疲れ様ニヤ〜ジンくん」

「オオオオーン！」

「え？腹ごなしに付き合えて？…しようがないニヤア…」

なら、付き合ってあげるよ、軽くな…ニヤ



その戦いを遥か上空から見つめる者がいた…。

それは深紅の甲殻を身に纏った赤き竜であった…。

その竜は一体と一匹の戦いをしばし眺めた後、女王領域の最奥部へと飛んでいくのいくだった。

アイルーでもハンターになれるのですニヤ!?

しよつくりよう♪しよつくりよう♪どっこかニヤア♪

オツス!オラアイル—!

今は見ての通り食料を探して散策中だニヤ!

お肉は良く喧嘩を売ってくるモンスターたちから手に入るから苦
勞しないけど、他の物はそうもいかないニヤ…

モンスターたちが持つてきてくれたりすればいいンニヤけど、流石
にそんなこと出来る訳ニヤいし…。

だからこうして自分の足で食調達に来ているのニヤ!

「さてさて〜目ぼしいものはあるかニヤ〜?」

「すみませぬそのアイルー?殿、ちよつと聞いてもよろしいですか
ニヤ?」

ニヤニヤ?他のヒトの声ニヤ、こんな所に来るなんて命知らず
ニヤア…

「えつと、聞いておりますかニヤ?」

え?もしかしてボクに話しかけてるのニヤ?

「…えつと、もしかして…ボクに話しかけてるのニヤ?」

「貴殿以外にアイルーは見当たらないのですがニヤ…」

あ…言われてみれば確かにそうだったニヤ…。

これは恥ずかしいニヤア…以前は話しかけられたらすぐ反応で
きていたのに最近ではモンスターたちとしか会話しないせいかな忘れか
けてる気がするニヤ…。

「これは失礼しましたニヤ…それでボクにどんな用かニヤ?」

「少しお聞きしたいのですが、この辺りで人間のハンターを見かけなかったですかニヤ？話し方がとんでもなく下手糞な…。」

話すのがド下手クソな人間のハンター？そう言えばここに来てからまだ一回も人間って見たことないニヤ！

というより同種を見るのはこれが初めてかもしれないニヤ！

「うーん…人間のハンターは見えないニヤ、モンスターのハンターならいくらでも見るンニヤけどね…。」

そもそも人間なんか見たら忘れるわけがないし、話しかけると思うニヤ！

ここでまともに話せるのって実質アプさんくらいしかいないんだからニヤ…。」

「そうですかニヤ…いや失礼、お邪魔しましたニヤ」

そう言って去ろうとして行く同種のアイル。

ちよつと話を聞いてあげようかニヤ？

「その人間のハンターを探しているのニヤ？どんな関係なのニヤ？」

「関係…ですかニヤ？そうですニヤ…主人…と呼べるヒトですニヤ」

「主人かニヤ…？」

という事は…お供アイルーってことかニヤ!?

そういえば確かにモンスターの素材らしき装備着けてるし、その考えで間違いなさそうニヤね。

「それならその主人さんをボクも一緒に探してあげるニヤ！」

食料調達もその途中でやればいいしニヤ♪

「…いいのですかニヤ？」

同種が困っているのに助けない訳がないニヤ！

「もちろんニヤ！任せるニヤ！」

念のためジンくんにも協力してもらおうかニヤ……。

〓〓Now Loading〓〓

「オオオオンツ」

「ジンくん、このヒトの旦那さんを探すのに手を貸して欲しいんニヤけど、良いかニヤ？」

「ウオオオンツ」

いいともー！つてなんでジンくんがそのネタを知ってるニヤ？

まあいいニヤ、それじゃあ協力してもらおうニヤ！

「し、修羅種のジンオウガと仲良く話している？！いったい貴殿は……」

「あー…… ただのアイルーつてことにしておいて欲しいニヤ、なんなら修羅種つて認識でも構わないのニヤ。とりあえず乗るニヤ！」

まあ普通アイルーがジンオウガと仲良く話してたら驚くに決まってるニヤね……

しかもそれが修羅種となれば驚きは大きいと思うニヤ……。

驚く同種を急かしてジンくんに乗ってもらい、ボクもジンくんに乗るに決まニヤ。

「さあジンくん……このヒトの…… つてそういえば名前はなんていうニヤ？」

「吾輩ですかニヤ？申し遅れましたニヤ、吾輩は業火と申しますニヤ……。貴殿は？」

「ボク？ボクはアイルー！家名も苗字も名前もない、名無しのアイルーニヤ！」

そもそもボク、ここに來て名前を呼んでもらったこと無いニヤ。

ジンくんでもアプさんでも『アイルー』とか『ルーくん』とかしか呼ばれないのニヤ

「な、名前がない？親に着けてもらわなかったのですかニヤ？」

親……人間だった頃にはいたけど、アイルーになってからは一度も見えてないニヤ……。

「親はいないのニヤ、ボク自身記憶がなくてここ一年の記憶しか分からないのニヤ」

「なんと……一年間もここで生活したいたのですかニヤ!?よくご無事でしたニヤ……」

「死ぬほど訓練したからニヤア……最初の頃はかなりキツかったニヤ……」

「オオオンツ」

ん？どうしたニヤ？ジンくん。

え？人間の匂いを嗅ぎつけた？さっすがジンくん！狼の鼻は立てじゃないニヤ！

早速向かって欲しいニヤ！

「ウオオオンツツ」

早くも業火さんの旦那さん発見かニヤ？

そうだと良いニヤア……。

「業火！心配したんだぞ！」

「ご心配をおかけして申し訳ないですニヤ、レクシア殿この方たちが助けてくれたのですニヤ」

「そうだったのか、えっと… 業火を助けてくれて… あ… りがと…」

「お礼なんかいいいニヤ！ね？ジンくん」

「オオオンツ」

ボクのお願いじゃなかったら襲ってた？駄目ニヤよ？やるんだつたら後でボクが相手してあげるニヤ。

「ウオオオンツ！」

はいはい、後でニヤよ？

「キミは… そのジンオウガの言葉が… 分かる… のか？」

なんだかたどたどしいニヤア…。これはいわゆるコミュ障って奴かニヤ？

「分かるニヤ、ついでに言うならボクとジンくんは友達ニヤ！」

「ツ!？」

ん？このハンターさん何をそんなに驚いた顔してるニヤ？

ジンくん、僕変なこと言ったかニヤ？

「オオオンツ」

モンスターと友達って言ったから？なんでニヤ？
ボクだってモンスターみたいなものニヤのにニヤア。

「えつと…キ、キミから感じる強さはじ、尋常なもの…じゃ、ない…後ろにいるジンオウガ…なんて目じゃないくらいの強さを感じる…キミは…どうやってそれほどまでの…強さ…をてっ手にいれたんだ？」

「どうやってって、ただ筋トレしながらサバイバルしてただけニヤ、そんな生活一年も続けてたらいつの間にかこうなってたニヤ」

また目を見開いてるニヤ…ボクの言ってることってそんなに變なのかニヤ？

「キミには…は、ハンターの素質があるかも…しれない…もしかしたらライダーも…」

へえ〜ボクにハンターかニヤア…って、え？

「は、ハンターかニヤアアアアアアア!？」

ハンターってみんなこんな人外？なのですニヤ？

ううう… アツツいにや…。

あ、はいどうも！清く正しい女王領域の獣人ネコ種。アイルーですニヤ！

今は森から離れて火山に来ているのニヤ！

やっぱり火山というだけあって超熱いニヤ…

毛がモコモコだからそのせいもあるんだらうけど… これはちよつときついニヤ…

こんな時はクーラーミートを作るニヤ！

実は前に業火さんをレクシアさんに届けた時に『業火を助けてくれたお礼』ってことで焼き肉セットと調合レシピを貰ったのニヤ！

氷結は前に雪山に行ったときに取って来てあるからいっぱい入ってるお肉を焼いてこんがり肉を作るニヤ！

そうと決まれば早速準備ニヤ！

「ゴアアア！ゴアアア！」

うう… イーオスがうるさいニヤ！

『弱猫パンチ』

【ドゴンツ!!】

「キョアアア…!!」

ふう、これで静かに調理出来るニヤ

さて、肉焼きセットを用意して… 調理開始ニヤ！

品名『クーラーミート』

材料 こんがり肉×1

氷結晶×1

この二つニヤ！

それじゃあ生肉を肉焼きセットに固定して…。

肉焼き開始ニヤ！

「ぷつはあ！生き返ったあ！いやあ助かったぜお前のおかげで命拾いましたよ」

「そ、それは良かったニャ…。」

「ああ、まさか火山に着てクーラードリンクも肉焼きセットも忘れるとはな…。流星に死ぬかと思った…。」

い、意外とドジなハンターなのかニャ？

「あ、紹介が遅れたな！俺はジエスト、本名は長いからジエストで覚えてくれればいい」

そ、そんなに長い名前なのかニャ？

「分かったニャ、ジエストさんボクはアイルーニャ！」

「アイルー？それがお前の名前なのか？」

「ないニャ、というより一年以上前の記憶がないのニャ」

これは業火さんにも話したけど実はウソニャ。

でもこうで言わないと信じてくれそうにないから仕方ないのニャ。

「そうかそれは悪いことを聞いたな…。」

でも一つ欠点があるニャ、この手の話題は確実に相手を暗くしてしまふということニャ…。

「別に気にしてないニャ！だから謝らないで欲しいニャ」

「ああ…。助かる…。」

「グオオオオオオツ!!」

…。良い所にいつもの乱入かニャ…。

空気読んで欲しいニヤ…

空気の読めない無粋なモンスターにはお仕置きニヤ!

「チツ… ここでターゲットのお出ましか、アイルー、お前は下がって…」

退いてるニヤ! ジェストさん!

【ドヒュンツツ】

『中並ネコパンチ』

【ドンツバラバラバラ…】

「ふう、片づけ完了ニヤ」

「…」

あれ? どうしてジェストさん目を見開いてるのニヤ?

「えーつと… ジェストさん? 大丈夫ですかニヤ?」

「… あ、いや、大丈夫だ… なあ、それより聞いていいか?」

「? なんですかニヤ?」

「今のグラビモス… お前が一撃で倒してたように見えたんだが… 気のせいか?」

「気のせいじゃないニヤ、一撃で粉碎したニヤ。あ、もしかしてあれがターゲットだったニヤ?」

それだったらすごい申し訳ないニヤ… 狩りの横取りってやれればたら凄く打腹立つものニヤし…。

「あ、ああ… まあそうなんだが…」

あつちやあ… やってしまったニヤ…

「それはごめんなさいニヤ… お詫びにアレの素材は全部持つて言うてイイニヤ」

元々僕には必要ないものニヤしね。

「… それはありがたい、じゃなくて一つお願いがあるんだが…」
ん？お願い？なんだろうニヤ？

「狩りの邪魔をしてしまったお詫びニヤ、ボクで出来ることニヤらなんでもするニヤ」

「そうか、なら…」

「俺の妻、エクセリアのオトモになってくれ！」

…ハニヤ？オトモ…？

「にやニヤアアアアアアアア!？」

ボク、ニヤンターになりますニヤ

ボクの名はアイルー、獣人種だニヤ…。

今ボクはジエストさんに連れられて気球の中にいるんだニヤ！

初めて知ったけど、女王領域つて周り全部海だったんだニヤア…。

基本的に森の中で生活してたから気が付かなかったニヤ。

あ、そういえばあの後、オトモにはならないけど一時的な用心棒だったらしいという条件でジエストさんの依頼を受けたのニヤ。

ジエストさんもそれで良いって言ってくれたからそれで話が落ち着いたのニヤ

その後はもうトントン拍子だったニヤ。

依頼を完遂(ボクが邪魔しちゃったけど…)したジエストさんがボクを連れて気球に乗り込んで後はそのまま空の上までまっしぐらニヤ！

かなり上空まで上がって初めてボクは女王領域が絶海の孤島だという事を知ったニヤ。

「ニヤニヤアアア…。」

「驚いたか？自分の住んでた島が絶海の孤島だよ」

「ニヤー、凄いビックリニヤ、あんな風になっていただけニヤんて知らなかったのニヤ」

「ははは、そうなるのも無理はねえよ、なんとたつてあそこは元々絶島と呼ばれる草木も生えないただの島だったんだ、それをアイツがあんな風に変えちまったんだよ」

ニヤニヤ!?そんなチートみたいなやつがいるのかニヤ!?

ニンゲン…は多分ありえニヤいから…やっぱりモンスターかニヤ?

「アイツって誰の事なのニヤ?」

「……ッ!」

え?そこでどうしてそんな『しらないとかマジか!』みたいな目でみてるニヤ?

「おいおい、真面目に言ってるのか?あの島に住んでいてアイツの存在を知らないなんて相当だぞ……」

「そ、そんなニヤこと言われても分からニヤいものは分からニヤいのニヤ!」

そもそもアイツって誰ニヤ?女王領域に住んでいて知って当たり前って……そんなのアプさんにもジンくんにもナルさんにも聞いたことないニヤ……

「ああ……そういやお前記憶がないんだっけか、それじゃあわからなくても仕方ないかもしれねえな、俺の言う『アイツ』って言うのは星焰竜『スファイア・ルフネ』リオレイアでありながら古龍化を果たしてしまった史上最強の飛竜だ」

「星焰竜『スファイア・ルフネ』?」

なんニヤ!?そのモンスター!!飛竜種が古龍種になったってどういうことニヤ!?

一体何をどんな風にしたらそんなことが起こるのニヤ!?

しかも話しぶりからするにその星焰竜ってモンスターがその絶島という何もなかった島にあれだけの環境を作り出したってことになるニヤ……

「いったいどんなモンスターなのニヤ……」

「…その反応から見るにお前、マジで星焔竜の事を知らないらしいな… 何度か見かけたことなかったのか？ 同じ島に住んでたんなら一度や二度見てるだろ？」

「分かんないニヤ、どんなモンスターかも知らにやですからニヤ…」
そもそもあの島見たことないモンスターが多すぎるのニヤ！

何ニヤ?! ブラキディオスとかデイノバルドって!!

あんなモンスター3rdに出てきてないニヤ！

そんな奴ら知るわけないに決まってるニヤ!!

ふう… 思考が逸れたニヤ、落ち着こう…。

「アイツの見た目か、結構目立つぞ？ 身体が白金で通常のリオレイアより一回り以上デカいし、古龍特有の角が三本生えてるからな」

「それどこバケモノですかニヤ？」

最早リオレイアじゃないニヤ… リオレイアの皮を被った何かニヤ…

「まあ、確かにアイツは常識の範囲から大きく外れた存在だからな…」

… なんだか、今、頭の中に（お前が言うな）って聞こえてきた気がするニヤ…。

〓Now Loading〓

「着いたぞ、ここがドンドルマだ」

「はニヤア… 大きい街だニヤアア…」

沢山のヒトが行き交ってるニヤ…。

周りは建物ばかりニヤし、奥の方には二回り以上大きな建物が見えてるニヤ……。

「エクセリアはギルドで妹の手伝いをしているはずだ、とりあえずハンターズギルドに向かうか」

「分かったのニヤ」

ハンターズギルドってハンターがクエスト受けに行く所ニヤよね？

そんなところにボクが行っても大丈夫なのかニヤ？

くくNow Loadingくく

「やっぱりここにいたか」

「何をしに来た？このバカ兄……」

「お帰りなさい、あら？そちらの方は？」

「今回は一段とお早かったですね、そこまで強くなかったですか？」

ニヤー…… なんだか女のヒトと紙の山がいっぱいだニヤ……。

「あ、ああ、一撃だった……」

ジエストさんがボクをちらりと見ながらそう話すニヤ。

ジエストさん、なんでそこでボクを見るニヤ？

ハッ！まさかまだ獲物を横取りされたことを恨んで！！

「それはそうとエクセリア、お前に良い知らせがあるんだ」

「いい知らせ？なんですか？」

「お前にオトモを付けようと思うんだ、コイツをな」

「まあ、この子を…。」

オトモじゃニヤい言っただけなのに…

「ちよつと待ってジエスト、エクセリアにオトモを付けるのは構わんが、このアイルー、どう見ても野生じゃないか！いったい何処で拾った！」

「あ？どこって女王領域の火山だよ」

「……は？」

ジエストさんをバカ兄と呼んでいたヒトがそれを聞いて固まっちゃったニヤ。

この二人の話し合いはまだ続きそうニヤし、今回の護衛対象のエクセリアさんに挨拶してみるニヤ！

「初めましてニヤエクセリアさん、ボク、アイルーですニヤ！オトモって訳じゃニヤいけど、少しの間よろしくお願いしますニヤ」

「え、ええ、こちらこそです… それにしてもアナタ、女王領域から来たって言っていましたけど、どうやってあそこに行ったのですか？」
ンニヤ？どういふことニヤ？

「行ったんじゃないニヤ、ボクはあそこに住んでるのニヤ」

エクセリアさんの護衛が終わったらまた変えるつもりだしニヤ…。

「え!?住んでる… ?でもあそこにアイルーやメラルーが生息してい

るなんて情報は無いはずなんですけど…。」

「ニヤツ!?それホントですかニヤ!?」

「え、ええ…。」

なんということニヤ… それで今まで業火さんとか仲間に会えなかったってことかニヤ…。

一年以上暮らしてきて変だニヤーとは思っていたけどまさか一匹もいないだニヤなんて思いもしなかったニヤ…。

「それにしても、あそこに住んでいて、あの子には会っていないのですか?」

「ニヤ?あの子?」

「星焰竜です。星焰竜『スファイア・ルフネ』」

またその名前ですかニヤ?

「ジエストさんにも言ったんニヤけど、ボクはそんな龍に会ったこと無いニヤ」

「それが正解です。あの子を見かけたら迷わず隠れた方がいいですよ?あの子、アイルーには目がないので… しかもあなたみたいにモコモコフワフワの子なら尚更…。」

ニヤアア… 聞きたくない情報だったニヤ…。

これは見つかるわけにはいかないニヤ…

「ご忠告ありがとうございますニヤ、気を付けるようにするニヤ」

星焰竜『スファイア・ルフネ』を見かけたら即座に隠れる。

肝に銘じておかなくちゃニヤ!

「それであの… その毛並み、ちょっとモフモフさせてもらってもいいですか?」

「… ハニヤ?」

〓Now Loading〓

二人の話し合いが済んで戻ってくるまで、ボクはエクセリアさんにモフモフされっぱなしだったニヤ…。

撫でられるのは気持ちいいんだけど、動けないからちよつと辛いニヤ…。

「今戻った… って、何してんだ? エクセリア?」

「アイルーくんをモフモフしました」

「うーん、そろそろ離して欲しいニヤ…。」

「あ、ごめんなさい… あまりに気持ちよくてつい…。」

気持ち良いつて言ってくれるのは嬉しいんニヤけど、流石の長時間抱かれっぱなしはキツイにや…。

「… まあ確かに気持ちよさそうではあるがな… それより、お前の待遇についてなのだが、ジエストから聞いたが、今回のクエスト、お前が倒してしまったそうだな? しかも一撃で…。」

ニヤニヤ! ジエストさん言っちゃったのニヤ!?
ってこら! 目を背けるニヤ!

「それを聞いて耳を疑ったが、思い出したよ。以前観測隊から修羅種

を秒殺したアイルーがいるという報告を…。

その時はまさかと思つたが、まさか本当にいるとはな…。」

ニヤ… 一つの間に見られてたのニヤ？

修羅種が喧嘩売ってくるのなんて日常茶飯事だから一々殴つた相手のことなんて覚えてないニヤ。

「モンスターであれば問答無用で討伐依頼を出すところだが、お前に暴れる意思はなさそうだし、腕に自信もありそうだからな、特例としてお前をハンターとして登録することにした。史上初のネコハンター…。名付けて『モンスターニヤンター』だ」

「モンスター…。」

「ニヤンターかニヤ？」

「というかボクハンターになつちやうのニヤ!？」

「ちよ、ちよつと待つてくださいニヤ!ボク、また女王領域に帰るつもりなのにどうするのニヤ!?!ずっとこの街にいることは出来ニヤいのですニヤよ!?!」

「その点に関しては問題ない、ジエストからある程度話は聞いている。お前がこの街にいる間はエクセリアの護衛としてエクセリアが受けたクエストにお前が付いていく、名目上はオトモとしてな」

「ニヤ、ニヤるほど… でもボクが帰っちゃつたらどうするニヤ？」

「それについても考えてある、これを見てくれ」

「そう言つて一枚の紙を見せてくる女のヒト…。」

ニヤにニヤに…? ?

【女王領域の調査】

えーと、討伐対象は無し、女王領域の中を探索して地図を作つてい

けばいい…

なんだこんな事かニヤ？

「これともう一つ、これだ」

【天地鳴動の星焰竜】

討伐対象は… 星焰竜『スファイア・ルフネ』ニヤ!?
話に聞いてたバケモノ龍を倒せって言うのかニヤ!?

「この二つがどうしたのニヤ？」

「お前は女王領域を住処にしているのだろうか？なら、女王領域内の地形もよく知っているだろう、だからその地図の作成と二枚目は見ての通りだ、

星焰竜『スファイア・ルフネ』の討伐依頼だ。

無論こつちは無理にやらなくてもいい、アイツは強い、これ以上大事な戦力を失いたくはないのでな… もしやれそうなのであればお願いしたいのだ」

ホッ… それならよかったのニヤ…

でも、それだと必然的に見つかるようなモノニヤ…。

「それに、以前レクシアの奴が女王領域で修羅種のジンオウガを従えているという報告も聞いている。それはお前だと思っただが、違うか？」

レクシアさん… 何話しちゃってるのニヤ…。

「間違いないニヤくボクのことニヤ、でも従えてるんじゃないニヤ！
ジンくんはボクの友達ニヤ！」

「っ！」

なんだかエクセリアさんが驚いた顔してるけどどうかしたのか

ニヤ？

「そうか、レクシアの言っていた通り、ライダーの素質もあるのかもしれないな。わかった、ライダーとしても登録しておこう、オトモン、いや、お前の友は何がいる？」

「えっと、アプトノスのアップさんに、ジンオウガのジンくん、それとナルガクルガのナルさんだニヤ！」

因みにいずれも修羅種ニヤ。

G級固体や変異体、小型モンスターたちは何故か滅多に僕に襲って来なくなったからニヤア……。

「う、うむ……中々多いのだな……分かった、ではその内の一体であるジンオウガをオトモンとして登録しておこう」

「お願いしますニヤ！」

「私からの話は以上だ、何か質問はあるか？」

「質問というか聞いてみてもいいニヤ？」

「ん？なんだ？」

「この書類の山、ボクも手伝ってあげた方がいいかニヤ？」

「救世主よ!!」

その後、一週間以上エクセリアさんと一緒に女のヒト、もといギルドマスターセレシアさんのお仕事を手伝わされたニヤ……

もう紙は当分見たくないニヤ……。

ニャンター初仕事ですニャー!

こんばんは、アイルーです。と、アイルーはふと自己紹介をしてみますニャ……。

今日はエクセリアさんとクエストに行くことになったのニャー!

エクセリアさん曰く、『旦那やあの子に負けてはいられないから』とのことだったにニャ。

そういうことニャら喜んで協力するニャー!

「エクセリアさん、クエストは何をやるのニャ?」

「ええ、今回はウラガンキンに行ってみようと思ってます。旦那もいませんし、アイルーくん、協力してくれませんか?」

「もちろんニャー!用心棒兼オトモはしっかり務めさせていただきますニャー!」

そうじゃニャいとジェストさんに切り刻まれちゃうニャ……

「ふふっ頼もしいですね、頼りにしていますよ」

「任せるニャー!護衛とサポートは任せるニャー!」

それにしてもウラガンキンかニャ、ゲームしていた時に初めて戦ったウラガンキンが固すぎてイライラしてた記憶があるニャア……

今ではいい思い出ニャ……。

今回もボクは大っぴらには戦わないニャ、あくまで戦うのはエクセリアさん、僕はそのサポート役ニャー!

内容は前回のジンくんの狩り手伝い(第四話参照ニャ)の時と似ているニャ。

ここで違ってくるのは今回の護衛対象がニンゲンだという事ニャ。

ジンくんはモンスターで修羅種だから獲物が逃げる前にボクが追い詰める、というものだけだったけど、エクセリアさんの場合はそう

言う訳にはいかないニヤ。

アイテムでのサポートや、モンスターのヘイトをボクに移して注意を引いたり、エクセリアさんが危ニヤいの時は助けに行つてあげなきやとやることは沢山だニヤ！

だから今回はボクも気合を入れて準備をしてきたのニヤ！

もちろんボクが戦えば一瞬で終わるんだろうけど、それじゃあ面白くニヤいし、ジエストさんの時の二の舞になつてしまふニヤ。

だから今回はサポート役に徹するニヤ

「さて、それじゃあ行きましようか」

「了解ニヤー！」

さあ、一狩りいくニヤー！

〓〓Now Loading〓〓

熱いニヤ… あまりの暑さに解けてしまいそうニヤ…。

忘れてたニヤ、ウラガンキンの生息地が火山だつてことを…。

「大丈夫ですか？アイルーくん？」

「は、はは… だいじよばないかもニヤア…。」

もう本格的に溶けそうニヤ… クーラーミートもその材料も全部エクセリアさん家のボックスにしまつてきちゃったからアウトニヤ…。

これじゃあサポートなんてもつての外ニヤ。

「私の分のクーラードリンクが余ってますから良かったらどうぞ」

へ？いいのニヤ？でも、それじゃあ効果が切れた時に困っちゃう

ニヤ…

「やめとくニヤ、エクセリアさんが必要ニヤ時の為に持つててくださいニヤ」

「こんなの気合でなんとかして見せるニヤ！」

「一本くらいなら問題ないですよ、無くなっても支給品の物が少しありますからね」

「そういえばそんなものもあつた気がするニヤア…。」

「でもこのクエストって上位のものだった気がするニヤ、来るまで保つのかニヤ？」

「本当にいいニヤ？」

「ええ、ご心配なく…。」

「それじゃあお言葉に甘えるニヤ…。」

「クツクツクツクツ… ぷっはあ！生き返るニヤ！」

「これで暑さともお別れニヤ！」

「やっぱりニンゲンの作るアイテムって便利ニヤ！」

〓〓Now Loading〓〓

「見つけましたね、アイルーくんはサポートをお願いします！」

「任せろニヤー！」

「懐から角笛を取り出して思いっきり吹き上げるニヤ！」

【プオーンツプオーンツ】

「ゴルアアアアアツ!!」

よし、こつちに注意が向いたニヤ、後はエクセリアさんに注意が向かないよう、ボクが囷になって逃げ回ればいいニヤ!

ついでに挑発も入れとしてみるニヤ!

やーいやーい!顎デカブツ!悔しかったらボクをその無駄にデカイ顎で潰してみるニヤー!!オシリペンペーン!

「ゴルアアアアアツ!!」

『訳、こんのクソ猫がああああつぶつ潰す!!(ビキビキツ)』

よーしよし、これなら大丈夫そうニヤ、それにしてもエクセリアさん攻撃の仕方は片が綺麗だニヤア:~。

ボクのは完全に我流だから人に見せられるようなものじゃないニヤ。

さつきからすぐくウラガンキンに追い掛け回されてるけど、エクセリアさんやりづらかったりしないかニヤ?

「:~ ツ!(フルフルツ)(グツ)」

えーと:~?今のは恐らくきつと:~。

『私は大丈夫ですからもつとやっつけてください!』

って意味だと思うニヤ!多分:~

それならもつとやっつけてやるニヤ!!

~~~~Now Loading~~~~

「ゴルアアアアアアツ:~」

【ズシンツツ】

「ふう、終わりましたね」

「お疲れ様ですニヤ、エクセリアさん」

あの後、ボクが散々挑発しまくってウラガンキンのヘイトを集めまくっていたおかげかエクセリアさんは一撃も攻撃を喰らうことなく無傷でウラガンキンを討伐してたのニヤ。

途中、怒り状態になったウラガンキンがエクセリアさんを狙いかけた時にはヒヤツとしたけど、煽りまくってやったらあっさりこっちに注意が向いたから良かったのニヤ。

「ありがとうございます。これもアイルーくんのサポートのおかげです  
すね」

「ボクは何もしてないニヤ、精々敵の注意を引いて逃げ回っていただけ  
ニヤ」

「そんなことをずっとやり続けるだけでも十分凄いですけど…  
ど…」

まさかあ、このくらいニヤらランゴスタでもできるニヤ！

【ビュウーツバサツバサツ】

ニヤ？何か来るニヤ？

「アイルーくん？どうかしましたか？」

「エクセリアさん、ここから離れた方がいいニヤ」

「え？」

【バサツ…バサツ…ズズンツ】

「グルアアアアアアツツ!!」

な、なんでコイツがここにいるニヤ!?

「リオレウス修羅種!? どうしてここに…!」

「… エクセリアさん、今すぐここから離脱するニヤ、ここはボクが食い止めておくからニヤ」

それに、どうやらコイツの目的はボクみたいだしニヤ…。

「何を言ってるんです! そんなこと出来る訳が「今ここに居られても邪魔なだけニヤ!」… ツ!」

「頼むから先にドンドルマに戻っていて欲しいニヤ、そうしたら後でいくらでも言うこと聞いてあげるからニヤ」

流石に修羅種相手に守りながら戦うのはちよつとだけ厳しいからニヤア…。

「… 分かりました、ならアイルーくんも無事に戻ってきてくださいね?」

「分かってるニヤ!」

戻り玉で戻っていくエクセリアさんを見届けてボクはゆつくりと口を開くニヤ。

「それで? おまえは何をしにこんなところまで来たのニヤ?」

「グルアアアアアア!!」

はあ? おまえを倒して名を上げる? 何言ってるんだかニヤ…

ボクがそんな有名な訳ないじゃないかニヤ。





こんな奴が修羅種なのかニヤ？  
ジンくんを見習ってもつと鍛え上げてから来やがれニヤ!!



うわあ…アレ一体何なのよ…。

胸騒ぎがしたから奏音に何かあったのかと思っ  
てきてみたらさ、ナニコレ？

何で修羅種のリオレウスがこんなところにいる訳？

アンタ女王領域にいるはずでしょ？何勝手に脱走してくれちゃつてんの？

というかそもそもアンタ何狙ってるのよ、アンタの目の前にいるのってどう見たってアイルーじゃない！

そんな可愛くて尊い生き物相手に襲い掛かるとか…。

もう万死に値するね、よし、あのリオレウス殺ろう！

「さつきから口ばかりで煩いだけニヤ！喰らえニヤ！」

『強連続ネコパンチ』

…え？何今の…アイルーがリオレウス粉碎したように見えただけど…？

えっと、これって幻？

いやいやいや！現実だね…

え？でもアイルーってリオレウス屠れるもんなの？

確かにゲームではバグ猫なんて存在も一時間いたけどさ…あれはネコじゃない、ネコの皮を被ったナニカだよ。

とりあえず降りてみようか、あのアイルーの事も気になるしね

くくNow Loadingくく

「ニヤニヤ!?!」

うん、見たところ普通のアイルーだね。

どことなく大きい気もしなくもないけどいたって普通のアイルーだよ。

子の子がさつきのリオレウスを秒殺? しちやっただから驚きよねー

「ニヤ... ニヤ...」

ん? どうかしたの?

「星焰竜ニヤーーーーー!!!」

え!? なんで逃げられたの? 私ってそんな怖い?

あ! さては奏音達が何か教えたね?

ハア... アイルーに逃げられるとかなりショックが大きいね...

でも今ので思い出したよ、前にレウスが女王領域にジンオウガ修羅種と闘りあっているアイルーがいるって言ってたことを...

さつきの光景からして多分、あのアイルーがレウスの言ってた子なんだろうね。

それにしても気持ちよさそうな毛並みだったなー。もし次会ったらモフモフさせてもらおうかな

街での一時ですニヤー！

はあ… なんとかついたのでニヤ…。

あ、自己紹介しておかニヤいとニヤ。

ぱんぱかぱーん！ボクアイルーだニヤ！

今はちよつと訳あつて街に戻ってきたところなのニヤ。

その理由？今から説明するニヤ…。

あ、ありのままに今までボクが体験してきた出来事を話すニヤー！

ボクはエクセリアさんを逃がすために修羅レウスを相手して倒してたと思つたらいつの間にか目の前に星焰竜が立っていたのニヤ…。

ニヤにを言っているのか分からニヤいと思うけど僕にも何が起こつたのかさっぱりだったニヤ…。

瞬間移動や高速移動なんてものじゃ断じてニヤい… もつと恐ろしいものの片りんを味わつたのニヤ…。

というわけでボクは命からがらドンドルマに戻ってきたのニヤ。

全力で走つて…。

もうなりふり構つていられるほどの余裕はニヤかつたからとにかく全力で走つてきたのニヤ。

それで最初に帰化するという訳にや…。

と、ここでボーつとしててもどうしようもニヤいし、エクセリアさんに顔を見せに行つてこようかニヤー！

くくNow Loadingくく

「ただいまですニヤーー！」

「っ！アイルーくん！」

【ガシッ】

「ニヤニヤニヤッ!?ど、どうしたんですニヤ?」

ニヤ、ニヤんでボクはエクセリアさんい抱きしめられているのかニヤ?」

「よかった... 本当に無事でよかった...」

「だから言ったじゃねえか、アイツの事は心配いらねえってよ、ソイツの強さは人外のそのものなんだからな」

「グスツ... それだけはあなたに言われたくないと思います...」

「というより何言ってるのニヤ? ジエストさん、ボクは元々人外ですニヤ」

「ぐっ... 正論で返さなくていい! ってかエクセリアそれはどういう意味だ? 俺はいたって普通だぞ?」

あ、また頭の中に(お前のような普通がいるか) って聞こえてきた気がするニヤ...。

「と、とにかくエクセリアさん、ボクニヤら大丈夫ニヤ! だからそろそろ離してくれると嬉しいんだけどニヤア...」

「ダメです。まだ放してあげません...!」

えええ... なんてニヤ...。

〳〵Now Loading〳〵

はあ、なんとかやつと解放されたのニヤ……

一時間くらいずっと抱きしめられながらモフられ続けてしまったのニヤ……

うう……背中痛いニヤ……

「ああ、そういえばレウスが久しぶりに帰って来てるんですよ」

「レウスが？へえ、アイツが帰って来てるなんて珍しいじゃねえか」

誰ニヤ？そのレウスって……

それだけ聞くとリオレウスしか浮かんでこニヤいのは僕だけかニヤ？

「ニヤア……レウスって誰のことニヤ？」

え？二人ともそこで『え？知らないの？』みたいな顔して僕を見ないで欲しいニヤ……

「そういえばアイルーくんは知らなかったですね、レウスというのは私のオトモンのリオレウスの事なんです。普段は居ないんですけど、今日は珍しく帰って来てるんです。アイルーくんのことを話したら興味深そうにしていましたよ？」

「ニヤニヤ!?エクセリアさんのオトモン!?という事はエクセリアさんってライダーだったのですかニヤ!？」

「ええ、実はそうなんです。ふふっそうなると私はアイルーくんの先輩という事になりますね」

これは初耳ニヤ……だからあの時驚いたような顔をしてたんだニヤア……

「レウスもアイルーくんに会ってみたいと言っていたので挨拶も兼ねていって見たらどうですか？レウスなら宿舎にいますので」

「そうニヤのですかニヤ？ニヤら、ちよつと挨拶に行つてきますニヤ！」

エクセリアさんのオトモン、どんな方ニヤのかニヤー…。

〽〽Now Loading〽〽

で、来てみたけれど、大きい宿舍ニヤねえ…。

これならモンスターも問題なく寛げそうだニヤ。

とりあえずレウスさんは… あ、いたニヤ！

でもなんか… リオレウスにしては色が濃くないかニヤ？

アレが噂に聞く特異体とか変異体と言うものなのかニヤ？

とりあえず挨拶ニヤ！

〽〽Now Loading〽〽

初めましてボクアイルーですニヤ！

「グルアアア」

初めましてって、凄く礼儀正しいリオレウスさんだニヤ。さすがはエクセリアさんのオトモンだニヤ…。

「グルアアア」

え？実はボクとは初めてじゃニヤい？どういうことニヤ？

「グルアアア」

え？ジンオウガと戦っている所を見させてもらった？

ニャー…まさかみられていたニャんてニャア…。

「グルアアア」

ニャニャ!? スファイアさんにも報告したのニャ!?

「ニャ…ニャ…ニャ…」

「グルル？」

「ニャんてことしてくれてるのニャアアアアアアアアアア!!!」

「グルアアア!?!」

落ち着けてこれが落ち着いていられるかニャー!

せつかく目立たないようにひっそり生きていこうと思っていたのに… 存在を知られちゃったら完全い目を付けられ字ちやうじやニャいですかニャ…。

「グルアアア」

大丈夫、あの方は乱暴なことはしないはず？

そんな言葉信用できニャいのニャアアアアア!!

エクセリアさんにも隠れた方がいいって言われてるくらいニャからきつと死ぬよりひどい目に遭わされるのニャ…

ニャアアアアアまだ死にたくないニャアアアアア  
!!!!!!

「グルツグルアアア」

ニャアアアアア! 慰めも謝罪もいらニャいニャ… もう駄目だ… お終いニャアアア…。

「グルアアア… 『訳、駄目だこの猫早くなんとかしないと…』」



帰ってきたのニャー！女王領域！

！  
ヤッホニャー！ボクの名前はアイルー！名前だけでも憶えて…

逝ってニャー！

と言ってもボクはどこぞの猫精霊みたいに氷の魔法をぶっ放したりしないニャ。

レウスさんとの対面から半年、ボクはエクセリアさんのオトモ（オトモじゃニャいけど…）を終えて、女王領域へと戻って来てたニャー！

「ニャー…半年もいなかったのにここはあんまり変んニャいニャー」

でもモンスター達は若干変わってたりするんだろうニャア…。

早速住処に戻りたいところニャけど、今まで集めてた素材や食料は全部エクセリアさんの所にあげてきちやっつてボクの手持ちは空っぽニャ。

「はあ…仕方ニャいニャ、食料を集めながらゆっくり戻るとするかニャ」

あ、それとセレシアさんに頼まれた地図の作製もついでにやっつておこうかニャ。

〓〓Now Loading〓〓

「ギャルアアアアア!!」

「うるさいニャー！お前達は一々叫ばないといられないのかニャー！」

『超弱 十分の一ネコパンチ』

【ドゴンツ】

「ギユツ?!?!」

【ズズンツ】

ふう、上手いことバラバラにしないで倒せたニヤ。

え?今倒したのはニヤにかつて?

えっと、確かコイツはフルフルのG級固体ニヤ。

地図製作も兼ねて雪山と凍土に来てみたらこいつが喧嘩売ってきたから相手してやったニヤ。

一撃ニヤつたけど……

「ともかくこれでお肉は確保出来たニヤ!雪山草でも取って帰ろうかニヤ」

フルフルのお肉って噛みづらいからできれば他のモンスターが来てくれると嬉しいんだけどニヤア(チラツ)

………

誰も来ないニヤ、仕方ニヤいしササつと地図作って別の地域に行くニヤ!

そういえば今日は修羅種の姿を全く見ニヤいけどどうしたのかニヤ?

〳〳Now Loading〳〳

というわけでやってきましたニヤ!樹海!

いやーそれにしても地図作りって大変だニヤ……

ボクが見るだけニヤら適當でも…ってボクの場合はこの辺の地理は頭に叩き込んであるから問題ニヤいけど…。

これはドンドルマや他の村?の人達が見る者らしいからニヤ、しっかり作っておかなニヤいとセレシアさんに怒られちゃうのニヤ。

「さて、雪山、凍土は出来たし、今度はここで食料調達しながら地図作りだニヤ!」

「ギャガアアアツ」

ん?この声は確か…。

「なんだ、やっぱりナルさんだったのニヤ」

「ギャガ?」

「え?ここでニヤしてるかって?ご飯集めに来てたのニヤ」

「ギャガアア?」

「え?『アンタの生息域は森じゃない』って?たまには森以外の食べ物も食べたいのニヤ!」

「ギャガアア…」

『『ここでも取れる物は似たようなモノ』?そ、それはそうニヤけど…気分ニヤ気分!』

「ギャガ」

「むう…そんな呆れたような仕草しないで欲しいのニヤ!」

このモンスターはナルさん、ナルガクルガのナルさんだニヤ。

ボクのお姉さんの人で仲の良いモンスターの一体ニヤ！  
構図としては……。

アプさんが母親、ジンくんが弟、ナルさんはお姉さんみたいな感じ  
ニヤ。

「ギャガアアア？」

「え？ついて来てくれるニヤ？ちょうど話し相手が欲しかったところ  
だったのニヤ！」

「ギャガアアアア」

『『どうせ暇だったし』かニヤ？狩りはしなくていいのニヤ？』

「ギャガアアアア」

『『空腹じゃないから必要ないとりあえず乗りなさい』ニヤ？いいの  
ニヤ？ナルさん背中に乗られるの嫌いじゃニヤかったかニヤ？』

「ギャガアアアア」

『『今日は特別』って、ありがとニヤー！ナルさんだいすきニヤー！』

「ギャガアアアア……」

「へ？ニヤにか言ったかニヤ？」

「ギャルアアアアア!!」

『『何でもない！』のニヤね……。』

わ、分かったニヤ……分かったから背中にいる時に大きな声出さな

いで欲しいニヤ…」

ダメージがある訳じゃニヤいけど、うるさいから勘弁してほしいのニヤ…。

ともかく、これで地図作りが捗るのニヤ！

〓Now Loading〓

「そう言えばナルさん、他の修羅種はみんな何処行つたニヤ？」

「ギャガアアアア」

「え？『操られたみたいはどこかに行つた』のニヤ？」

おかしいニヤ、モンスターを操るモンスターニヤんていた記憶がニヤいんだけど…。

「ギャガアアアア」

「え？ナルさんにもあつたのニヤ!?!どうしてナルさんは無事なのニヤ？」

「ギャガアアアア」

『『多分、以前にアンタにぶん殴られてるからそれで対抗力が出来た』？はあ、じゃあボクと戦つて生き残つてた修羅種のモンスターはまだいるということニヤね』

「ギャガアアアア」

『『恐らくね』かニヤ？そつか、じゃあ早く戻ってきてくれるといい

「ニヤア…」

G級固体のお肉じゃちよつと物足りないのニヤ…。

「ギャガアアアア」

『調査してみる？』かニヤ？うん、興味ニヤいニヤ、のんびりゆつくりしてる方がボクの性に会ってるニヤ」

「ギャガアアアア」

『アンタならそう言うだろうと思った』かニヤ？よく分かってるニヤア♪ナルさん」

そんなことを話ながらボクたちは樹海の地図作りと食料調達を進めていくのだったニヤ

星焰竜に挨拶ですニヤ!

や!ボクアイルーだニヤ!

こう見えても瞬殺で君達を粉々にできるニヤ

と、物騒なことはさておいて、今は引き続き地図作製のために女王領域を散策してるのニヤ。

さて、今日は何処に行こうかニヤ?

「ルオオオ」

「え?アプさん今なんて言ったのニヤ?」

聞き間違いじゃニヤければ最奥部に行けって言ってなかったかニヤ?

「ルオオオ」

「え...アプさん、それ本気で言っているのかニヤ?」

コクリと頷くアプさん。

アプさん...ボクに死ねというのニヤね...。

「ルオオオ」

「え?『ルーくん、あの方にまだ挨拶してないでしょ?』って?そりやあそうニヤけど...」

挨拶に行ったが最後、もう戻ってこられない気がするんだニヤ.....

「ルオオオ」

『一言だけでもいいから挨拶してきなさい』かニヤ?ううう...分

かったニヤ、アップさんがそこまで言うニヤら行ってくるのニヤア……。」

これで日の目を見れニヤくなったらアップさんを恨むからニヤ？

くくNow Loadingくく

はああああ……来てしまったのニヤ……。

今ボクが立っているのは女王領域の最深部にある星焰竜の樹と呼ばれる超が付くほど巨大な大樹ニヤ。

老山龍ラオシャンロンの数十倍はあるその樹には飛竜種が数多く生息しているのニヤ。

そして名前の通り、この樹の天辺にはあの星焰竜の巣があるというわけニヤ。

登るのは簡単ニヤ、簡単ニヤンだけど……。

「すぐく……行きたくニヤい……。」

道中の飛竜種を相手にしていくのは別にいいニヤ、多分みんな一撃だからニヤ。

けど、星焰竜だけは話が別ニヤ、実力云々もそうニヤけど、エクセリアさんの話によるとアイルーやメラルーに何か思うところがあるみたいな口ぶりだったのニヤ……。

「けど、行かニヤいとアップさんにまたどつかれそうニヤし……行くしかニヤいよニヤア……。」

仕方ニヤい、○○ー！いざ！出撃するニヤー！

とりあえず一気に距離を詰めるために……！

跳ぶニヤー！！

【ドツツツツゴンツツツ!!!】



〓 Now Loading 〓

ニヤハア〜♪すごい勢いで飛んでいくニヤア…  
それにしても、もしかしてボク、？また強くニヤってるのかニヤ？  
前までこんなスピード出た記憶ニヤいんだけどニヤ…。  
本気で飛んでる訳でもニヤいのにこれは早いニヤ。  
おっと、そんなこと考えている間に速度が落ちてきてるのニヤ、そ  
ろそろ樹を登っていくしかニヤいみたいだニヤ。

「グルアアアツツ!!」

あ、野生のリオレウスが襲ってきたニヤ!

「ニヤンてニヤ、喰らえニヤ!」

『ネコパンチ』

【ボンツツツ】

全く邪魔しニヤいで欲しいのニヤ…。  
さっきのでまた速度が落ちちゃったのニヤ。  
仕方ニヤい、もう樹に引っ付こうかニヤ…。

【ガスガスツツ】

爪を差し込んで固定させるニヤ。  
爪が折れたりしないのかってニヤ？

心配無用ニヤ!ボクの爪は業火さんや他のアイルーと違って滅茶  
苦茶頑丈なのニヤ!

それこそゲーム内でハンターが剥ぎ取りに使うナイフみたいに頑  
丈な優れモノニヤ!

さて、後は登っていただけニヤけど…。

普通に登つたら日が暮れちゃうのニヤ、けど普通に走ろうとしたら地面に真つ逆さまニヤ。

こうニヤつたら奥の手を使うニヤ！

「いくニヤ、奥の手…。」

——必殺ガチシリーズ——」

『ガチネコダツシユ』

【ズツツドソツツツツツツツツツ!!!】

ガチネコダツシユ…!! これはボクの本気の一つだニヤ。

通常のダツシユとは違い、実力の五割ほどを出して全力疾走する技ニヤ。

これで早さは多分超雷速並くらいだったはずニヤ。

ボクが通常時に走れば音速は叩きだせるからニヤ。

これはナルさんが言っていたから間違いないニヤ！

ナルさんも修羅種だから並の固体より数千倍も速いからそれを余裕で追い抜ける速度が出せるだけあって音速くらいじゃニヤいかつて話だったニヤ。

と、そろそろ頂上が見えてきたのニヤ。

このまま一気に逝くニヤ！

〓〓Now Loading〓〓

「ふう、なんとか着いたのニヤ」

この世界に来て初めてちよつと本気出したかもニヤア…。  
でも…。

「目的の星焰竜の姿が見当たらないニヤ」

ホッ… 居ないならもうさっさと引き上げて…

【バサツバサツバサツ…ズズンツ】

こ、この音は…まさか…

「グルル？」

「で、出たニャー…!!」

「グルツ!」

〓Now Loading〓

「グルル」

「ニャア、大分落ち着きましたのニャ…」

あの後、パニックに陥ったボクを星焰竜さんが落ち着かせてくれたニャ…

一瞬パニックの余りに樹から飛び降り自殺しそうになったり、フルパワーで大樹に一撃入れるところだったのニャ…

星焰竜さんが止めてくれニャかったら大惨事にニャってたと思うニャ…

「グルル？」

「ニャ?』どうやってここまで来たの?』ですかニャ?単純に樹を跳んで登ってききましたのニャ」

途中何度か飛竜に襲われたりしたけど、特に害はニャかったから

黙っておくニヤ。

「グルル」

『「じゃあここへは何しに？」知り合いに言われたので挨拶に来ましたのニヤ」

後は地図作成も兼ねてだけどニヤ…。

それよりも話していて気になったことが一つあるニヤ…。

このリオレイア、凄く人間臭いのニヤ。

しかも前世での女子高生くらいの軽さがあるニヤ…

ボク？ボクは前世では普通に社会人だったのニヤ。

と、まあボクの過去なんかは置いといてニヤ…

「スファイアさん、ちょっと聞いていいですかニヤ？」

「グルル？」

「スファイアさんでもしかして元人間だったりしないですかニヤ？」

「ツツ?!?!」

この反応、黒だニヤ…。

「グルル」

『「どうして分かったの？」ですかニヤ？ボクも元々人間だからなのですニヤ」

「ツツ?!?!?!」

驚いでるニヤア、無理もニヤいと思うけどニヤ。

「グルル」

『『ここに来る前に誰かにあつた?』ですかニヤ?いえ、会つてませんニヤ、気が付いたらこの世界でアイルーになつてましたからニヤ』

あの時は本当にびっくりしたのニヤ……

目が覚めたら森の中だったからニヤア……

「グルル」

『普通に転生してきたってこと?』ニヤ?多分そうだと思いますニヤ』

「……………」

ニヤー、ニヤんだか考え込んでしまったのニヤ、そろそろボクも帰りたいんだけどニヤ……

~~~~Now Loading~~~~

「グルル」

『『話は変わるんだけど……』ニヤ?なんですかニヤ?』

「グルル」

『『その毛並みモフらせてくれない?』……ニヤニヤ?』

モフる?腕もニヤいのにどうやって撫でるのニヤ?

「モフるのはいいですけど、どぶぢやるのですかニヤ?」

さらなる強化ですニヤ！

獣人種、アイルーですニヤ。貴方がボクの旦那さんかニヤ？それなりに期待はしているニヤ…。

と、そんな訳でアイルーですニヤ。

今ボクはスフィアさんの巣にいるのニヤ…。

というのもあの後、モフ^{拘束}られてから^{拷問}ボクは一度も住処に帰れてニヤいニヤ。

簡単に事のあらましを説明すると…。

あのモフられ拷問で半日ほど拘束させられたボクをスフィアさんであろうとか抱き枕にして寝ようとしたのニヤ！

あの地獄が更に続くのは勘弁だったボクは猛抗議したニヤ。

抗議の甲斐あって、抱き枕状態にはならず済んだけど、ボクの抵抗はそこまでだったのニヤ…。

モフリ地獄から解放されて、いざ帰ろうとしたボクをスフィアさんは許さなかったニヤ…。

そこでもボクはまた猛抗議したニヤ。

けど、スフィアさんは『泊っていけ、いかないと帰さない』の一点張り…。

そこからはただひたすらに平行線だったニヤ。

『帰らせろ』と『帰さない』の言い合いが数時間以上続いたニヤ…。

結局、日が落ちて道が分からなくなってしまうたボクの方が根負けして折れたのニヤ…。

あの時のスフィアさんのドヤ顔は凄まじく殺意が沸いたのニヤ…。

(殴ってはいニヤ行けどニヤ?)

そんなことがあって日が昇り今に至るといふ訳ニヤ…。

一応泊ってあげたんニヤし、もう帰ってもいいんだけど… 今動く
とスフィアさんに見つかって連れ戻される可能性極大なのニヤ…。

「うーん… 困ったのニヤ…」

「グルル？」

「ニヤニヤ!? スフィアさん? 起きてたのニヤ?」

「グルル」

『困ったのニヤの辺りから』かニヤ?

それは起こしちゃったみたいで申し訳ないですニヤ...
というより、動かニヤくて正解だったのニヤ...。

「グルル」

『ねえ、お願いがあるんだけど』かニヤ?

はいはい、なんですかニヤ?

嫌な予感センサーが大音量で警報を鳴らしてるニヤア...。

「グルル」

『またモフモフさせて?』ですニヤ?

ぜっ..... ったいに!

駄目ですニヤ!」

「グル!? グルル」

「なんでも何も、あれだけ拘束されたら誰だって嫌になりますニヤ!」

「グル?」

『どうしても...?』ですかニヤ

うぐっ... どうしてもですニヤ!」

「……………(ジーツ)」

そ、そんなヤ捨てられた子犬みたいニヤ目で見つめられてもボクは…ボクは…!!

「はあ…仕方ニヤいですニヤア…」

陥落しちゃったのニヤ…。

だってあんな目で見つめられたらどうしようもニヤいじやニヤイ
かニヤ!!

「ただし！条件がありますニヤー！」

無論ボクだってタダで撫でまわされてやるわけじやニヤいニヤ。

世の中ギブアンドテイク、やられた分の報酬はたっぷりと頂くの
ニヤー！

ボクはそこまで人が良い人間…じゃなくてアイルーだと思わ
ニヤいことニヤ、スフィアさん？

「グルル？」

『『条件？どんな？』ですニヤ？』

条件というか賭け事みたいニヤものですニヤ」

「グルル」

『『何かを賭けてゲームでもするの？』ですニヤ？』

その通りですニヤ、ルールは至ってシンプル！スフィアさんの攻撃
をボクが数発喰らって、倒れなかったらボクの勝ち、倒れてしまつた
らスフィアさんの勝ちですニヤ」

「グルル？」

『賭ける物は？』かニヤ？

決まっているじやニヤいですかニヤ、賭けるのはボクの所有権ですニヤ！スフィアさんが勝てば、ボクをペットにするなり玩具にするなり好きにしてくれて構いませんニヤ」

「ッ!?!グルル」

『あなたが勝った場合は？』ですかニヤ？

その時は撫でるのも、所有物になるのも無し、空白に戻りますニヤ、あ、だからといって威力の高いもので殺してしまいそうな攻撃は駄目ですニヤ、あくまで普通の攻撃のみですからニヤ？」

「グルル」

『そんな事でいいの？』ですかニヤ？

もちろんですニヤ、そもそも種族の差が違いすぎるのですから獣人種からしたら普通の攻撃ですら脅威なのですニヤよ？」

けど、その中にボクは含んでニヤいけどニヤア…。

「グルル」

『分かった、その勝負、乗った！』ですかニヤ

そこなくつちやですニヤ！それじゃあ早速始めましょうニヤ」

まずはスフィアさんから距離を置いて…。

確かりオレイアの攻撃は基本的に遠距離からのものが多かったと記憶してるニヤ。

「さあ！いつでも来てくださいニヤ！」

「グルオオオオオオオツツ!!」

まず初めは突進かニヤ、でも、かなり早いニヤア…。

亜種、希少種の怒り時の比じやニヤいニヤ。

【ガンツ】

くうっ… それなりに効くニヤ… けど、こんなんじやまだまだ僕は倒れニヤいニヤ！

「まだまだニヤ！ドンドン来やがれニヤ！！」

「グルオオオオオオオオツツ！！」

また突進？まずは僕の体力を削る算段かニヤ？

「グルツツオオオオ！」

ニヤツ?! 激突寸前にサマーソルトニヤ!?

【ズガキンツツ】

くくツツ!! 凄い衝撃ニヤ… けど、ボクの防御を貫けるほどじやニヤいニヤ！

実際、衝撃波来たけど本体に直接当てられてる訳でもニヤいから毒も効かニヤいニヤ！

「グルオオオオオオオオツツ！！」

今度は火球かニヤ、どんな威力か楽しみニヤ！

【ズドドドドンツツ】

連続で撃っているとは思わニヤかったのニヤ。けど、大して暑さは感じニヤいのニヤね…。

「ふむふむ、こんなものかニヤ？」

「(ピキッ) グルオオオオオオオオツツ！！」

ニヤニヤニヤツ!?ちよっスファイアさんその攻撃はマズインじゃニヤいかニヤア…?

「グルオオオオオオオオツツ!! (ドンツ)」

ちよっ!撃ちやがったニヤ!あの金色の火?焔?だか分かんニヤいけど、あの火球は放っておくとまずいのニヤ…。

…… 仕方ニヤいニヤ、切り札を使うニヤ。

ニヤイタマ先生、あの技、お借りしますニヤ!

「―――必殺、マジネコシリーズ―――」

『マジネコ受け止め』

【ツツツツドンツツツ!!!】

「ぐぎぎぎぎぎつつ……!!!」

ニヤ、ニヤんて重い攻撃ニヤ!気を抜いたらこっちがやられてしま
うのニヤ!!

「ニヤグググググツツ!!!グルニヤアアアアアアア!!!」

【カツ!!】

ニヤツ!?火球が!?



やっちゃった…。

ついカツとなって

金色の焔使っちゃった……。

だってあの子があんなこと言うんだもん。

許せるわけないよねー… あんなこと言われたらさ。
でも、これでゲームは白紙になっちゃったね…。
だって相手がいらない… ツ?!?!?
え?… ウソ… あれ喰ら~~!~~て生きてるの!?
どういうことなの!?
なんなのあの姿… それにあの色って… まさか…。



ニヤハー… ニヤんだったのニヤ?今の閃光…。
ニヤんだか分かんニヤいけど助かったみたいニヤア…
全く、スフィアさん熱くなり過ぎなのニヤ…。
ボクじゃニヤかったら死んでたところニヤ!

「……………」

あれ?スフィアさん?どうしたのかニヤ?驚いたように僕を見つめたまま微動だにしないのニヤ…。

「あのースフィアさん?どうかしましたかニヤ?」

「ツ!… グルル」

「え?自分の姿をよく見てみる?ニヤにか変ですかニヤ?」

どこも変ニヤところニヤんて… ツツツ?!?!?!

「ニヤニヤニヤツ?!ニヤんニヤ!この毛並み!!」

金色でユラユラしてて… まるで炎みたいだニヤ…。

よく見るとオーラっぽいものも出てるみたいニヤし… 一体全体
どういうことニヤ?!?!?

「調べてみて分かったことは、キミが私の焔をどういいう訳か吸収してその姿になったという事ね」

「ニヤア…それは分かったのですが、どうしてそうニヤったのかは分からニヤいのですかニヤ？」

「それについてはさっぱり…けど分かっているのは、キミは今半古龍化してるといいう事…。私の焔を吸収しちやっただから当然と言えば当然だよ、それに伴ってキミは龍脈に干渉できるようになった訳だけど…どこか痛みがあったりしない？」

「ん…言われてみればさつきから身体が妙に痛いですニヤ、全身が筋肉痛にニヤってるみたいニヤ感じによく似てるニヤ」

「…普通はその程度の痛みでは済まないはずんだけどね」

「ニヤ？そうニヤのですかニヤ？」

半古龍って言われてもしっくりこニヤいし、龍脈ニヤんてチンプンカンプンニヤ…。

「とにかく、キミはもう普通の獣人種じゃないという事だけ理解しておいて…。といつても、元から普通とは言い難かったけど…」

ニヤ…。スフィアさんなんだかキャラ変わってニヤいかニヤ？

「とりあえず、賭けに関してはアイルーくんの勝ちだね、はあああ…勝てると思ってたんだけどな」

こ、今度はあの軽い感じに戻ったのニャ…。

「ボクとしてはホツとしてますニャ」

もしこれで負けてたらニャにを要求されるか分かったものじやニャいニャ。

「そうなの？まあ負けちゃったものは仕方ないし、諦めるよ…」
ホツ…。これでやつと帰れるニャ…。

「けどね？私良いこと考えついちゃったワケよ！」

…。
ニヤんだろう、ものすごおおおく嫌な予感が…。

「い、一応聞きますけど…ニヤんですかニャ？」

「単刀直入に言うよ？アイルーくん」

「私専属のオトモにならない？」

…。
ハニャ？

「ニャ…ニヤんですとおおおおおおおお
!!!!!!」

旅に出ますニヤ！

ボクの名はアイルー。フフフ、怖いかなヤ？
え？全然怖くニヤい？うん、知ってたニヤ。

というわけでアイルーですニヤ！

ボクは今女王領域から離れた密林に来ているのニヤ！

どうして密林なんかにいるのか？それは旅に出ているからニヤね。

旅とかどうでもいいから側近の話はどうなったって？酷い

ニヤア…。

側近の話はしばらく保留にしてもらったのニヤ、そんなすぐに応え
が出る訳がないからニヤ。

それに、そもそもボクはネコにや、ネコは基本自由気ままにのんび
りと過ごすものニヤ！

飼いネコになってぬくぬくするのもいいけどボクの性には会わな
いのニヤ。

それで気分転換に女王領域から離れてしばらく旅に出ることにし
たのニヤ！

ボクはまだこの世界に来て、女王領域の他にドンドルマと火山しか
行ったことがないのニヤ。

だからいろいろなところを回っているんなものを見て回るので
ニヤ！

それで、まず最初は密林というわけですよ。

2Gでよくお世話になったのがこの密林ニヤ、けど、なんだかムシ
ムシしてて暑苦しいのニヤ…。ハンターたちはよくこんな熱い所で
狩りなんかしてきたと思うのニヤ。

「いやあああああああつ!!」

ニヤニヤ!?女性の悲鳴だニヤ！

事件かニヤ？とにかく行ってみるニヤ！



「はあっはあっはあっはあっはあっ…!!」

「グオオオオオオツッ!!」

どうして私がこんな目に…

事の始まりは一枚のクエストを受けたからだった。

クエスト内容はドスランポス一頭の狩猟というもの…。

腕試しには丁度良いだろうと思い、そのクエストを受けた。

受付嬢は狩猟環境が不安定だと言っていたが、私は今まで不安定の中でも一度も乱入があったことはなかったのでそこまで危惧はしていなかった…。

ターゲットの狩猟は特に問題なく討伐することが出来た。

剥ぎ取りを終え、報告の為に村に帰ろうとした時、ソレは現れた…。

木々をなぎ倒しながら出てきたソイツは固体名で言えばババコンガのようであつた。

だが、本で見たババコンガとは何一つ違うのだ…。

通常より二回り以上大きな巨軀に灰色の体毛、頭に生えているはずの金色の毛は真っ赤であり、そこに一本ではなく二本の刺々しい角が生えている。

…勝てない。

そう私は直感で悟った。

挑めば確実に殺されると本能が告げている。

それは痛いほど理解していた…。

本能の警告に従い、気配を殺しながらその場の離脱を図る…だが…。

それを奴はすぐさま察知して私を追いかけ始めてきた。

見つかった以上コソコソしていても意味はない。
そう判断した私は全力疾走でその場を駆けだした。

こんな所で死んでたまるかと心の中で自分に活を入れつつ全力で走る。

しかし、それも長くは続かなかつた。

追いかけてきたババコングの走るスピードは速く、あっという間に私に追いつくとその背に突進をかましてくる。

「あぐっ…！」

勢いよく吹き飛ばされ地面に激突する。

ババコングはそれを見て愉悦の表情を浮かべながらゆっくりと近づいてくる。

止めを刺すつもりらしい…。

こんな所で死んでたまるものかと、腰に差していた片手剣、ハンターカリングを引き抜き、ババコング目掛けて投げつける。

ハンターカリングは弧を描きながら奴の顔に向かって飛んでいき、奴の片目に深々と突き刺さった…。

「… ツツ?!グオオオオオツツ!!」

結果は奴を余計に怒らせただけ…。

ここで終わりなのか、ハンターとして名を上げること、幸せな未来を送ることもなくこんなゴリラに食い殺されて終わりを迎えるのか…。

奴は怒り狂いながら私に向かって突っ込んでくるとその巨大な腕を振り上げる。

ギョツと目を強く瞑る…。

次に来る衝撃と痛みに耐えうるように…。

…

しかし、次の感じたのは痛みではなく優しく持ち上げられフワリと宙に浮く感覚だった。

宙に浮く感覚はすぐに消え、代わりに詰めたい土の感触が伝わり地面に降ろされたのだと理解する。

うつすらと目を開けてみると、そこに映ったのはババコンガの前に立ちはだかる一匹のイルーの姿だった。

「…………グオオオオオオ」

「ボクかニヤ？ボクは趣味と成り行きでハンターをやっている者ニヤ」

まるでババコンガの言葉を理解しているように放たれた返答は奴を苛立たせたのだろう。

先程より鼻を真っ赤にさせてイルー目掛けて飛びかかるババコンガ……

対してイルーは軽く右手を構えるだけ……

迫ってくるババコンガ、イルーは焦る様子もなくあることばを口にしながら行動を起こす。

『並ネコパンチ』

【ボッ!!】

そんな音と共に、飛びかかってきたババコンガの巨軀に大きな風穴が空き、瞳からは眼球がダラリと下がる……

ズズンツと大きな音を立てて倒れるババコンガの巨体……

終わった……の……？

そう思った直後私の意識は暗転する。

薄れゆく意識のなか、くそつたれニヤー!!!という叫びだけがやけに印象に残りながらも私は暗い闇の中に意識を手放すのだった……

弟子募集はしてないのですニヤ！

アイルーだニヤ、お前に最高の勝利を与えてやる…ニヤ…。
だああつ…！『ニヤ』が着いちやつたニヤ、言わない用に気を付けてたのニヤにいつ！！

と、失礼しましたニヤ……。

という訳で皆さんこんばんは！ボクアイルーですニヤ！

今ボクはポツケ村と言う村の集会所？の酒場にいるのですニヤ。

その理由は……

「弟子にしてください！」

あの時のハンターさんが何故か訪ねてきているからなのニヤ。

もうね…どうしてこうニヤったとしか言えないニヤ……。

ここに至るまでを説明するには時間が少し遡る必要があゆニヤ。

説明回想

あの後、修羅コンガを倒したボクは、気絶しちやつたハンターさんを連れてハンターさんが拠点としている村に向かったのニヤ。

幸い、ハンターさんはクエスト目標はクリアしてあったみたいだったからクエスト失敗にはならずに戻れたニヤ。

村に着いて、ハンターさん（メランさんというらしいニヤ）を村長さんに渡したボクは空き家があるということだったので一泊だけそこで泊まらせてもらうことにしたのニヤ……。

そして翌日、久しぶりにニヤンターらしくクエストにでも行こうかと酒場に来てクエストを見ていたら、あのハンターさんが訪ねて来て今に至る……。

と言うわけなのニヤ。

「お願いします！どうか私を貴方の弟子にしてください！」

土下座でもしそうな勢いで頭を下げるメランさん。

でも、ボク弟子なんか募集してニヤいし…メランさんに教えられるようなことなんて何一つないニヤ…。

「頭を上げてくださいニヤ、とりあえず、どうしてボクに弟子入りしたいのか理由を聞いてもいいですかニヤ？」

「え？私の話を聞いてくれるんですか？」

え？これもしかして長くなる感じがニヤ？それなら遠慮したいんニヤけど…

「えっと…内容にy」ありがとうございます。実は私、この時代の人間ではないのです」ニヤ…？」

人の話を聞かない人ニヤねえ…。

というより、今さらつととんでもないこと言ってなかったかニヤ？

「私の産まれた時代は、遙か昔、私はシュレイド王国の姫でした。リーヴェルという都市の、今よりも文明が遙かに発達していて、両親や家来達と共に、とても豊かで満ち足りた生活を送っていました…。

しかしある日、ある祖龍がシュレイドに強襲してきたのです…。

祖龍、恐らく私達人間が仲間を狩り尽くしたせいでしょう、奴は他に二匹の龍を引き連れ、シュレイドの街を破壊し尽くしていきました。

ヴェルド、ヒンメルン山脈、リーヴェル、そして私の家族や家来の命までも…。

奴らが攻めてきたとき、両親はもう悟っていたのでしよう、私を『緊急時空脱ポッド』に入れて私をこの時代まで飛ばしたのです…。

飛ばされた当時、私はまだ五歳と幼く、着陸した雪山で凍死する寸

前でした…。

そんな私を救ってくれたのがこの村の村長さんでした…。

村長さんは雪山で倒れているところを保護された私を引き取り、我が子のように育ててくれました…。」

「…ニヤるほd「あれから十三年の月日が経ち、十八歳になった私は、ハンターとなつて少しずつ腕を磨きながら祖龍に関する情報を探っていました…。」エエ…。」

は…話を遮られたニヤ…。

というか、まだ続くのニヤ？この話…。

「これまで、討伐してきたクエストはそれなりに…ですが祖龍に関する情報は全く掴めず、苛立ちと焦りの日々を過ごしていました…。いつからか私は、祖龍の虚像を追いかけてモンスターと対峙していたのです…。」

そして先日、あのババコンガに襲われた時、私は完全に油断してしまいました。

乱入モンスターに等遭遇することはないだろうと思ひ込み、大した準備もせず、ただ標的を狩ることだけを考えて出発していました…。

結果はご存知の通り、クエスト達成後に乱入してきたババコンガに手も足も出せず、獣人種さんが助けに来てくれなかったら、確実に殺されてしまいました…。

私は貴方に命を救われたのです。両親に託されたこの命、貴方に再び救済されたことで更に重く責任が増したものになりました。

こうなつたら何としても、あの祖龍を倒すまで死ぬわけにはいかない、その為には、奴が再び私の目の前に現れるまでハンターとしてモンスターを狩り続けなければならない、強くならなければいけない、先日、獣人種さんの狩猟を見た時、私はこの方の下で学ぶしかないと思いました。

私もこれほど強く慣れたら、獣人種さん、私には狩らなければならぬ宿敵がいるんです。

これは私一人の戦いじゃない、私の故郷や両親の思いも背負ってい

るのです。

自分が未熟なのは重々承知です。

しかし今はなんとしても仇を取れるための強大な力が必要なので
す！両親は私w…。」

も、もう…：限界ニヤ…：！！

「話が長すぎるニヤ！！二十字以内に簡潔に纏めてから話すニヤ！」

「あ…：ごめんなさい」

まったく！これじゃあ聞いてるこっちの身が保たないニヤ
よ……。

ニヤイタマ先生がキレるのも分かるニヤ。

さて、それじゃあメランさんが話をまとめ上げるまで待とうか
ニヤ。

くくNow Loadingくく

「獣人種さん、纏まりました、『両親の仇を討つために私を鍛えてくだ
さい』」

ふむ…：仇…：ニヤね……。

「メランさん、悪いけど貴方を弟子にすることは出来ないニヤ」

「ツ!?何故です！」

う…：やっぱり噛みついてきたのニヤ……。

でも、もしこの人がニヤイタマ先生みたいな力を手に入れたら間違
いなく不味いことになるのは間違いないニヤ。

それに、そんなことの為にこの力を使ってほしくはないのニヤ！

仕方ない、ここは前の世界ではテンプレのやり方を実行しようか

ニヤ。

「よく考えてみて欲しいニヤ、メランさんの御両親は何の為にあなたをこの時代に送り込んだのニヤ？」

それはメランさんに生きてほしかったからだとかボクは思うニヤ……………」

親は子供の幸せを願うものニヤ、きっとメランさんの御両親もメランさんに仇を討ってほしいだなんて思っていないはずニヤ。

それでもあなたはまだ復讐をするつもりですかニヤ？」

「つ…でも、私は……………」

あー…これは少し、考える時間を上げた方がいいニヤね。

クエストは… ああ、これがよさそうニヤね。

「すいませんニヤ、このクエストを受けたいのですがいいですかニヤ？」

「え？でもキミ、アイルーだよな？ハンターの資格持ってるの？」

ニヤ、失礼な人だニヤ！

「こう見えても立派なハンターですニヤ！ほら、その証拠にギルドカードもありますニヤ」

どうにや！これで信じるしかなかったニヤ？

「本当だわ、ごめんなさいね、ネコのハンターなんて聞いたこと無かったから勘違いしちゃったわ、はい！それじゃあ水没林の素材ツアーのクエストを受け付けました！最近どの地域も狩猟環境が不安定になっているので気を付けてくださいね」

「ありがとうございますニヤ、それじゃあ行ってきますニヤ！」

急に現れたと思ったら今度は歌いだしたニヤ、とりあえず感想としては……

超ウルサイ!

これに尽きるニヤね!

「クエエエエエエエエエエエエエエ〜♪」

まだ続けるのニヤ?これドコのジャ○アンリサイタルかニヤ……。

「クエエエエエエエエエエエエ〜♪」

「……いい加減に止めるニヤ、じゃないと……殴るニヤよ?」

「クエツ!?クエ…シギヤアアアアアアアアツツ!!」

ちよつと怒り気味で言ったら今度は鳴き声を変えて叫び出したのニヤ。

というか、何がしたいニヤ?このクルペッコ……。

「「「シギヤアアアアアアアアツツ!!」」」

ニヤニヤツ!?今度はロアルドロスの大群が来たのニヤ。

というより、またコイツらも修羅種じゃないですかヤダニヤー……

「「「シギヤアアアアアアアアツツ!!」」」

え〜つとニヤにニヤに?

ニヤ…?なんニヤ…これ……

倒…せ?…え?他に何かないのニヤ?

…もしかしてこれ、ボクの声が聞こえてないのニヤ?

というかこのロアルドロスたちの様子…何か変だニヤ、まるで何かに操られているようニヤ……

ボクは修羅^{ロアルドロス}種^{修羅種}の攻撃を躲しながら考えるニヤ。

マジモード… 突入ニヤ…

出陣します♪死にたい龍はどこですかニヤ〜？

と言つても、今は帰ってきたばかりなだけニヤ？

と、いうわけでボクアイルーですニヤ！

今は水没林での素材ツアールを終えてようやくポツケ村まで帰ってきたところですよニヤ。

いやあ… 観測隊の気球がいてくれてすごく助かったニヤ……。

あのままだったらボク、そのまま遭難するところだったニヤ。

まあそんなことより、報告に行つてこないニヤ！

〜Now Loading〜

「戻りましたニヤ」

「あっ！ニヤンターさん！お帰りなさい！帰りが遅いので心配してたんですよ？」

「ニヤ？そんなに遅かったですかニヤ？」

「ええ、他のハンターさん達なら大体三日ほどでお帰りになるのに、一週間以上ですよ？それに観測隊から水没林で傀儡クルペッコとロードロス修羅種の大群が暴れているなんて報告があるものですからね… 何かあったのかと考えちゃうじゃないですか！」

そんなに長いこと離れてたのニヤね、普段日数を気にすることがないから、時間なんて気にかけてすらいなかったのニヤ。

「それは申し訳ないですよニヤ… でも、ボクはこの通りピンピンしますニヤ！」

「確かに無傷に見えますけど…。あ！もしかして運よくその大群に出会わなかったとかですか？」

「いや、遭遇しましたニヤよ？襲い掛かってきたから全員返り討ちにして土に帰ってもらいましたけどニヤ」

「そうなんですか？すごい！流石はニヤンターさん、噂通りの強さなんですね！」

「ニヤ？噂ってなんですかニヤ？」

「知らないんですか？ハンターさんやギルドの間では最近結構有名ですよ？恐ろしく強いネコハンターがいるって、聞いた話だと…。龍滅刃にも差し迫る強さを持っているだろうとか。…」

「そんな噂があるのかニヤ？普段街とか村にいる訳じゃないからそういうのは分からないのニヤ……………」

「というより龍滅刃って誰ニヤ？」

「まったく初耳ですニヤ、そんな噂があったのですニヤね」

「気を付けてくださいいね？噂ではそのネコを倒して名を上げようとしている輩もいるって話ですから、といっても、ニヤンターさんのその強さなら大丈夫そうな気がしますけどね」

「ニヤハハ、そうかもですニヤね」

「この受付嬢さん、こんな風に話してるけど隣の上位？の受付嬢さん達が凄い顔してこっちを見えるニヤ、どうしてニヤ？」

〓〓Now Loading〓〓

「獣人種さん、帰って来てたんですね」

クエスト報告を終えて集会所の酒場スペースでゆっくりしていたら不意にそんな声がかけられたニヤ。

この声はえーつと……………」

「お帰りなさい、獣人種さん」

そう言つて声の主はボクを覗き込んでくる。

「メランさんでしたかニヤ、ただいまですニヤ！それよりどうかしましたかニヤ？」

「はい、あの時の答えが出たのでそのお話に……」

あの時？ああ、弟子にしてほしいって言った来た時ニヤね。

「そうでしたかニヤ、それで？どういう答えを出したのですかニヤ？」

「はい、獣人種さんに言われてからよく考えたんです。

そしたらある日、夢に両親が出てきたんです。

夢の中で両親は言っていました。

『仇なんて取らなくてもいい、メランが幸せに生きていてくれればそれだけでいい……』と」

「良かったじゃないですかニヤ」

「ええ、それで思ってたんです。今の私はハンター、ならこの世界、この時代で生きていくのには強くならなくてはいけない、なので獣人種さん！今一度お願いします！私を弟子にしてください！」

ニヤア…… やっぱりそうなるのニヤね……………」

けど、復讐心はとりあえず消えたみたいニヤ。

「そこまで言うなら仕方ニヤい…とりたいところですけど、今のメランさんにはボクが教えられることは殆んど無いのですニヤ」
ボクが教えられることなんて精々ニヤイタマ先生の筋トレ法くらいしか無いからニヤア……………」

そもそもそれも弟子の人には納得されてなかったものニヤ……………」

「そんな…じゃあどうすればいいというのですか！」

「話を最後まで聞いて欲しいニヤ。」

今のメランさんにはまだ経験が足りないのニヤ。

ボクの修行内容はある程度の経験を積んだ人じゃニヤいと熟すこなすのは難しいのですニヤよ。

そうですニヤね…もしメランさんがG級ハンターになることが出来たらその時は、弟子入りすることを許可してあげますニヤ」

さて、これで納得してもらえるかニヤ……………」

「………… G級ハンターになれば、弟子として認めてくれるのですね？」

「そうですニヤね、弟子入りを認めてあげますニヤ」

「わかりました、必ずG級ハンターになってみせます。

獣人種さんもその約束、忘れないでくださいいね？」

「わ、分かったのニヤ…頑張ってくださいニヤ」

納得してくれた…！危なかったニヤア……………」

〓〓Now Loading〓〓

そんなことがあってポケケ村を後にしたわけだけど…次はどこ
に向かおうかニヤ？

密林と水没林には行つたしニヤ。

つぎは孤島にでも…ンニヤ？

【ズゴゴゴツツ】

「ゴガアアアアアアアアアアアアツツ!!」

あつ！野生のイビルジョーが飛び出してきた！

アイルーくんはどうする？

戦う

？逃げる

アイルーくんは逃げ出した！

「ゴガアアアアアアアアアアアツツ!!」（ダダダッ）

「ニヤニヤツ!？」

しかし回り込まれてしまった！

ってそんなこととして遊んでる場合じゃないニヤ！

『逃げるな』って言われてもニヤ…僕に何の用ですかニヤ？」

ニヤんだかキレてるし、ボクにイビルジョーの知り合いなんてい
なかつたはずニヤし…………。

「ゴガアアアツ」

『忘れたとは言わせねえぞ俺の邪魔しやがって』ですかニヤ？

何のことを言っているのかさっぱりニヤ、ボクが何時あなたの邪魔
をしましたかニヤ？」

「……………」

特に反応を示すことなく、ものすごい勢いで吹っ飛ばされていくアイルー。

そのまま近くの岩肌に叩きつけられ岩肌の方がクレーターかのようにへこむ。

「ゴガアアアアッ」

そして追撃とばかりに龍属性ブレスを叩き込む蝕星龍。

龍属性ブレス

それはイビルジョーという龍ならどの個体も持ち得る攻撃手段だ。

通常固体程度であれば上位ハンターでも耐えられるが、蝕星龍の龍属性ブレスは違う、幾度となく死戦を潜り抜け、通常固体から古龍種にまで上り詰めたその威力は通常、G級固体を軽く凌駕する。

そんなものを並みのハンターが受ければ塵一つ残さず消し飛ぶことは間違いない……………」

崩落する岩肌、舞い上がる土煙……………」

「ゴガアアアアアアッ」

しかし蝕星龍は戦意を迸らせたまま砂煙を見据える。

『早く来い、この程度で終わりか?』とでもいうように吠えながら……………」

刹那、土煙から超スピードで何かが飛び出した。

そう、吹き飛ばされたアイルーである。

超音速で真っ直ぐ蝕星龍に突っ込んでいくアイルー。

蝕星龍は見越したように尾を薙ぎ払う。

【ドンッ】

薙ぎ払った時の衝撃波がアイルーに向かい飛んでいく…のだが

「……………」

衝撃波をものともせず、速度を保ったまま無傷のアイルーが蝕星龍へと突っ込んでいく。

瞬間的に蝕星龍との距離を詰めたアイルーの腕が蝕星龍の顔面を捉え、そして勢いよく殴り飛ばす。

「… ツツツ!!」

蝕星龍もそう簡単に吹き飛ばされまいと必死に抗う。

だが、ただでさえ重い一撃に加え、音速を越えた速度から叩きつける勢いも上乘せされれば、脳が勢いよくシェイクされ、まともに立っていることなど出来るはずがない。

これはどのような強靱に肉体を持つ生物であっても変わらない。

蝕星龍の必死の抵抗も空しく、パンチの勢いに負けた身体は勢いよく吹き飛んでいく。

先程のアイルー同様に近くの岩肌叩きつけられる蝕星龍。

その巨体故に激突した岩肌が崩壊する。

しかしアイルーは追撃をかけようとはしない。

見ると、アイルーの表情は無表情となっていた。

その顔はさながら無機質な機会のように冷めたもの……。

その感情を宿していない瞳はジッと吹き飛んでいった蝕星龍を見ているのだった。



蝕星龍は驚くと同時に怒っていた。

獣人種如きに殴り飛ばされたことが許せなかった。

自身に対抗できるのは精々宿敵である龍滅刃、そして星焰龍のみのはずだ。

しかし今はどうだ？

目の前の小さな存在に殴り飛ばされた、しかも素手で……。

雑魚の分際で王に手を上げたことを後悔するがいい!!
怒りに身を任せ、蝕星龍は本来の力を解き放った。



「ゴガアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!」

なんだかわからニヤいけど、イビルジョーの様子が変わった
ニヤ…。

全身から漆黒のオーラが出てるし、身体を覆ってたオーラは銀色に
なってるのニヤ

あれはボクも本気で行かないとまずいかもしれないニヤね…。

「仕方ニヤい…」

—— 必殺マジネコシリーズ ——

—— マジネコ変化 ——」

するとボクの身体が金色に染まる。

全身の毛は焰のように揺らめき始めてるオーラみたいになってる
ニヤ

これはあれニヤ、某超化した戦闘民族みたいなあれニヤ。

スファイア
星焰龍さんからもらった力ニヤ…。

名付けて焰猫モードニヤ

ネーミングセンスがないのは知ってるニヤ…。

「ゴガアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!」

と、そろそろ気を抜いている場合でもなさそうニヤね。

「ゴガアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!」

なんだか禍々しい色のブレスニヤね… まあいいニヤ

「——必殺焰猫シリーズ——」

——焰猫キヤツチ——」

【ドツツ!!!】

グツ・!! 凄い威力ニヤ……!

けどツスファイアさんの焰に比べれば…… ツツ!!

「こんなの…… 痛くも何ともないニヤアアアツツ!!」

【カツツツ!!】

……? またかニヤ?



光が収まると、そこには先程まで金色だったアイルーがダイヤモンドダストの如き銀色へと変わっていた。

「?これは……」

アイルーも自身の変化に驚いているようだった。

それよりも驚いているのは蝕星龍だろう。

自身の切り札近いとも言える、腐食のブレスを受け止められたと思いきや、次の瞬間には自身と同色に変化したアイルーがいたのだから……。

最早邪魔をされた怒りなど微塵も残ってはいなかった。

ただ混乱と困惑、そして疑問が蝕星龍を支配していた。

「ゴガアアアアアアアアアア」

「え？わ、分かったニヤ、今度は必ず決着をつけてやるニヤ！」
そんなやりをした後、蝕星龍は地中へと消えていったのだった。

経過報告ですニヤ！

ニヤンター、アイルーだニヤ、猫じゃないニヤ……………。
どこからどう見ても猫だろうって？

その通りですニヤ！

というわけでボク、アイルーですニヤ！

あの後、変なイビルジョーがいなくなつたのを見送つたボクは久しぶりにドンドルマへとやって来てののニヤ。

…ニヤ？孤島に行くんじやニヤかつたのかって？

あんなことがあつた後ニヤよ？行く気にもならなかつたのニヤ……………。

だから気分転換にドンドルマに行くことにしたのニヤ！

移動手段はどうしたって？

もちろん走ってきたのニヤ。

それに、女王領域の地図もある程度できましたからニヤ、その報告も兼ねてという訳なのですニヤ！

と、長々とボクはいったい誰に説明してるんだろうニヤ……………。

とりあえず、セレシアさんのいるギルド本部にレッツゴーだニヤ！

〽Now Loading〽

「セレシアさんお久しぶり… って相変わらず凄い書類の山ですニヤね……………」

「……………ん？アイルーか…………… そうだ、それもこれも全部あの星焰龍がやらかしてくれたものだ……………」

星焰龍スファイアさん何やってるニヤいつたい……………。

「いらつしやい、アイルーくん」

「リリナさん、こんにちはですニヤ!... あれ? エクセリアさんは居ないのですかニヤ?」

「ここに来れば三人ともいると思ってたんだけどニヤ.....」

「エクセリアさんなら今日は来てないわよ? 多分家で家事でもしてるんじゃないかしら?」

『ほら、最近子供も大きくなつてきて大変な時期だから』と続けるリリナさん。

「そういえばいましたニヤね、確かルーク君とクララちゃん... だったかニヤ? ボクもほんの少しだけだけど、子守を手伝ったことがあつたりするニヤ。」

あの子達... 特にクララちゃんには髭とか毛をむしられたりして大変だった記憶があるニヤよ.....

ルーク君は比較的おとなしい子だったからそこまで大変ではなかつたかニヤア.....

「それで、今日は何をしに来たんだ?」

あ、そうだったニヤ、忘れるところだったのニヤ。

「女王領域の地図が三割程できたので、その報告にと思つて寄つてみたのですニヤ」

「三割か、見せてくれ」

「はい、これですニヤ」

書いてきた地図をセレシアさんに渡す。

「もう三割も仕上げるなんて... どれどれ?」

そう言つてリリナさんも地図を覗き込む。

すると地図を見ていた二人の顔がみるみるうちに渋いものへと変わっていく。

いったいどうしたのかニヤ？

「アイルー…これは本当に地図なのか？」

「ニヤ？どうしてですニヤ？勿論地図ですニヤよ？」

というかどこからどう見ても地図じゃないですかニヤ？

「……言っではなんだが、子供の落書きにしか見えんぞ」

こ、子供の落書きですかニヤ!?!?

「私も…さすがにこれはちよつと……」

り、リリナさんまでもニヤ…!?

い、いくらなんでもそれは失礼じゃないですかニヤ!?

「そんなに分かり難かったですかニヤ？これでもまだキレイに？書けた方なのですニヤよ？」

「そ、そうなのか…？」

そもそも見てくれる人がいないんだから仕方ニヤい…じゃありませんかニヤ……。

「じゃあボクが説明していくからあとはそっちにお任せしてもいいですかニヤ？」

「あ、ああ、分かった」

まさかこんなことになるだニヤんて……。

内心でため息を吐きながらボクは二人に地図を見ながらその場所の解説をしてくのでしたニヤ。

〓 Now Loading 〓

地図説明を終えたボクはエクセリアさんの家の前までやって来たのニヤ。

どうせ来たなら挨拶位しておかニヤいと後から知られた時に怒られそうだもんニヤ……。

(コンコンコンツ)

とりあえずノックを試してみる。

『はい、今開けますね』

すると、中からそんな声が帰って来てドアが開かれたニヤ。

「はい、どなたですか?……ってあら?」

「お久しぶりですニヤ、エクセリアさん!」

「アイルーくん!久しぶりですね、いつこつちに来てたんですか?」

「ついさつきですニヤ、ちよつと用があつてさつきまでハンターズギルドに寄っていましたニヤ」

中に入れて貰いながらそう話す。

「そうだったんですね、あそこ、相変わらずだったでしょう?」

あそこって多分セレシアさんのお部屋ってことかニヤ?

「あはは……確かに相変わらずでしたニヤ」

「妃星はいつもやり過ぎなんです。もう少し自重してほしいのですけど」

やり過ぎってレベルなのかニヤ……？
というより、妃星って誰ニヤ？

〽Now Loading〽

「ところでアイルーくん」

「なんですかニヤ？」

「随分前の事ですけど、あの約束の事、覚えていますか？」

ハニヤ？約束……？

「申し訳ないニヤ……約束って何のことですかニヤ？」

「やはり覚えていませんよね……そうですね、ウラガンキンを狩りに
行った時……と言えぱわかりますか？」

ウラガンキンを……？確かその時は修羅^{リオレウス}レウスが襲^{修羅種}ってきて……
あ……。

「え、えーとエクセリアさん？約束ってもしかしてただけどニヤ……」

「思い出しましたか？はい、あの時の何でもいう事を聞くというあれ
です」

やっぱりだったニヤ……。

確かそんなことを言ったような覚えがあるニヤ、あの時はエクセリ
アさんを逃がすことで頭がいっぱいだったから特に考えてなかった
のが裏目に出たニヤ……。

すごく嫌な予感がするのニヤ……

^{スファイア}星焰龍さんにモフらせてと言われて地獄を見た時並みの最大級のい

お願いがありますニヤ

アイルー参上！夜戦なら任せておくニヤ！

というより、夜戦ってなんニヤ？

という訳でこんにちはニヤ！ボク、アイルーですニヤ！

今ボクは雪山に来ているのですニヤ。

ニヤ？子守はどうしたのか…ですかニヤ？

ちゃんと終わらせてきましたニヤよ？今はエクセリアさんとジエストさんが面倒見てるはずニヤ。

あの二人の子守は大変なのですニヤ……。

ルーク君はボクに模擬戦の相手をさせようとしてくるし、クララちゃんも、ボクをモフリながら兄であるルーク君の良さをこれでもかと言うほど、延々と数時間以上かけて話してくるのニヤ……。

おまけにエクセリアさんとジエストさんはデートとは名ばかりのクエスト一狩りに行っちゃって、ボクに二人を丸投げしていきやがったのニヤ……。

もう大変 だったニヤよ……。

くくNow Loadingくく

唐突だけど、ボクが雪山に来ている理由を説明するニヤ！

今回ボクが雪山に来た目的はあるモンスターに会うためなのですニヤ。

無断で狩り場に来たのかって？もっろん！ちゃんとクエストを受注してきましたニヤ。

といっても、今回ボクがやろうとしてることは討伐でも捕獲でもないんだけどニヤ……。

じゃあ何をしに来たのかつて？

あるモンスターにお願いをするためニヤね。

ずつと疑問だったのニヤ、星焰龍^{スファイア}さんから力を貰った時からずつと……。

アイルルーは通常、モンスターの能力を吸収するなんて事は出来ないはずなのニヤ。

けど、星焰龍^{スファイア}さんと戦った時や、あの変なイビルジヨ^星ーと戦った時に手に入れたあの力……。

これは明らかに普通じゃないニヤ……。

確かにボクはニヤイタマ先生を真似て筋トレをしてここまで強くなったニヤ。

けど、あの力は筋トレをしたくらいで身につけられるようなものじゃないニヤ。

だから検証してみることにしたのニヤ、鳥竜種や甲殻種、牙獣種に飛竜種、後は獣竜種の全力の攻撃を受け止めてみたのニヤ。

けど結果はどれもハズレ……能力を手に入れる事はできなかったニヤ……。

じゃあ星焰龍^{スファイア}さんや、あの、変なイビルジヨ^星ー（後でジェストさんに聞いたら蝕星龍^蝕って呼ばれる古龍種らしいニヤ……）この二体に共通する点はなにかニヤ……。

そう思って調べてみたら見つけたのニヤ、あの二体の共通点！
それは古龍種という事だったのニヤ。

通常の龍種から古龍種になったっていうのもあるけど、それはあの二体だけしか見つからニヤかったからこれは多分違うニヤ……。

でも古龍種なんてそう簡単に会える訳でもないニヤ、前世で例えるなら、女優や俳優といった超有名人の方達と同類ニヤね。

会いに行けるアイドルや休日アイドルなんかとは全然違うニヤ……。

だからボクは出来得る限り懸命に古龍について調べたニヤ、セレスニアさんに頼み込んで古龍観測体の報告書を見せてもらったり、クエストで古龍討伐ものが入っていないか逐一確認したりしてたのニヤ。

そんなある日、観測体の報告書を見てたら遂にお目当ての情報があつたのニヤ！

その報告書に書かれていた情報は鋼龍クシャルダオラが雪山に姿を現したというものだったニヤ。

それを見たボクは、直ぐ様クエストを確認しに向かったニヤ、そして目的のクエストが置いてあつたのニヤ。

このチャンスを逃すわけにはいかニヤいと、ボクは即座にそのクエストを受注して雪山に向かったのニヤ。

アイルーだから体毛のお陰で寒さを感じることなくクシャルダオラの探索を出来るのニヤ！

さて、クエスト目標は何処にいるかニヤ〜？

〜Now Loading〜

とりあえずエリア9に来てみたけど…ここにいるかニヤ？

「……………(ズンツズンツズンツ)」

あ、いたニヤ…割りと普通に歩いてたニヤ。

目標も見つかったことニヤし、とりあえず交渉開始ニヤ！
ボクはクシャルダオラに近づいて声をかける。

「あの…その古龍さん、ちよつといいですかニヤ？」

「ツ！シャルウウウウツツ!!」

ハニヤ〜やっぱり警戒されるニヤよね……。

暴風の幕が身体の周りを覆ってるのが何よりの証拠ニヤ。

「えっと、そんなに警戒しないでほしいのニヤ、実は貴方にお話…というより、お願いがあつて来たのですニヤ」

「シャルウウ?」

ニヤ? 暴風の幕が消えたニヤ? ホツ…よかったニヤ…。

一応話は聞いてくれるみたいニヤね

「そうですニヤ、ボクは貴方に危害を加えるつもりも敵対するつもりも毛頭ありませんニヤ」

「というか敵対なんかしてこのチャンスをはたらいたら次は何時になるかわかったものじゃないニヤ!」

「シャルウウウウウ」

「あ、聞いてくれるのですかニヤ? 実は…」



クシャルダオラは困惑していた。

目の前のアイルーという小さな獣人種の存在に…。

この獣人種は話がしたいと言って声を掛けてきた。

しかもその願いの内容は『ボクに全力の能力を使った一撃をぶつけてくださいニヤ』という意味不明なものであった。

ただの死にたがりか、そもそも頭の作りが残念なのか、クシャルダオラには解りかねるところであったが、一応その願いは聞いてやることにした。

「本当ですかニヤ?! ありがとうございますニヤ!!」

まるで子供のように跳び跳ねて喜んでゐる獣人種。

死ぬかもしれないのに呑気なものだ…。

別にクシャルダオラからすればこの小さな獣人種がどうなろうと

知ったことではない。

生きてようが死のうが、クシャルダオラには全く関係のないことなのだから……。

だからこそ了承した。

暇潰しには丁度良かった。

風を再び纏い獣人種から少しだけ距離をおく……。

そしてエネルギーを集めるためにチャージを開始する。

体内に暴風のエネルギーが集まり凝縮されていき、やがて限界までチャージする。

チャージを終えたのを確認して獣人種の方をチラと見てみる。

「……………」

そこには先程までの子供ののように跳び跳ねる獣人種ではなく、受ける為に構えをとり、真剣そうに表情を鋭くした獣人種の姿があった。

先程までとは明らかに違う…異質で底知れないナニカを感じさせる……。

そんな雰囲気その獣人種は放っていた。

お前はいったい何者だ……？本当に獣人種なのか？

生ける天災にそんな疑問を抱かせる程の雰囲気その獣人種は放っていた。

「ルオオオオオオオツツ!!!」

【ドツツツツ!!!】

しかし約束は約束、限界までチャージした暴風のブレスを、クシャルダオラはその獣人種へと向けて撃ち放った。

放たれる極太の暴風の弾丸……。

それはもうスピードで獣人種へと向かっていき、直撃した。

直撃する最中、クシャルダオラには獣人種が何かを呟いていたのを耳にした。

「シャルウウウウウ」

訳がわからずクシャルダオラは獣人種に問いかける。

これはいったいなんなのだと……。

「……ありがとうニヤ……。クシャルダオラさん、あなたのお陰で漸く分かりましたニヤ……。これはクシャルダオラさん、貴方がくれた力で
すニヤ」

訳がわからなかった……。

お礼を言われたことも、あの姿が自身のお陰だということも……。

最早この小さな獣人種が何を言っているのかクシャルダオラには理解できる範囲を越えていた。

その中で二つだけ分かることがあった。

それはこれ以上この獣人種に関わるべきではないということ、そして手を出すべきではないということ……。

手を出せば、この獣人種はいとも簡単に自身の身体を粉微塵に出来るだろう……。

そう確信できるほど、獣人種の放つ存在感はクシャルダオラの本能にそう警報を鳴らしていた。

「シャルウウウウウ」

「そうですニヤね、ああ、それと、もうひとつお願いがありますニヤ、しばらく雪山には近づかないようお願いできますかニヤ？ボクも一応ニヤンターなので、撃退したってということにしておきたいのですニヤ」

言われなくてももうしばらく来るつもりはない……。

お前にはもう二度と出会いたくない……。

そう思いながらクシャルダオラは足早にその場を去っていくのだった。

もう二度と出会う事がないように……。

ただそれだけを願いながら……。



後に、その獣人種のことを祖龍へと報告したクシャルダオラによってアイルーはミラスから目をつけられることになるのだが、そのことを今のアイルーは知る由もない……。



ギルドの報告書

雪山にてニヤンターアイルーと鋼龍クシャルダオラが遭遇、クシャルダオラの攻撃を何らかの方法で吸収したアイルーがクシャルダオラに酷使した力を使ったという観測体からの報告があった。

クシャルダオラは怯えたように雪山から逃げ去って行った模様

これよりニヤンターアイルーを【撃滅拳】としてG級ハンターとみなす。

そして、獣人種アイルーを【拳滅獣】『ルイン・フィスト』と呼称し、警戒体勢に入る。

【拳滅獣】として不穏な動きをした場合は直ちにギルトナイトが殲滅を行うこととする。

ボクの星にツ…落ちてるんじゃないニヤツ!!

獣人種型一番猫アイルー! 気合い! 入れて! 行きますニヤ!

という訳でボク、アイルーですニヤ。

今、この星は大混乱に陥っているのですニヤ。

何が大変かって? 今まさにこの星に超巨大隕石と
そしてドンドルマには老山龍が高速接近しているのですニヤ!

え? そんなの星焔龍達に任せておけば万事解決かニヤ?

それがそうもいかないのですニヤ、あの人外さん達は今、別の案件
で世界中を飛び回っているのですニヤよ。

だから残った者たちでこれらを迎撃しないとイケないのですニヤ。

隕石が星に衝突するまで後、推定一日、老山龍接近までおよそあと
半日らしいのニヤ。

迎撃するのなら時間が少ない老山龍の方なんニヤけど…。

「隕石がどの程度の速度で落ちてくるのか予測できないから
ニヤア…」

きつとボクが出れば老山龍は簡単に終わるニヤ。けど、それじゃあ
もし、隕石が速度を速めて落ちてきたときに対応が出来ないのニヤ。

それに、出来ればあまり星に接近しないうちに破壊しちやいたいの
ニヤ。

隕石の話はニヤイタマ先生の話にもあったのニヤ、あの時は接近の
し過ぎでとんでもない被害が街に出てたっけかニヤ…。

あの時は街だったけど、今回は規模が違うから早めに破壊したいの
ニヤ。

けど、どうやって迎撃すればいいんだニヤ…。

ボクの跳躍力じゃ大気圏まで飛んでいくのは難し… ドクンツ…
ハニヤ?

いや、出来るニヤ…。 僕はその方法を知ってるニヤ。

でも、なんでこんな方法知ってるのニヤ？ボクはこんなことを学んだ覚えは無いニヤ！
けど…………。

「今は使わせてもらおうニヤ！この知識！」

ボクはそうして火山に向かったのですニヤ。

〃〃Now Loading〃〃

「ふう…ここはいつ来てもアツついニヤア…」

やってきましたニヤ火山の麓！

さて、ここからどうするかニヤ、それはニヤ？

「——必殺マジネコシリーズ——

——マジネコ混ぜ——」

【ギュルルルルルツツ!!】

ニヤニヤニヤツ!!?三つの力がボクを中心に渦を巻き始めたニヤ!

渦はドンドン幅を狭めてきて、やがてボクを包み込んだニヤ。

【シュルルルルツ…カッ!!!】

な、何が起こってるニヤ!!混ざった三つの力がボクの中に入ってきたと思ったらいきなり身体が発光を始めたニヤ!

いつもの能力吸収の時とは比べ物にはならないほどの輝きニヤ!

いったい、ボクの身体に何が起こってるのニヤ!?

〃〃Now Loading〃〃

やっと光が収まったのニヤ… 収まったんニヤけど…。

「なんとというか、凄いことになっちゃったニヤア…。」

スファイア星焰龍さんの金色と、アフエリス蝕星龍の銀色が混ざったような赤褐色にクシヤル鋼龍さんの暴風のように吹き荒れるオーラがボクを包んでいたのニヤ。

「でも、これならいけそうだニヤ！」

膝を曲げ、グツと力を籠め、両腕を大きく後ろに振り上げると、ボクは思いつきり跳び上がったニヤ！

【ビュオッツ!!】

ニヤツハアアア!! 凄いのニヤ! 滅茶苦茶早いニヤ! もう火山があんなに遠いニヤ!

これなら隕石まであつという間に着けるニヤ!
それにしても……。

「これは跳んでるといふよりは飛んでるみたいニヤねー」

クシヤル鋼龍さんの暴風にスファイア星焰龍さんの焰がロケットみたいにボクを押し飛ばしてくれているみたいニヤ。

(ンニヤ? あれニヤね)

しばらく飛んでいると目の前に目を疑うほど大きな隕石が姿を現したニヤ。

(ボクの星にツ…落ちてるんじゃないヤツ… ないニヤアアアアツツ…!!)

『並龍猫パンチ』

【ドゴオツツ!!】

振りぬいた腕から赤褐色の暴風が飛び出し、隕石包み込む。

(そのまま… 銀河系の彼方まで飛んでいきやがれニヤアあああああ
ああ!!!)

一気に出力を上げた赤褐色の暴風は隕石を押し戻し、そのまま宇宙
闇の中へと飛んでいきやがて姿を消した。

終わったのニヤ……。

ボクもそろそろ息が限界ニヤ… 早く戻らないとニヤ!

息… 続けてくれニヤよ!

祖龍って…彼の祖龍ですかニヤ!?

我輩はネコである。名前はまだニヤい……。

と、そんな冗談は置いといて、ボク、アイルーですニヤ!

現在ボクの前にはある三体の龍がいらつしやるのですニヤ。

というより、拉致されて連れてこられたって言うほうが正しいかもニヤ……。

あの隕石を吹き飛ばしてから数ヶ月…。

ボクの周りではいろんな事が起こってたニヤ。

先ず、全古龍の棲み家に出向いて全力の一撃を撃ってもらったり……。

偶然帰った女王領域では死体で出来た龍らしきモノと、スファイア星焰龍さんが戦ってたり……。 (あれは自分の目を疑ったニヤ……) スファイア星焰龍さんにオトモの件はまだかと催促されたり……。

レウスさんが古龍化してたり……。

と、色々あつたのですニヤ……。

そして久しぶりにクシャル鋼龍さんに会ったと思ったら問答無用で拉致されてこの御三方の前に放り出されて今に至る……という訳ですニヤ。ボク、いったいどうなっちゃうのニヤ……?

〽〽now loading〽〽

「へえ、君が噂のアイルーくんね」

目の前の女子高生がそう声をかけてくる。

い、今起こったことをありのままに話すニヤ、ボクはある三体の龍のところ连接到こられたと思ったら三体の内一体が女子高生ぐら

いの背丈の学生服を纏った女性が現れた！

何を言ってるのか分からニヤいと思うが、ボクも何が起こっているのか分からなかったニヤ……。

変身だとか変化みたいなのでは断じてねえ…もつと恐ろしいものの片鱗を味わったニヤ……。

「あれ？おーい、聞いてるー？」

「ハッ…な…なんですかニヤ？」

今、完全にフリーズしてたニヤ……。

「聞いてなかったか、もう一度聞くよ？君が噂の姫星のところにいるアイルーくんなんだよね？」

噂？ボクが噂になっているのかニヤ？

というか、姫星って誰のことによ？

「噂っていうのがなんのことか分からニヤいし姫星っていうのが誰なのか分からニヤいけど、ボクはアイルーですニヤ」

「あれ？そうなの？そっか、知らなかったんだ…」

な、なにやら意味深なことを言って黙り混んじやったけど、なんなのニヤ？

とりあえず疑問を聞いてみるニヤ！

「それより、ボクがここに連れてこられた理由を聞いてもいいですかニヤ？」

「え？ああ、そうだね、君を呼んだのは、そうだね…興味があったから、かな？」

「はあ…」

興味があつた？ボクそんな目立つような事してたかニヤ…？

そもそもこの御三方が何て龍なのかも分からないのだけどニヤ…。

けど、真ん中の女子高生はともかく隣の二体はどっかで見覚えが…。

「あの…つかぬことをお聞きしますが…貴女方はいったいどなたなんですかニヤ？」

「あれ？言つてなかつたっけ？私はミラルート、世間一般で言われるところの祖龍だよ。それと隣の二体は私の弟よボレアスとバルカン」

ハニヤ…？祖龍…？祖龍つてまさか…！！

「あの祖龍つて事ですかニヤアアアアツツ！！」

折角だし貰っておきますかニヤ!

こんばんは、アイルーですニヤ!

現在ボクは絶賛祖龍達に捕まっているのですニヤ。

「あ、そういえば!」

「ニヤニヤ!?ニヤンですかニヤ…?」

い、いったい何を言われるのニヤ?

「あの子から聞いたけど君って他の古龍から能力を吸収出来るんですよ?どのくらい集めたの?」

鋼龍クシヤルさん…なんてこと喋っちゃってるんですかニヤ…。

ボクまだ誰にも話してニヤかったのに…。

「えーつと…多分ほとんど集め終わったと思いますニヤ」

「ふうん…じゃあ後残ってるのはどのくらいなの?」

な、ニヤんでこんな根掘り葉掘り聞いてくるのニヤ?

「良くわかりませんニヤ、ボク、余り古龍のこと知らないですからニヤア…」

「そうなんだ、じゃあ私達が古龍ってことは知ってる?」

「ンニヤ?それはもちろん知ってますニヤ」

「それは知ってるんだ…。じゃあどうせだし、私達の間も持つてく?」
へ?今ルーツさんなんて言ったのニヤ?

能力をくれるっていつてたかニヤ？

「い、良いのですかニヤ？」

「もちろん、能力の吸収っていうのに興味あつたしね」
そんなことで能力あげちやつて良いのかニヤア……。

「じ、じゃあ折角だし貰っておきますニヤ」

「オツケー！それじゃあまずは誰から行く？」
祖龍^{ルーツ}さんが隣の擬人化したらしい二人に話しかけるニヤ。

『なら。まずは。オレから。いく』

そう拙く話ながら出てきたのは先程ミラボレアスと呼ばれた黒い龍が一步前に出てきたのニヤ。

「お、じゃあボレアスからいこつか、よろしくー♪」

『お前。ずっと。見てた。一度。戦つて。みた。かった。』

ずっと見てたって…ただのストーカーじゃないですかニヤ……。

「とりあえずお手柔らかかお願いしますニヤ…」

『分かった。オレ。は。どうすれば。いい？』

見てたのにそういうところは見てないのニヤね…まあいいニヤ。

「ボレアスさんはボクに全力の一撃をて叩き込んでくださいニヤ、ボクはそれを全力で受け止めますからニヤ」

『了承。した。早速。いく。ぞ』



口内に強大な火球を展開し、撃ち放つミラボレアス。迫り来る火球にアイルーは慌てた様子もなく静かに構えをとった。

「――必殺龍ネコシリーズ――
ルー龍ネコキャッチー」

そうポソリと眩き、迫り来る火球を全身で受け止めようとするアイルー……だが……。

「ニヤツ!?ギニヤアアアアアアツツ!!」
火球に吞まれ絶叫をあげるアイルー。

「えっ……?」

「……………」
ミラルーツ達が驚く中、ミラボレアスだけはその様子をじっと見つめる。

【ゴオツ…カッツツ】
すると、先程までアイルーが立っていた場所から火柱が渦をまいて上がり、直後、閃光が迸った。

「ツ…この光…まさか…」
ミラルーツがその光を見て何かに気づいたように眩く。
その間に光は収束を始め、やがてアイルーのものとなり消えた。

「……………」

光だったそれは、まるで身体の調子確かめるように小さく腕を動かしているのだった。



ニヤー…死ぬかと思ったニヤ…今まで色んな古龍の攻撃を受けてきたけど、今回は特にやばかったニヤ……。

気がついたら向こうに河が見えてたのニヤ、あれは多分三途の川ニヤ！

ニヤんか変なお爺ちゃんが向こう岸で怒り心頭だったけど…あれはなんだったのニヤ？

そんなことよりも、今はこっちニヤね。

ボクの身体は今が炎みたいになってるのニヤ！

テオさんやナナさんにの炎も受けたけどこんな風にはならなかったのニヤ。

現にボクの立ってる場所が溶けて熔岩みたいになってるニヤ。

「へえーボレアスの力を吸収するとそんな風になるんだ、なんとなくボレアスに見えてくるね〜♪」

「そうみたいですニヤね、流石は伝説って言われる方だけあって内から力が沸き上がってきますニヤー！」

「あはは、まあボレアスは火力極振りだからねー…。じゃあ次は私達行こっか」

ニヤ？ま、まさか……。

「い、今すぐですかニヤ？」

「え？うん、そのつもりだけど」

「流石に少し休ませて欲しいんですがニヤ……」

「だーめ♪」

「ふ、不幸ニヤア……」

ボク、無事にここから帰れるのかニヤア……。

V Sバルカンですニヤ!

獸人種族○番生のアイルーニヤ!棲みかで火遊ケンカびはしないでニヤ、
お願いニヤ?

というわけでえ!ボク、アイルーですニヤアア!

うおつ…なんでそんな喧しいのか…ですかつとギニヤツ!?
それは勿論…。

『そら、早く逃げねばお前自身が塵になるぞ』

バルカン紅龍さんに超巨大火球を放たれているからニヤアアアアアア
アツツツ!!

「ギニヤアアアアアツツ!!炎の力はもういりませんニヤ!黒龍ボレアスさんのだ
けで充分ですニヤアアア!!」

素晴らしいながらもボクは火球を避け続けますニヤ。

あんなの二度も食らったら今度こそ消し炭確定ニヤ!

絶対に当たるまいと孟スピードで迫る巨大火球から避けていく。
でも……。

こんなので逃げていたら巨大隕石を拳一つで殴り壊したニヤイタ
マ先生にはいつまで経っても追い付けないニヤ!

よ、よーし…!やつてやるニヤ!

ボクは逃げるのを止め、飛んでくる火球を迎え撃つために立ちはだ
かりますニヤ。

「こんな炎なんか…こうしてやるニヤアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアツツ!」

《気持ち強めネコアツパー》

アツパーで上空へと打ち上げられていく巨大火球。

一瞬の静寂…その直後……。

【バズンツツツ】

轟音が辺り一面に響き渡った。

『……ほう、迫ってきた火球をギリギリのところまで引き付け、着弾の寸前に超高速で下からアツパーを叩き込み、その風圧で火球の軌道を無理矢理変えたか…考えましたね……』

「はあっ…はあっ…し、死ぬかと思ったニヤ……」

マジでなんなのニヤ？あの火球……。

いまだに腕がビリビリしてますニヤ……。

本気で殴ればまだ大丈夫かもニヤけど…いまのボクだと世界にどんな影響を与えるか分からないからニヤア……。

「はあっ…はあっ…ふう……。

これで納得してくれましたかニヤ？だから違う力を……」

『何を言っているのですか？私は始めから炎など使ってはいませんよ？』

「……はニヤ？」

炎は使っていない…？…いつたいどういうことですニヤ？

『その証拠に、ほら、上を見てみなさい……』

上…？…いつたいニヤにが……ギニヤツツ!?

「ま、まさかあれって……」

『ようやく理解しましたか、そう、あれは隕石、通称メテオです』
そんなことは早く言ってほしかったニヤア……。

おかげで無駄な体力使ってしまったニヤ。
でも……。

「獲物さえ分かれれば後はどうとでもなりますニヤー！」

ボクは今まで集めた古龍達の力を一つに凝縮していく。

「——必殺、古ネコシリーズ——」

——古変化——」

すると、ボクの身体に変化が現れる。

毛並みは表現のしようがない程のドス黒い色へと染まり。

瞳は何も映していないかのような深い闇色へと変わり。

身体の周りからは鋼龍クシヤルさんのようなオーラが立ち上っていた。

『ツー……お前その姿……』

「すごい姿だね——まるでハリウッド映画の黒幕だよ」

『オレの。力も。入っている。とてつもない力だ』

「……………」

紅龍バルカンさんたちが何か言ってるけどボクの耳には何一つ聞こえニヤい。

ただ、ボク目掛けて落ちてくるメテオを見つめている。

そろそろかもニヤね……。

「——必殺、古ネコシリーズ——」

——古ネコキヤツチ——」

一蹴りの跳躍で一気にメテオへの距離を積めると、全身から闇色のオーラを放出させてメテオを包み込んでいきますニヤ。

メテオも只では呑み込まれまいと言わんばかりに落下してきますニヤ。

「ぐうううっ……あ……ば……れ……る……ニヤアアアアアアアツツ!!」

全身全霊の力を使い、メテオの勢いを止めていくニヤ。
押すか抑えられるか……。

ボクとメテオの力の応酬が続きますニヤ……。
すると、メテオの勢いが弱まり始めたのニヤ。

どんどん弱くなっていくメテオの勢いに、ボクはここぞとばかりに
力を振り絞るニヤ！

「これで…終わりニヤ！」

【ジュツ】

やがて、そんな音と共にメテオはオーラの中へと消えていきました
ニヤ。

すると……。

【カッツツ!!】

ボクの身体から溢れんばかりの光の柱が登ったのですニヤ。
来ましたニヤね、きてきて、今回はどんな能力なのかニヤー？



光が収まると、そこに立っていたのは、隕石のように黒い肌に、大
気圏突入時のような炎のような毛並みのアイルーが立っていた。

「なるほどねー…。バルカンのメテオの力を手に入れてその姿になっ
たんだー」

さっきのボレアスの時の姿もそうだったけど、個々の力の特徴を残
した姿になっているみたいだね。

いったい何をしたらこんな風になるの…？

姫星だって、全ての力を混ぜ込んで使うなんて事はしてなかったし

……。

まさか……とは思うけどねー……。
一応、警戒だけしときましょー

V S ルーツ戦ですニヤ!

アイルーニヤよ! 物騒な場所ニヤね、よろしくニヤ!
というわけで、ボク、アイルーですニヤ!

現在、ボクは休むことなく祖龍ルーツさんとのたたかいにのぞんで
「さてきて、じゃあ今度は私の番だねー」

「ニヤー…お手柔らかにお願いしますニヤ」

「それは君次第だと思っけどねー」

そんなことを言いながら少し距離を開け、ボクは祖龍ルーツさんと対峙す
るニヤ。

黒龍ボレアスさんに続いて紅龍バルカスさん、更には祖龍ルーツさんまで相手にしないといけ
ないなんてニヤあ……。。

あの二体はなんとかなったけど、この龍ルーツだけは気を引き締めて掛か
らないと不味そうだニヤ……。。

「それじゃあ…いくよー!」

【トンツッ】

擬人化した状態のまま軽い初動の踏み込みのみで一瞬でボクとの
距離を積めてくる祖龍ルーツさん。

ニヤニヤツ?!ちよつと早すぎるかもニヤBダツシユ!
でもニヤ、祖龍ルーツさん、それができるのはあなただけじゃないのニヤ
よ?!

雷速を越える早さで後ろ足を高速で動かして、瞬間的な移動でその
場から立ち退くニヤ。

【ビシュウツッ】

直後、さつきまでボクのいたところに祖龍ルーツさんの腕が突き刺さって
いたニヤ。

その拳には雷がパリパリと走っていましたニヤ……。

「あちゃー避けられちゃったか……。どう？即席で考えた超電磁拳は」

「どうって言われましてもニヤあ……」

そんな危ないもん向けるんじゃないニヤツ!!……って言わせて貰いたいところニヤ!

「うーん……音速の五倍くらいで速度で飛ばしてみただけどなあ……。普段から雷速を出せるには足りなかったかな？」

「いや、あんなの食らったら全身バラバラになりますニヤよ!？」

「またまたあ……君がそんなことくらいで死ぬとは思えないんだけど？」

し、信用されてニヤいー……ツツツ!!!

というか、この龍、全くボクの話聞いてないニヤ!

喋り方もどことなく星焰龍スファイアさんに似てる気がするのニヤ……。

「ところで、一つ聞いていいですかニヤ？」

「ん？なにかな？」

「祖龍ルーツさんは本来の姿に戻らないのですかニヤ？」

そう、ずっと気になってたのニヤ、黒龍ホレアスさんや、紅龍バルカンさんは本来の姿で戦っていたのに、どうして祖龍ルーツさんだけ擬人化したままニヤのか……。

「え？ああ、これ？うーん、そうだね……。こっちのほうがやりやすいから、かな？」

「はニヤ？え…？そうなんですかニヤ？」

「そうだよーあの姿本来の姿だと小回りとか利きづらいからねー」

『まあ、力の制御はあっちの方がやりやすいんだけどねー』

そういつてコロコロと笑う祖龍ルーツさん。

本当にそうなのかと若干怪しくも感じるニヤ…。

「さて、お話しはここまで、ここからが本番だよ、アイルーくん♪」
その言葉を聞いて、ボクは気をさらに引き締めるニヤ。

「今から私は全力の一撃を君に叩き込む、君も全力で受けなきゃ死ぬから覚悟して受けなよ？」

「…：分かりましたニヤ」

返事をして小さく頷く。

それを見て祖龍ルーツさんは本来の姿に戻ると、何かを空に向けてし始める。

ボクも自身の中でどの力を使って受けるかを考えますニヤ。

やがて、空が青白く光りだし、その中でも一層強く光を放ちつて、ボクのところへと落ちてきたニヤ。

ここはこの三つでいきますニヤ！

、星焰スファイア龍ボレアスさん、黒龍バルカンさん、皆さんの力、お借りしますニヤ

！

「——必殺焰ネコシリーズ——」

——焰ネコ受け——

【ドツツツ!!】

ボクの胸に巨大な雷が落ちてくる。

グググググ…：ツ!!おっもいニヤ…：ツ!!

黒龍ボレアスさん達のは比べ物にならない重さニヤ…。

このっ…ままじゃっ…：ボクどころか、星そのものが危ないニヤ

……ツツ!!

ニヤイタマ先生!ボクにどうか力をつ……貸してくださいニヤ!!
すると不意に頭のなかに声が聞こえてきたのニヤ……。

<くん?…ああ、分かった>

刹那、ボクの身体に力が溢れてきたのニヤ。

今まであんなに重かった祖龍^{ルーツ}さんの攻撃が嘘のように軽くなっていくニヤ。

「ニヤイタマ先生……この技、お借りしますニヤ……」

『——必殺マジシリーズ——』

『——マジ吸収——』

こんな雷…簡単に…ツ!!

「吸収……っしてやるニヤアアアアアツツツ!!」

【カツツ!!!】

辺りに一層目映い光が溢れだしたのニヤ。

ぐっ……!駄目ニヤ……!目を開けていられないニヤ!!

目を閉じて光が収まるのを待つ……。

そうして、ようやく光が収まり目を開けると、そこには青白くパチパチとスパークの走る毛並みが目に入ったのニヤ。

「なるほどねー…私の力を吸収するとそんな風になるんだ」

その声に振り向くと、擬人化して女子高生風の姿になった祖龍^{ルーツ}さんが面白そうにボクを見てたのニヤ。

「そうみたいですニヤ、お三方、本当にありがとうございますニヤー!」

「良い。おまえ。また。強くなった。今度は。本当に。戦ってもらおう。」

「私は、姉上の指示に従ったまでのこと…だが、折角くれてやったのです。その力、おかしな事に使わないように」

「私のはただの気紛ぐれだからねー、見ててそれなりに楽しめたし、満足かな」

ニヤハハ♪やっぱりこの龍達には敵わないニヤあ……
でも、そろそろ帰りたいのニヤけど……。

「ん？そうだね、じゃあくシャルに送って行かせよっか、行き先はくシャルに直接伝えてつれてってもらって」

「分かりましたニヤ！色々、ありがとうございますございましたニヤ！」
そうしてボクは迎えに来た鋼龍クシャルさんに乗って、旅に戻るのでしたニヤ。



あのアイルーが去ってすぐ、ボレアスが声をかけてきた。

「姉上、やはりあの獣人種……」

「あ、やっぱりボレアスも気づいた？そう、あのクソジジイの忘れ形見だね♪」

「ツーそれを分かっっていながら何故力を渡したのですか？」

まあ、普通そう思うよねー……。仕方のないことだけど……。

「妹のお気に入りだから…かな？」

「……は？」

「なんでもないから気にしない気にしない♪」

これからアレがどんな成長をしていくかは分からない……。でも、見守ってみたいと思ってしまうたのも事実。

「さて、これからどうなっていくのかなー？」

君がどこまで行くのか、見届けさせてもらうからね？

アイルーくん♪

とある村ハンターの渡航記録

「君達に、導きの青い星が輝かんことを…」
調査団……。

それは新大陸の秘密を調査を行う隊の総称だ。

私、メラン・シュレイドはその隊の船へと乗り込んでいた。

何故ポツケ専属ハンターであった私がここににいるかには理由がある。

「村長さんとも話してただけどね〜貴女、何度もこの村の危機を救ってくれてるし、頑張ってるもの〜……。だから貴女を調査団に推薦したのよ〜」

「え……？それって……」

「新しいお仕事、頑張つてね〜♪あのネコちゃんに追い付きたいんでしょ〜？」

「ツ……！分かりました、お心遣いありがとうございます」

「いいのよ〜新大陸での調査は大変かもだけど、負けちゃダメよ〜」

「はい〜」

という訳である。

私の知らぬ間に、村長とポツケギルドのマスター代理が話を進めていたおかげで私はここにいたのである。

だが、ここに来るまでの旅費が足りなかったので今まで作った装備は全て売り払った。

なので、今の私の装備は最低限のレザー一式のみ……。

多少心許ないが、周りも対して変わらないので気にする必要はなさそうだ……。

(新大陸…か、先生もそこにいるのかしら)

先生…というのはあの獣人族のネコであるアイルーの事だ。

弟子にはしてもらえなかったので、私が勝手にそう呼んでいるだけなのだが……。

その先生はあれ以来姿を見ない。

それどころか、噂すらも上がってこないのだ……。

マスター代理や受付嬢達から聞いた話では、史上初のネコハンターであり、今あちこちで暴れまわっている星焰龍や蝕星龍といった問題龍達を打ち倒した事があるなどの噂がギルド内で流れていると言う話だった。

しかし、あれ以来ギルドでもめつきり話には出てこないという……。

街にも顔をだしていないようで誰も目撃者がいないのだとか……。

(先生に限って、殺られるなんて事は考えにくいけど…)

あのときの光景が蘇る

修羅種のババコンガに襲われた時、意図も容易くババコンガを拳一つで殴り飛ばした姿……。

そんな先生がそう簡単に殺られるとは考えにくい……。

寧ろ逆に先生の前に死屍累々の山が出来ていそうである。

(まあ、なんにしても！先生に追いつくためには向こう新大陸で力を付けて少しでも追いつかないと！)

そんなことを座りながら考えていると、向かいの席に知らない男が座って私に話しかけてきた。

彼も推薦組なのだろうか……。

「よお、もうすぐ新大陸に到着だな！アンタも準備完了？…いよいよかあ、国を出てから長い旅だったなあ…。アンタ緊張してる？俺は…少し怖いけど、楽しミ…」ねえ、もしかしてあなた、推薦組じゃない

？」へえ！奇遇！俺達もなんだ！なあ、名前教えてくれよ！」

矢継ぎ早に話す男の人の対応だけでも困っていたのに、後から来た受付嬢らしき女性まで話しかけてきてしまった。

と、とにかく名前だけでも教えておかないと……。

「メランといいます。言われた通り推薦組です。あなた達もだったんですね」

「ああ、ギルドからの推薦でさ」

「私も同じよ？貴女は？」

「いえ、私はポツケの村長達から推薦ですね」

「へえ、ポツケ村か、あの雪国の村山かあ……町まで出るのは大変だったろ？」

「まあ、そうですね……」

確かに、雪山を徒歩で越えなくてはならないのはそれなりに厳しかったが、後は竜車に乗るだけだから大したことはない。

「まあ、ほら、お近づきの印に……」

そう言って女性が飲み物を渡してくれる。恐らく酒だろう。

それを受け取ると、ふと隣にやって来るものがいた。

「ニャア！」

私のオトモでメラルーのラルだ。

以前、雪山でモンスターに襲われていたところを助けたところ、恩を返すと言ってオトモになってくれた。

「よし！推薦組同士、頑張ろうぜ！」

「乾杯!!」

男の掛け声で杯を打ち鳴らす。

豪快に飲み干す男。

「ぶはあつーそれにしても、古龍はなんで、新大陸に向かうんだろうな
…アンタは新大陸に古龍の秘密があると思う?」

「さあ、私に聞かれても…」

分かるわけがない、私はそもそもあの龍と先生にしか興味がないの
だから……。

「そうだよなあ、けど、調査が始まってから四十年位経つんだとさ、ギ
ルドは俺達五期団の派遣で、古龍渡りの原因を解明されるのを期待し
てるらしいぜ?」

「そうなんですか」

「そうなんですか? って…貴女、知らないの?」

「え? あはは…実を言うと…」

古龍渡りなんて関係ない、私は強くなりたいたいのだ、そのために先生
に言われた課題を達成しなければならぬ。

「そう、まあ、それについては追々分かるでしょうから説明はいいわね
…。そうそう、そういえば、推薦組って、二人一組が原則らしいよ?
貴女、パートナーとはもう会った?」

「パートナー?」

そういえばそんな事も言われたような……。

その時、別の席にいた女性が不意に立ち上がり、窓の方へと駆けて
いくのが目に入った。

その後ろ姿には見覚えがあった。

「ちよつと失礼…」

「ん？おほ…」

私は席を離れ、その女性の元へと向かった。

「あの…」

「分かりますか？さつき、急に波の音が変わったんです。陸が近いからかな…？」

「え？ええ、もうすぐ着くとはさつきの人が言っていましたけど」
急にそんな事を言われても分かるわけなので曖昧に答えるしかない。

「アナタ、推薦組で…って…ああああッ!!」

「はい!?ど、どうしたんですか急に！」

「アナタ、メランよね？ポツケ村の」

「え？は、はい、そうですね…どうして名前を？」

「覚えてない？私よ、マコト！小さい頃よく遊んだじゃない！」

「マコト…？あっ！」

そこまで言われて思い出した。

子供の頃、よく村で遊んでいた女の子がいた。

その子はいったったか、親の都合で村を出ていかなければならなくなり、それ以降連絡もとることなく疎遠になっていた。

「まさかメランが相棒だなんて、こんなことってあるんだね」

「私も驚いたよ、見覚えがあるなあ…とは思ったけどまさかマコトだったなんて」

「あははっじゃあおあいこだね♪」

「そうね、それより、相棒ってもしかして…」

「あれ？ギルドから聞いてない？何を隠そう、私モ…わあっ!!」

マコトがそこまでいいかけたところで、船が大きく揺れた。

「この揺れは…」

「外からだよ！何かあつたんだ！」

甲板に向かって走り出すマコト、私も後を追って甲板へと向かった。

??????????????

外に出てみると船が勢いよく傾いていた。

「船が傾いてる！何処かに掴まって！」

「言われなくてもわかってるニヤ！」

いつの間にか着いてきたラルが半ギレで返していた。

「あああっ!!きやああっ!!」

「くっ…!!」

「女将さー…ん!!!」

勢いよく傾く船、その勢いに負け、私とマコトは船から投げ出されたのだった。

ぼ…ボクの家が…ですニヤ!

ボクは獣人族アイルー。これからよろしくニヤ?

と、いうわけでボク、アイルーですニヤ!

ミラスさん達のもとから帰ってきたボクは久しぶりに住処に帰ってきてたのニヤ。

「はニヤあくやっぱり自宅が一番ですニヤあ…」

何処にいるよりもやっぱり落ち着けるのニヤ。

でも、更に言うなら周りが静かならもっと良かったのにニヤあ…。

「いったいなんなのニヤ? さつきから五月蠅いニヤねえ…」

ヒトがようやく色々なモノから解放されてゆっくり出来ると思った矢先にこれだニヤ…。

「近所迷惑にもほどがあるニヤ! 文句言ってやるニヤ!」

こんな傍迷惑な輩にはキツいお灸を据えてやらないとニヤあ♪

~~~~~now loading~~~~~

騒音の場所に来てみたは良いもの…。

「犯人がまさかあの方達だったとはニヤあ…」

騒ぎの犯人はまさかの星焰竜<sup>スファイア</sup>さん達だったとは思いませんでしたニヤ…。

それよりもあの三人? 匹? スファイアさん…で合ってるんですかニヤ?

何か見覚えのない姿してるのニヤけど…。

というかジエストさん? あなたやっぱり人間じゃなかったですか

ニヤ……。

その一人と二匹はお互いがお互いを削りあいながら殺しあつてるニヤ……。

これはすぐく嫌な予感がするニヤねえ…あぶさん達を連れて遠くに避難しておきますかニヤ！

「そうと決まればあの三匹を探しにいかなくてはニヤ！」

そう呟いてボクはアプさん達を探し始めましたのニヤ。

↓↓↓now loading↓↓↓

最初に見つけたのはジンくんだったのニヤ。

「見つけたのニヤ！ジンくん！」

「グオオオ…？」

「『こんなときにどうかしたか？』かニヤ？

こんな時だからこそ探してたのニヤ、このままここにいたら不味そうだからさっさと避難するニヤ！」

「オオオオオオンツ!!」

『賛成だ、まだ死にたくはないからな』かニヤ？

全くもってそのとおりだニヤ！じゃあ少しジツとしておいてくれニヤ」

そう言うときボクは龍脈から鋼龍クシヤルさんの力を発現させてジンくんを包み込むニヤ。

「ウオツ!？」

「大丈夫ニヤ!そこでおとなしくしててニヤ!」  
そう言つてボクはジンくんボールと共に残りの二匹を探し始める  
のでしたニヤ。

~~~~~nowloading~~~~~

「ナルさん!ようやく見つけたニヤ!」

次に見つけたのはナルさんだったのニヤ!

「ジギヤアアアアツ!!」

『『どうしたの?早く逃げないと危険よ?』ですかニヤ?』

もちろんわかってますニヤ!だからナルさんを迎えに来たのです
ニヤ」

「ジギヤア?」

『『迎えに?どうして?』』

それはもちろん女王領域を離れるためですニヤ」

「シギヤツ?!?!」

『『どういふこと?!?』』

簡単な話ですニヤ、女王領域ここにいたら皆死んじやうニヤ!だから遠くに
逃げるのですニヤ」

「シギヤアアア…」

『そういうことね、分かったわ』ですかニヤ？

分かってくれて良かったですニヤ、それじゃあ動かないでくださいニヤ」

そういうとジンくん同様風の玉の中にナルさんを包み込ませる。

「それじゃあ行きますニヤよー」

【ヒュッツ!!】

「シギヤツ…?!?」

「オオツ…?!?」

ジンくん達^{!!}の悲鳴^{?!?}?を聞き流しながらボクは آپさんを探して速度を上げるのでしたニヤ。

~~~~~n o w l o a d i n g~~~~~

「シシギヤアア…」

「グ…オオ…」

風球の中でぐったりしている二匹を尻目に、ボクは آپさんを探  
す。

さてさて、 آپさんはどこにいるかニヤー?

クンクンと鼻を動かし آپさんの匂いを探る。

すると、すぐにそれらしき匂いを捉えたのニヤ!

見つけたのニヤ!けど、もう殆んど時間がなさそうニヤねえ……。

戦闘音?が、だんだんと大きくなってきたニヤ……。

悠長にしてたら女王領域ごと消し飛ぶ気がするニヤ。

もうサツサとアップさんを回収して離れた方が良さそうニヤ。

「アップさーん!!」

「???'」

アップさんは呑気に草を食んでたのニヤ。

ボクの声に顔だけを向けて不思議そうにしてるのニヤ。

「アップさん、こんなところで呑気に草食べてる場合じゃありませんニヤよ!」

「ルオオ?」

『どうして?あの方が暴れているから?』ですかニヤ?

そうですニヤよ!もう時間が残ってないのニヤ!だから!問答無用ニヤ!」

「ルオ?...ツツ?!?!」

有無を言わさぬ勢いでボクは容赦なくアップさんを風球に閉じ込める。

「文句なら後でいくらでも聞きますニヤ!それじゃあ行きますニヤよ!」

それだけを告げ、ボクはアップさん、ジンくん、ナルさんを入れた風球共々空へと飛び上がるのでしたニヤ。

その直後のことでしたニヤ。

【カツツ!!ドゴオオオオオンツツ!】

耳をつんざくような轟音と閃光が背後で走ったのニヤ。

ツ!!これはマズイニヤ!!

「……極殺バグシリーズ……」

「……古ネコ変化……」

ボクの中にある古龍の力全てを混ぜ合わせ、龍脈を出来る限りフルに使い迫り来る流れ弾から三匹を守る。

「グツ…何をしてくれやがるですかニヤあ…スファイアさんは…」

最早呆れるしかない……。

しばらくすると攻撃は止み、ボクは先ほどまで自分達がいた場所を見て絶句したのニヤ。

「……いくらなんでもこれはやりすぎだと思うのニヤ」

そう思ってしまうのも無理はニヤい…だつてそこには女王領域の欠片も残っていないニヤかつたのですからニヤ……。

なぜボクたちまでとばつちりを受けなきやならないのニヤ…？

これは少々お説教が必要ですニヤあ……。

セレシアさんには悪いけど、ついでにギルドにも苦情をいれてやるニヤ!

跡形もなく消し飛んだ女王領域を見て、ボクは固く心に決めるのでしたニヤ!



ボク…死んだのですかニヤ!?

「……んニヤ?」

気がつくど、そこは見知らぬ空間だったのニヤ。

「え…?なんニヤ?ここいったいどこニヤ?」

辺りを見回すがそこには何もなく、ただ真っ白な空間が続くのみ……。

「いったいどうしてこんなところに…ハツ…!」

ま、まさか!

「よお、ようやく会えたn…」

ボク、ひよつとして死んだのニヤ!?

「お、おーい、聞こえてr…」

ちよつ…嘘ニヤよね?ボクまだ転生?して一年ちよつとしか生きてないのですニヤよ?前世すら死んでいるか怪しいところニヤのに、こつちでの生活はたった一年ちよつとですかニヤ!?そりやないですニヤよ!!こんな状態で死んだら星焰龍<sup>スファイア</sup>さんやエクセリアさん、アプさん達にどんな顔をして会えばいいのニヤ!?

全員がここに来たときにボクは間違いなく殺されるニヤ!

いや、もう死んでるならボクh……。

「話聞けやあああああつ!!」

んニヤ?誰だニヤ?

その声に気がつくど、そこにはゼエゼエと息を切らしながら響めつ面をした某人造人間の弟の方を銀髪にしたような男が立っていたんだニヤ。

と、いうか……。

「え…だれニヤ…?」

ボクという言葉にその男は……。

「いい加減にッしろよおおおおお!!」

高らかに絶叫してたのニヤ……。

凄く…うるさいのニヤ…。

〵〵now loading〵〵

「えーと、落ち着きましたかニヤ?」

「ああ、こうなった原因殆んどお前の所為だけだな」

そんなこと言われましてもニヤあ……。

「それはそれとしてニヤ、ボクに何か用ですかニヤ?ボク、急いでるか  
ら早くしてほしいのニヤけど…」

出来るならここから早々に抜け出したいからニヤあ…

「まあ、そういうなって、やつとお前をここに連れてこられたんだから  
よ、聞きたい事があるんだ」

…ニヤ?今、凄く聞き捨てならない言葉があつたようニヤ……

「ちよつと待つニヤ、今何て言いましたかニヤ?」

「ん?『聞きたいことがあるんだ』?」

「違うニヤ。その前ですニヤ」

「『まあそういうなって?』」

「すつとぼけてるのかニヤ? 『やつとお前をここに連れてこられたんだから』って言つてたじゃないかニヤ!」

あつヤベ…といった顔をする男……。

「あんたかニヤ! ボクを勝手にこんなところにつれてきたのは! ボクを勝手に殺しやがって! ボクまだまだやりたいことが山ほどあったの二いつ!」

ガツクンガツクン男を揺らす。首が面白いくらいにガクガク揺れてるニヤ。

「ちよつ…まつ…おま…死…で…なつ…て…!!」

ガクガク揺らされているのでまともに言葉が聞きとれニヤいけど…今何て言つたのニヤ?

「え…?」

さっきの男の言葉が気になり、ボクは揺らすのを止める。

「ゲホツゲホツ…あー…危うく消滅するところだった…」

半ばグロッキーになつている男に構わずボクは問い詰める。

「そんなことより…さっきなんて言つたのニヤ!? ボクの耳がおかしくなつてなければボクは死んでないってことですかニヤ?」

「うう…そんなことよりじゃねえよ…って悪かった! そうだよ! お前はまだ死んじやいねえって!」

未だにグロッキーの男の反応に殴つてやろうかと構えると、即座に教えてくれたのニヤ。

はああ…良かったニヤあ…死んだ訳じゃなかったニヤ……。

けど、ソレだとまた別に疑問が沸いてくるニヤ

「じゃあここはなんなのニヤ？というか、貴方は誰ですかニヤ？」

「そこからかよ!!」

先程までのグロッキーとは打って代わり、元気に突っ込みを入れる男は『まあいい』とひとつ咳払いをすると答えるのだった。

「俺は——お前を造った創造主だ」

そう言いはなった男は凄まじくムカつくどや顔を晒してこっちを見ているのでしたニヤ……

ボクはボクだニヤ!

今この男はなんて言ったニヤ? ボクの記憶が確かなら『創造主』って言ったニヤ。

「……は?」

思わず口癖すらも忘れて素が出る。

「おい、口調崩れてるぞ?」

「いや、今そんなことどうでもいいのニヤ」

自分でも驚くくらいの低い声が出たのニヤ……

そのまま真顔で男に詰め寄る。

「詳しく話すニヤ、内容によっては痛い目に遭ってもらうニヤ」

「ア、ハイ」

その雰囲気にも負けたのか男は素直に話し出した。

「創造主と言っても、俺がお前を造ったわけじゃない。お前を造ったのは俺の親父さ」

「……………」

ボクはただ無言で続きを促すニヤ。

「と、ここから先を話すにはお前の秘密を話してからだ……」

「ニヤ? ……ボクの…秘密?」

「ああ、実はお前は……」

男の話はこのようなものでしたニヤ。

昔々、ある世界に一人の神様がいらっしやったそうニヤ。

その神様は人間が大好きで、それ以外の生き物が大嫌いだったそうニヤ。

けれど、その神様の見守る世界にはモンスターと呼ばれる化物達が巢食っていたのニヤ。

モンスター達は好き勝手に暴れては人間達を殺していく。

それは人間のことが大好きな神様にとっては耐え難いものであった。

そんな神様が悩んで出した答えは、人間達に力を付けてもらうことであつた。

人間達が強くなればモンスター達を滅ぼせるかもしれない……。

そう考えた神様は次々に人間達に知恵を与えていった。

神様の作戦は見事的中し、人間達は自分達の力でモンスター達を殺し始めていった。

しかし、世の中そう上手くは行かないもの……。

後少しでモンスター達を滅ぼせそうだと思つた矢先、ある三匹の龍が人間達の街を襲い始めた。

人間達は必死に抗つた。神様も出来うる限り人間達に協力したが……。

結果は惨敗……。龍達の手に寄つて人間達は滅ぼされ、神様もボロボロにされてしまった。

神様は悲しんだ。心の底から悲しんだ……。

そして憎悪した、あの三匹を狂つたように憎悪した。

だが、ただ挑んではまた同じ目に遭う……。

其処で神様は考えた。夜も眠らず考えた。

そして出た答えは実に簡単だつた。

目には目を、モンスターにはモンスターを……。

人間でダメならモンスターを使えばいい

そう考えたのだ。

そして神様は他の世界から死んだ人間の魂をモンスターへと転生させ、自身の世界に送り込んだ。

が、結果は散々……。

そこで痺れを切らした神様はまた別の手を考えた。

人間でも、モンスターでもダメなら、いつそのこと合わせてしまおう……と。

しかし、ただ造るだけではあの龍達には勝てない、そう考えた神様は考えられる全ての力を持った究極の人外を造り始めた。

だが、ソレは途中で挫折することとなる。

その生命体を作ろうとしたのはいいが、如何せん時間が掛かりすぎる。

それでは奴等は止められないと判断した神様はソレの製作を放棄した。

しかし……。

神様の使っていたシステムは作業を続けていった。

敵の動きをこと細やかに観察し、そのデータを確実にソレへと練り込んでいった。

そうして、長い年月を掛け、システムはその生命体を完成させていったんだそうニヤ……。

「と、ソレに別の奴等の意識と魂を取り込ませて出来たのがお前だ。だから正確にはお前の創造主は死んだ俺の親父ってことになる」

ニヤ…話のスケールが大きすぎて半分も理解できなかったニヤ……。

「だからお前は古龍達の攻撃を受ければその力を吸収出来たんだ。上手くすれば相手から能力そのものを奪い去る事だって出来る……だからこそ聞きたい

お前は何故ソレを使おうとしない？」

「……………は…どう…どう…とニヤ？」

「惚けるなよ？俺達は古龍姉妹アイツらを殺させる為に態々送り込んだつてのに、お前はなにもしない…だが、所有権は俺が持つてるんだ、お前には従ってもらうしかないんだよ」

……は？ふざけんニヤよ？

「……っけんニヤ」

「…？あ？」

「ふざけるんじゃないニヤ！オマエがボクを造った？あの二匹を殺せ？言うことを聞け？冗談じゃないニヤ！ボクはネコニヤ！ネコは誰にも靡かニヤい、誰の指図も受けないニヤ！ソレがネコの！いいや！アイルーであるボクの生き様ニヤ！」

フーツ！フーツ！言い切ってやったニヤ。

あんな胸くそ悪いこと言われて黙っていられるわけがないニヤ。  
幾ら温厚なボクでも我慢の限界つてもものがあるニヤ。

「っ…！逆らうのか？なら仕方ない、残念だが仕方ないお前にはここで消えてもらうぞ」

「ハッ…やれるものならやってみるニヤ」

「ツ!!この獣人風情があああああつ!!」

おー…挑発にあっさりと載ってきたニヤ、チョロいチョロい。

さて、じゃあ少し本気を出させてもらいますかニヤ。

飛びかかってくる男にボクは軽く拳を構えるニヤ……。

「連続…普通のネコパンチ」

【ズツツドドドドドドドドドドツツツツ!!!】



光速の拳が、男の身体に続々と突き刺さっていく。

「ぎゃあああああああツツ!!」

そんな断末魔の悲鳴と共に男は光の粒子となって消えていった。

ボクはソレを見届けてから言ったのニヤ。

「ボクはネコ、ただ自由気ままに生きていくのニヤ」

その言葉を最後に白い空間は崩壊を始め、ボクの意識は再び闇の中へと暗転していくのでしたニヤ……。

## 新大陸編

渡航？いいえ、渡龍ですニヤ！

「あつづいニ、ヤあく……あああ……コレどうにかならないのですかニヤ……？」

「グルオオオ……」

『そんなの自分でどうにかしろ？嫌ですニヤよお……それじゃあボクが疲れちゃうじゃないですかニヤ』

「……（ボコオツ）」

あつ……これマズいかもニヤあ……

【ドロドロドロオツ】

こ、この音……。

「ギニヤアアアアアアツ！ゾラさんごめんニヤ！謝るからマグマをこつちに垂らすのはやめるニヤアアアツ!!」

あ、そうだ、忘れてたニヤ……。

どうも！という訳で、ボク、アイルーですニヤ！

名前……？募集中ニヤ！（作者がニヤ）

今ボクはゾラ・マグダラオスこと、ゾラさんの背中に乗せて貰ってシнтаイリク？って所に向かってるのニヤ！

え？なんでそんなところに向かってるのか？そもそもあの三匹はどうしたのかって……？

質問が多いニヤねえ……まずシнтаイリク？に向かうのは単に興味があつたからだニヤ！

二つ目の質問の回答は……勿論一緒に居ますニヤ！

その後、良く考えたらこの方達を下手に離したら、何処に放つてもその生態系が壊滅するのニヤ。

そんなことしたらただでさえ星 焔 竜スファイアさんの所為で仕事に追われてるセレシアさんが卒倒しちゃうのニヤ！

ボクは回りのことを考えられる獣人族なのニヤ。

話を戻すと、新大陸ならきつとギルドの手も伸びてないだろうから伸び伸び暮らせるだろうって魂胆だったりするのニヤ。

だから今もあの球体の中で大人しくしてもらってるのニヤ！

え？そんなことして餌は大丈夫なのか？それなら心配無用ニヤ！

ここに来る前にしつかりとエサ用に獲物や食物を懐に詰め込んでおいたニヤ、ちよつと物足りないかもしれニヤいけど、シンタイリクに着くまでの我慢だニヤ。

と、こんなところで今までの説明は終了ニヤ！つて…ボク、いったい誰に説明してたのかニヤ？

すると、不意にゾラさんが声をかけてきたのニヤ。

「グルオオオ…ッ！」

「ニヤ…？隠れてろ…？どうして…ギニヤツ!?」

そこまで言い掛けてボクは驚愕した。

そこにはゾラさんの上を必死によじ登るハンターさん達の姿があつたんだからニヤ……。

しかもよくよく見てみたらそのハンターさん、片方はメランさんじゃないですかニヤ。なんでこんなところにいるのですニヤ?!?!?

驚くボクはバレないように急いでゾラさんの排熱器官のある空間に身を隠しましたニヤ。

幸いなことに、二人はボクに気がついた様子はなく困ったように辺りを見回すだけでしたニヤ。

けど、ボクはそこでミスを感じとる。

マズったニヤあ…これじゃあ熱すぎてボクの方が先に逝ってしまいそうだニヤ……。

けど、ここから出たら確実にメランさん達見つかつちやうのニヤ  
……

……仕方ニヤい、こうなりや根競べニヤ！メランさん達が先に何処  
かに行くか、ボクが熱さで殺られるか…先に折れた方の負けニヤ！

ボクが死ぬ気でそう覚悟を決めた時だった。

メランさん達は近くを飛んでいた翼竜に何かの機械らしきもので  
器用に掴まりそのまま離脱していったのでしたニヤ。

遠くなつていくメランさん達の影を見てボクはそつと穴から出て  
来たのニヤ……。

「メランさんごめんニヤ…。今はまだ見つかるわけには行かないの  
ニヤ…」

メランさん達が消えた方角を見ながらボクは呟くニヤ。

それにしても……。

「はあああ…死ぬかと思ったニヤああ…」

もう二度とゾラさんの上には乗らないニヤ！

そう心に固く決意をして、ボクはまたゾラさんの頭部へと戻ってい  
くのでしたニヤ。

古代樹の森ですニヤ！

「ニヤツと…ゾラサーン！連れてきてくれてありがとうニヤー！」  
ボクは今まで背中に乗せて貰っていたゾラさんにお礼を言う。

「……………（ユクツ）」

ゾラさんは対して何を言うことなく軽く頷くと、ボク達に背を向け何処かへ歩き去っていったニヤ。

ボクはその背中が小さくなるまで手を降って見送るニヤ。

「ふう…さて…」

手を振るのをやめ、ボクは振り返る。

「古代樹の森ですかニヤ」

来る途中にゾラさんから簡単に話を聞いているニヤ。

本土にある密林や森丘等よりも深く、樹海になりかけている大きな森らしいニヤ……………。

ここなら三匹を離しても大丈夫そうニヤね

ボクは能力を切って、三匹を解放したのニヤ。

「お待たせニヤ、アップさん、ジンくん、ナルさん」

三匹はそれぞれ身体を動かしつつ、辺りを見回している。

「ここがボクたちの新たなる住み処！『古代樹の森』ニヤ！」

「ギャガアアアア？」

『『ここでなら前みたいに生活しても良いの？』』

勿論ですニヤよナルさん！また伸び伸びと思うがままに生活して

大丈夫なのですニャ！」

「ルオオオ…」

『「この食べ物はやんと食べられるの？」』

少なくとも女王領域のものよりかは安全だと思えますニャ」

「オオオオオンツ」

『「相手になるような奴がいるのか？」』

それはどうかニャあ…もしかしたらいるかもニャよ？」

その後、それぞれが好き勝手に去っていったのを見送ってからボクも探索にとりかかったニャ！

思うがままに進むこと一時間……。

「んん、どっこニャ？」

ボクは遂に来た道すらも分からなくなってしまったのニャ……

辺りを見回しても見覚えなんてないものばかり……。

これは、本格的に…

「遭難したのニャ…」

ニャアアアアアツ！どうするのニャ！これじゃあボクが方向音痴みたいじゃないですかニャ！

音痴ネコだなんて不名誉な呼ばれ方絶対したくないのニャ！でも

……

「これからどうしたらいいのニャ…」

ボクが途方に暮れているとそこに……。

「そのオマエ、こんなところでなにしてるニャ？」

声のした方を振り向くと、そこには黒毛の尖った耳をしたアイルに良く似たネコの姿があったのニャ……。



最近、不思議に思っていることがある。

それはアイルーくんがちつとも訪ねて来てくれないのです。

前まではちよこちよこ顔を出しに来てくれたのに今となっては全然なのです。

余りにも顔を出さなすぎなので、姫星やレウスにも聞いてみましたが、帰ってきたのは知らないという答え。

姫星の方は個人的にアイルーくんのことを探し始めているのだそうです。

私もジェストさんやセレシアさんに頼んでアイルーくんを捜索を始めています。

アイルーくん…無事でいてくださいね？

テトルーさんと一緒！ですニヤ！

ヤツホー♪ボク、アイルーことシユラだニヤ♪

…うん、スファイア星焰竜さんの真似してみたけど、似てないし、とんでもなく気持ち悪いニヤ……。

とりあえずボク！アイルーですニヤ！

現在ボクは古代樹の森で出会った獣人族、テトルーこと、森の虫かご族の隠れ家にお邪魔しているのニヤ！

「ここニヤ、それにしてもオマエ、見たことない毛並みだニヤ。いったい何族ニヤ？」

ニヤ？そう聞かれると困るニヤあ…アイルー族つてもものがあるのかどうかもわかんニヤいし……。

「良く分かんないニヤ、でも多分、アイルー族つてやつですニヤ」

「多分？アイルー族？」

あちやあ…物凄く不思議そうに首をかしげてるニヤ、ひよつとして、こつちにはアイルーっていいいのかニヤ？

「種族が分からないなんて変な奴だニヤ、でも見たところ我々と似た種族だと思うし、しばらくここにいと良いニヤ」

「ニヤ？いいのかニヤ？」

そんな簡単に余所者を入れちゃって大丈夫なのかニヤ？

「他の奴らなら警戒するけど、オマエは同じ獣人族だから問題ないニヤ」

『ここに居たくないなら別だけどニヤ』と最後に付け足すテトルーさ



ん。

「そんなことないニヤ！寧ろとつてもありがたいのニヤ！けど、ボクなんかが入って迷惑じゃないのかニヤ？」

しかしテトルーさんは軽快に首を降って答えるニヤ。

「それこそ要らない心配ニヤ、ここはそれなりに大きな隠れ家ニヤ。蓄えだつてある、一匹二匹増えたところで困ることはないニヤ」

ニヤニヤニヤ…これは驚いたニヤあ……。

テトルーって種族はこんなにいる人？ネコ？達ばかりなのかニヤ？

言われてみればゲーム内で行ったアイルールの集落に行った時も、ハンターが近づいても対して警戒することなく平気で話してくれていた気がするニヤ。

というか、その集落には大概あのじいさんが居たようニヤ……。

ニヤ…今はそんなことは置いておくニヤ。

「それじゃあ、少しの間だけお世話になりますニヤ」

ボクの言葉にテトルーさんは満足そうに頷いてたニヤ。

「うんうん、素直が一番だニヤ。それじゃあここでの生活を教えるから着いて来るニヤ」

「分かったニヤ」

〽〽now loading〽〽

「とまあ、こんな所ニヤ」

「ニャ…ようやく終わりニャ……。」

テトルーさんの説明があまりに長くてボクの頭の方がもうパンク寸前ニャ……。

しかもテトルーさん、説明がとんでもなく下手くそなのニャ。

あの説明を自分にも分かりやすく噛み砕いて理解するだけでクタクタになっちゃったニャ……。

でも、他のテトルーさん達にも歓迎してもらえたことは嬉しかったニャあ……

これから頑張つてこのネコさん達に協力していくニャー！

バカヤロー！ニヤ！

獣人族型アイルー族筆頭種シユラ！推して参るニヤ！

と、いうわけでボク、シユラですニヤ！

ボクがテトルーさん達、森の虫かご族のところへ厄介になってから  
早二週間が経過したのニヤ。

テトルーさんの案内で古代樹の森の地理もうつつすらと覚え始めた頃ニヤ

ボクは森の地理を完璧にするために散策に出掛けてたのニヤ。

「えつと…確かこの上に行くのと飛竜の巣だったよニヤ…うん、とりあ  
えず別のところに行こうかニヤ」

別に飛竜が襲ってきてても驚異ではニヤいけど、下手にまた噂をされ  
て毎日のように挑まれてもしたら厄介なことこの上ないからニヤ  
……。

「じゃあ、こっちの方に…ニヤ？」

そう呟いて歩き始めたボクは、ふと、ある音に気がついたのニヤ。

その音はズシン…ズシン…ズリズリと段々とボクの方へと近づい  
てるみたいだったニヤ。

なんニヤ？何かがこっちには来てるのニヤ……。

ボクが地響きのする方を見つめていると、そちらから黄色いたてが  
みを生やしたトカゲのようなデカイ生き物が現れたのニヤ！

あつ！黄色いデカたてがみトカゲが飛び出してきた！

シユラはどうする？

戦う

逃げる↑

無視する

ここは逃げ一択ニヤ!

シユラは逃げ出した!

「ジギヤアアアアアアアツツ!!」

しかし回り込まれてしまった!

「ちよつ…なんで邪魔するニヤ!」

「ジギヤアアアアアアアツ」

何言ってるか分かんニヤいし…なんなのニヤこのトカゲ。

「さつさと退けニヤ、じゃニヤいと…殺すニヤよ?」

「ジギヤツ…!?(ビクツ)」

ニヤツニヤツニヤツ!こんな程度の殺気でビビっちゃってるニヤあゝ♪

これじゃあ相手にもならないだろうニヤあ……

「ハア…期待外れニヤ、見逃してやるからどっかいきやがれニヤ」

小さく溜め息を吐いてボクはソイツに背を向けて歩き出すのでしたニヤ。



ドスジャグラスは戸惑っていた。

目の前のその存在に……。

最初見つけたときは良い獲物程度にしか見ていなかった。

しかし、襲いかかろうとしたところ、物凄い重圧がソイツから放たれ、彼はたじろいでしまった。

その様子にソイツは期待外れだとも言うように、まるで興味の失せた表情で溜め息を吐いた。

そして、彼に向けてこう言い放ったのだ。

「見逃してやるからどっかいきやがれニヤ」

そう言うと、ソイツは彼から背を向けて別の方向に歩き出した。

その出来事にしばらく動けなかった彼だったが、状況を理解して激怒した。

ソイツは彼を挑発して、あろうことか見逃したのだ。

プライドの高い彼からすれば許せぬことだった。

あの獣人族だけは許さない：無惨に食い千切ってくれる!!

そういきり立ち、勢い良くソイツに向かい突進する。

ソイツとの距離を積みその小さな身体に飛び掛かる。

殺った!と、彼はそう確信した。

しかし、それが彼の最後に考えていた思考であった……。



なんなのニヤあのモンスターは!!

折角ヒトが見逃してあげるって言ってるのに後ろから攻撃してくるニヤンて!

なんか、前の修羅ディガレックス修羅種レックスの時のことを思い出すニヤあ……

あの時は見逃してやるなんてしなかったけどニヤ。

いきなりだったから全然手加減出来なかったニヤ。

お陰でさっきまで黄色いトカゲだったものが真っ赤な肉残骸になっちやってるニヤ……

ま、いいかニヤ!これはテトルーさんが言ってたカンキョウセイブ

ツ？とかいう奴等が食べてくれるでしょニヤ  
そうしてボクは隠れ家へと帰っていくのでしたニヤ



私、メランは愕然としていた。

何故なら調査の対象であったドスジャグラスが何者かによつて殺されていたのだ。

導虫を頼りに痕跡を辿つてきてみれば、そこにあつたのはドスジャグラスであつたものの残骸……。

しかもそのほとんどは環境生物であるニクイドリどもが大半を食い尽くしていた後だつた。

これでは調査どころではない。

とりあえず、落ちていたたてがみらしき残骸と、導虫が発見していた足跡の痕跡を採取して私は一度マコトを連れてアステラへと帰還するのだつた。

それが、私の探している人物だということは知る由もない……。

邪魔を…するニヤア!!

ホーホツホツホツ! どうですか? あなた達、ボクの下で働いてみる気はないニヤ?

え? んなもん毛頭無いつて? うん、知ってたニヤ。

というわけで、ボク、アイルーシユラですニヤ!

今はテトルーさん達に教えてもらった方法で釣りに来てるのニヤ!

前にも釣りはしたことあったけど、ボクの考えていたのよりもっと  
繊細だったのニヤ

枝はしなりが良いものをさらに細かく削って折れない程度まで細く削るのニヤ。

そして釣糸はクモの巣を調達してきて、それと蔦の蔓に巻き付けて簡単な調合をするのニヤ。

そのあとは糸の強度を上げるために少し日に当てて乾かすニヤ。  
これで釣糸は完成ニヤ。

最後は餌ニヤけど、これは前と同じでいいのニヤ。そこらにいるミズヤハチノコなんかを針に付けてあとは垂らすだけニヤ

え? 針ですかニヤ? そんなの集落から持ってきたものですニヤ!  
竿と糸もそうニヤ。フィールド内じゃこんなことしてたらすぐ襲

われるのニヤ。

え? ボクなら襲われニヤいだろつて?

チツチツチツ…あくまであれは過去のこと…ここじゃボクのことを知ってるモンスターなんかいないニヤ。

だからほら…こんな風にのんびり釣りニヤんかしてると…。

「ギギヤアアアアアッ!」

ほーら、噂をすればなんとやらニヤ。

ここのモンスター達(本国は違うとは言っていない)はテトルーさん

みたいな獣人族を平気で襲ってくるのニヤ。

だからボクも例外なく襲われるのニヤ。

はああ…仕方ない、相手してあげますかニヤあ…。

竿を上げて懐にしまうと振り返りその邪魔物を見る。

ソイツは青っぽいトゲトゲした毛並みに長い尻尾が特徴のイタチみたいなやつだったニヤ。

「…何か用ニヤ？」

「ジギヤアアアアアツツ」

試しに問うてみたけど、やっぱり何言ってるのかさっぱりニヤ。

こつちのモンスター達って基本的に話してる言語があやふや過ぎても何かなんだかよくわかんないのニヤ。

ニヤんて言うか…田舎に来すぎて訛りが強すぎて最早何言ってるか分からないようなものニヤ。

って、ボクはさつきから誰に向けて話してるのニヤ？

「ギギヤアアアアアツツ！」

あ、今の声、聞き取れなかったけど、多分『知るか！』って言われた気がするニヤ！

「ふう…とりあえず、さつきとこいニヤ」

これ以上遅くなるとテトルーさん達が心配するのニヤ。

なるべく早く帰んなきゃ怒られそうだニヤ、それは勘弁願いたいニヤあ…。

「ギヤツ…!?ギギヤアアアアアツツ！」

ニヤ？いきなり飛び上がったと思ったらムササビみたいなことをしてきたニヤ。けどニヤ？

「バチバチ五月蠅いニヤ」



【ドボオツツ】

「ボクの振るったパンチで一撃のもとに肉塊へと変貌するイタサビだったもの。」

「あいっかわらず歯応えないニヤ…つて、違う違う！早く帰んなくちやニヤ！」

こうしてボクは足早に集落へと帰って行くのでしたニヤ



「な、なんだったんだよ…あの獣人族…」

物陰より隠れてみていた陽気な推薦組の五期団は戦慄する。

それはあのアイルーらしき獣人族が襲いかかってきたトビカガチを討伐したのを見てしまった。それも一撃で…

陽気な五期団はトビカガチだったものへと近づくとその欠片を一つ拾い上げる。

「うーん、これじゃあ素材は期待できそうにないツスね…」

けど、まあ…と、陽気な五期団は考える。

あの拳が自分に向けられてなくて良かった…

そう思うのも無理はない…

なにせそこには、極太の大木にかなり大きな肉球型の風穴が空いていたのだから…

後にこの五期団によってこの話はアステラに帰還しその事を伝えられ、ゾラ・マグダラオスと平行して調査が行われることになるのだった…

そして、その話を聞いたある一人のハンターが目を輝かせていたのは誰も気がつかなかった…

## 大蟻塚の荒地ですニヤ!

お前の命、あと三秒……ニヤ……

え?いきなり何を言い出すのか?ただの暇つぶしのものまねニヤ。  
という訳で、ボク、アイルーですニヤ!

今はテトルーさん達に頼まれて新エリアの『大蟻塚の荒地?』という所に向かっているところなのですニヤ

なんでも……『蟻塚のテトルー達にコレを届けてきてくれニヤ』と何やら葉っぱ?に包まれた荷物を渡されたのでそれをお届けするた  
めに向かっている最中なのよニヤー

とりあえず、テトルーさんに貰った地図で大蟻塚の荒地まで向かう  
ニヤ!!

~~~~NOW Loading~~~~

ようやく着いたニヤあ……大蟻塚の荒地い……

テトルーさんの書いてくれた地図……凄く見づらくて散々迷って
ようやく着けたのニヤ……

さてさて、早くこここのテトルー族さん達に渡して……んニヤ?

なんニヤ?これ……

移動するボクの視界の先には、巨大な黒い塊が地面に突き刺さって
いたのニヤー。

あの黒いの……どっかで見えたことあるようニヤ……

気になったボクは、その黒いナニかに近づいて調べてみることにし
たニヤ

◆◆◆Now Loading◆◆◆

近づいて見たけど… デツカいニヤあー…

触ってみた感じ、すごくゴツゴツしてるし、熱も持ってるニヤね。
うーん… この感触割と最近触ってたようニヤ…

…よく分からんニヤ、ここはネコらしく匂いでも嗅いで見ようかニヤ!

じゃあ、早速… クンクンクンツ…

ヴツ… こ、この鼻が曲がりそうな匂いに鉋物が溶けたような匂いは間違いニヤい…。これは、ゾラ・マグタラオスこと、ゾラさんの匂いニヤ!!

長時間あのヒト? 龍? の上で過ごしてたのニヤから間違いようがないニヤ (確信)

けど、なんでゾラさんのカケラがこんなところに… ? というか、これはゾラさんのどの部分なのニヤ?

ボクがそんなことを考えていた時のこと…

「あぁーっ!!」

突如、そんな叫び声が聞こえて来たニヤ

なんニヤなんニヤ!? 何事ニヤ!!!?

「なんでこんなところにアイルーが… というかその痕跡に触らないでえ!!」

… ? なんニヤこのヒト。いきなり叫んで訳が分からないニヤア

「それは我々の研究に必要なものなんだ… すまないが、触れないで貰えるかね?」

あ、なんかもう一人ちっこいおじいちゃん出て来たニヤね。

別に触るなっていうなら従うけど、こんなの調べてどうするのニヤ?

「どうするって… その痕跡を落として行つた古龍を調べることが出来れば永年に渡つて謎だった古流渡りの秘密が解明できるかもしれないの」

古龍渡り…？ゾラさんのあの移動がその古龍渡りなのかニヤ？

「ぞ、ゾラさん…？それってまさか、ゾラ・マグダラオスのこと!？」

…？当たり前ニヤ。それ以外に誰がいるのニヤ？

「… 古龍と知り合いのアイルー…。まさか！キミがあのハンター兼モンスターの撃滅獣と拳滅獣?!？」

ニヤ？なんニヤそれ… 初めて聞いた名前だニヤ

それはそれとしてボクは確かにニヤンターをやつてるニヤ

「あわわわわわっ… あの地形クラッシュヤーズの次に出会つてはならない要注意モンスターに… といつか、何故新大陸に…」

… なんなのニヤ？この娘？急に驚いたと思つたら今度は何か後ろの人らと話し始めちゃつたニヤ。

まあいいニヤ、そろそろ「せん… せい…？」「ニヤ？ま、まさかこの声は…」

「… やはりこつちに来ていたのですね、先生。今度こそ私を弟子にしてください！」

… やつちまつたのニヤアアアアアアアッ!!

弟子志願者との再開… ですニヤ!

「…やはりこつちに来ていたのですね、先生。今度こそ私を弟子にしてください!」

目の前で土下座にも近い形で頭を下げる女性…。その人は以前ニヤンターの仕事としてポツケ村に行っていた時に助けた人間のハンターさん。メランさんだったのニヤ

えー…。せっかくあの時上手く躲せたと思ってたのに…。こんなところで見つかるとはニヤゝ…

装備も偉く変わってるし、確かに実力は付けてきているみたいニヤけど…。うーん…

「えつ…。えつ…。ど、どういうことなの?これ…」

あつ、もう一人の受付嬢さんっぽい娘が状況について来れてなくてあたふたしてるニヤ…。

!!
ピコーンツ!!よし!この子を使ってうまーくこの場から脱出ニヤ

「そ、それよりメランさん?このヒトは誰なのかニヤ?」

とりあえずまずは話を逸らしてその事を忘れさせるのニヤ!

「えつ?ああ、紹介がまだでしたね。この子は真琴。私の新大陸でのパートナーです。」

「えつと…。ご紹介に預かりました!真琴です!それにしてもまさかこの新大陸である拳滅獣に出会うとは思っても見ませんでした…」

なんニヤ?その、拳滅獣って…?

「さつきも言ってたけど、その拳滅獣ってなんなのニヤ?ボクのこと

言ってるのかニヤ？」

「えっ…？うん、そうだけど…もしかして知らなかった？」
サラリと言つてのける真琴さんにボクは軽く頷いて返す。

「あれ、そうだったんだ… 私達の間じゃ結構有名だよ？ハンターで
ありながら警戒モンスターでもある獣人族のハンター…。撃滅拳と
拳滅獣並のハンターには近寄らないように御触れが出てくるくらいだ
し」

うわあ… セレシアさん。いったいなん… つてことしてくれて
るのニヤ…。

これじゃもう恥ずかしすぎて街を歩けないのニヤあ…！！
これは、一度キツク言っておかないといけませんニヤ!!というか改
名してもらわなきゃ割に合わないニヤ！

変えないならボクは… ドンドルマの街を破壊し尽くすだけ
ニヤあ!!

…と、危ない危ない… ちよつと旧破壊の悪魔っぽくなっ
てしまっていたのニヤ

「先生…？」

おつとと… ちよつと考え込みすぎましたかニヤ…。
とりあえず今は… !!

「なんでもありませんニヤ、と、そうだ！ボク今ちよつと用があつて急
いでるのニヤ!!じゃあお二人とも！活動頑張ってくださいニヤ!!で
は、サラダバー!!だニヤ…！」

「あつ!!せんせつ… !!」

「っ！つて…！早っ!!」

後ろから二人の声が聞こえてきてるけど… 今はともかく…

「あああああばよおおおつ！とつあああん！！」
この状況から逃げるが勝ちニヤ！！

追い出されました…ニヤ

……もうとつくにご存知ニヤんだろ？ボクは海の向こうから暇を潰しにやってきた獣人種…。獣人修羅種、アイルーシユラだニヤ！！
って、ボクは誰に言ってるのニヤ…？そんなことよりも……

「ニヤゝアゝアゝアゝ…！！さいつ……あくニヤああああ……」

あの再会から数日、現在ボクはテトルーさんの住処で悶えていた。えっ？前に頼まれてた届け物はしたのかつて…？もちろん終わらせたニヤ！！その後で即効帰ってきて今に至るのニヤ……。

「ニヤゝあゝあゝあゝあゝあゝ……！！」

「だあああっつ！！もううるせえのニヤ！！」

「へブシニヤ…!?」

痛いニヤ…渾身のチョップを食らったのニヤ……

「ぐぐっ…！！そんなに喚く暇があるなら他部族と交流でもはかってこいニヤ！！」

明らかにボクより痛そうに前脚を抑えて飛び跳ねてるテトルーさんが棍棒をもって小突いて来る。

「いたっ…?!いたいいたいニヤあつ!?わ、わかった…分かった行きますニヤよお…」

うう…外に出たらまた会う気がするから出たくニヤかったのに………(泣)

けど、今の住処を追い出されても困るし…行くしかないニヤよ

「ニヤ…!? 虫かご族の客人!! 避けるニヤアアツ!!」

あれ? なにかまもり族が言ってる? ボルボロスの突進がうるさ過ぎて聞こえないのニヤ……………。

【ドドドドドドドドドツ!!!】

さらに大きくなってくる轟音……………。

あーもう…!! さつきからうるさ過ぎニヤ…!!

「うるせえニヤ喧しい!!!」

「ボグッ…!!!」

そして音を立ててボトボトと砕け散るボルボロスだったものの肉片が辺りに散らばる……………。

「はあ…新大陸この奴らはどうしてこう話を聞かないヤツらばかりニヤのでしょうか…」

「いやいやいやいや!!! そんなことより何をしたのニヤ…

はニヤ…?」

!!!!!????」

もしかしてボク、またなにかやらかしちやったかニヤ?

思いを馳せますニヤ

「それで、どんな手を使ったのか教えてくれないかニヤ？」

話を聞かないボルボロスを粉碎した後、ボクはまもり族のテトルーさんに連れられて、まもり族の拠点へとやってきていた。

「どんな手って…ただ普通に殴っただけなのニヤけど…」

そんなボクの言葉にテトルーさん達が驚愕する。

そんなに驚くことなのかニヤ？あの程度の奴ならアップさんでも一撃で伸せると思うんニヤけど……………。

そういえば、アップさん達元気にしてるかニヤあ……………

最後に会ったのはここに新大陸に着いた時に別れて以来だし、元気にやってくれてるといいニヤあ……………懐かしい……………。

懐かしいと言えば、向こうにいる星焰龍スファイアさんたちはどうしてるんだろうニヤ

やっぱり好きに暴れ回ってるのかニヤあ……………それとも、案外あのレウスさんと良い感じになっていたりするのかニヤ？

そういえば、側近になれたの私のモノになれたの言われてたっけか

ニヤ……………（前話十三話参照）

今となつてもいやだけど、アレってまだ有効なのだろうか……………

流石にもう勘弁して欲しいんニヤけど……………

アフエリス触星龍さんに関しては……………うん、関わり会いたくないニヤ……………

だって初対面があんな感じニヤよ？出会って数秒で食い殺す宣言されたら誰だって会いたくないニヤ……………

えっ……………その代わりに力を手に入れたらって……………？それとこれとは話が別ニヤー!!

拳句ム力つくからって理由で喧嘩売られたんですから会いたくないニヤ!!（十六話参照）

……………まあ、なんかあの二匹は更に進化したみたいでしたけど

ニヤあ……………

そもそもなんなのニヤあの二匹……………もう龍って括りに入らないと

思うのニヤけど… 皆さんどう思うニヤ？

へ？知らないし面白ければそれでいい？もお… あなた方は見てるだけだからそう言えるのニヤ…

アレに目の前で遭遇したら次の瞬間には命なんてないニヤよ？
スファイア
星焰龍さんならまだしも、触星龍さんアフエリスなんかは出会ってその場で丸呑み
みが基本だからニヤあ…

あ、まだ会いたくない人達いたのニヤ…

誰かって？決まっていますニヤ！あの祖龍ルーツさん達のことニヤ！！

問答無用で拉致られたと思ったら死戦に継ぐ死戦だったのニヤよ？
もうあんなの二度とゴメンにや… (二十〜二十三話参照)

あの時ほど死を隣り合わせに感じたことはなかったですよ…

…なんだから、こうして思い返してみると、ホントにいい
思い出ないのニヤ…

エクセリアさんやジェストさん達は… まあ、大分良かったと思う
けど…

ウン… しばらくは本国に戻らない方が良さそうニヤ… ボクの
身の安全のためにも…

そうしてボクは密かにそんな覚悟を決め、あの地形クラッシュ
に見つからずにひっそりと生きることを決意したのでした…

ニヤ

あ、テトルーさんお手伝いしますニヤ！！

新たな出会い・・・ですニヤ!!

「それにしても本当に助かったニヤ、あのままだと、我らはこの広い荒地に放り出されることになるどころだった……………」

「ニヤハハ、それはよかったのニヤ」

そもそもそんなことになったら面倒だし、なんだか嫌な予感もするからニヤあ……………」

そんなことを思ったところで、ボクは虫かご族のテトルーさんからの依頼を思い出した。

「そういえば、虫かご族のテトルーさんからのお届け物ですニヤ」

そう言つてボクは懐からテトルーさんから預かっていた葉っぱの包みを取り出して渡す。

「これは・・・ああ、古代樹の食料と道具かニヤ、これは助かる、ここでは中々便利なものだからな……………」

はニヤあ……………」やっぱり住むところが違うと生活も変わるのニヤねえ……………」

「古代樹からここまで来て疲れただろう、今日くらいは身体を休めていくといいニヤ」

「ありがとうニヤ!お言葉に甘えてお世話になりますニヤ。けど、その前にボク、もう少しこの荒地を見てきたいから少し回ってきてもいいかニヤ?」

そう問うとまもり族のテトルーさんは一つ頷いて……………」

「そのくらいなら大丈夫ニヤ、けどこの荒地は広いから迷わないよ

うに気をつけるのだぞ?」

「分かったのニャ!!いつてきまーす!!」

そうして、テトルーさんの見送りを背に意気揚々と大蟻塚の荒地へと、ボクは飛び出していくのだった。

◆◆◆NOW loading◆◆◆

「……………迷ったニャ」

意気揚々と飛び出して十数分……………。

ボクはいきなり迷子になっていた。

「ハ、ハハハハココどこニャ?テトルーさん達の拠点は……………?」
辺りを見回せど、あるのは岩だらけ……………。

「……………ヤバい……………本格的にヤバい気がするのニャ……………」

……………こうなったら焰ネコフォームで……………っ!!

そう決断しかけたその時だった……………。

「……………?キミは、アイルーか?」

そんな、低めの声が背後から掛けられる。

「……………ニャ?」

振り向くと、そこには緑のフードらしきものを被り、長杖を手にしたヒトが立っていたのニャ

「……………長くここを調査していたが、アイルーは見たことがなかった……………新種か?」

「…新種かどうかは分かりませんが、ボクはアイルーですニヤ」

「やはりそうか…ところで、どうしてこんな所に？」

「ちよつと迷っちゃったて…遭難中なのですニヤ…」

隠してもしようがないので大人しく話す…。

「遭難…か、ということはこの辺りの出身ではないようだな」

そりやまあ…出身はここじゃないし、本国…という訳でもないけど…

…嫌なやつのを思い出してしまったニヤ…

あんなヤツのことを思い出すくらいなら^{スファイア}星焰龍さんのことを思い出しての方が何全倍もいいのニヤ

「違いますのニヤ、ボクはたまたまここを通りすがっただけの獣人族だからニヤ」

内なる不快感を隠してボクはフードのヒトと話す。

「そうか、なら丁度いい、君、私と共に来るか？」

「ニヤツ…??」

それは、あまりに唐突で不思議な提案だった

苦勞の帰還ですニヤ!!

えーと、お久しぶりですニヤ、ボク、修羅アイルールのシユラですニヤ!!

今は少し変わったフードのヒトと出会ったところなのですニヤ
ニヤー… 魅力的なお誘いですけどお断りしておきますニヤ

「そうか？ 断る理由を聞いてもいいかな」

理由かニヤ？ 簡単なことですニヤ、今お世話になってるテトルーさん達に急にいなくなったら迷惑を掛けてしまうからニヤ

「なるほど、こちらの獣人族の所に身を寄せていたのか、それは無理には誘えないな」

ニヤー… お力になれずごめんなさいニヤ…
このヒト、ボクの向こうでの話を知らないのかニヤあ？

「構わない、私は行くとするよ、導かれるままに進むだけだからね」

もう行くのですかニヤ？ お気をつけてニヤー

手を振り見送るとその人も手を振り返して荒地の奥へ消えていった。

…
… さて、ボクもそろそろ戻らな… いと… あ…
… やつべえ… ボク、絶賛迷子中だったのニヤ…

「ニヤアアアアアアアアアアア… !!」

「さあ、ここから古代樹の森に行ける」

あ、あはは… 本当すみませんニャ…

まさかあの絶叫でフードのヒトが戻ってきてくれるとは思わなくて驚いちゃったのニャア

「いや、私も最初に気がついた時点で考えておくべきだった、ここからは分かるな？」

はい!! わざわざありがとうございますニャ!!

「今度は迷わないようにな? では…」

今度こそフードのヒトとお別れをして僕は古代樹の森へと帰って行くのだった…

「… そうですね、昔話に聞いた拳だけでモンスターを撃破する獣人を聞いたことがあるが… まさかな」

その答えが合っていることをこのハンターは知る由もなかった…

◆◆◆ Now Loading ◆◆◆

ただいまですニャー

「?」戻ってきたか、随分遅かったが、他の部族とは交流できたか?」

バツチリニヤ!! 届け物もしつかりしてきたニヤ!!
まあ、その後道に迷って見知らぬヒトに助けて貰ったんだけど……

「方向音痴の癖は相変わらずのようニヤ… 早く地理を覚えないと戻って来れなくなるぞ?」

き、気をつけますニヤ…。じゃ、じゃあボク、森の地図を詳しく覚えるためにちよつと出かけて来るのじゃ

「拠点の場所をしつかりと覚えてから行くのだぞ」

分かってニヤー! 行ってきまーす

◆◆◆◆◆ Now Loading ◆◆◆◆◆

えーと、ここから上に登って行けて……

ボクが古代樹の散策を再び始めて少しした時ニヤ

「ゴルアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

ニヤニヤニヤツ!? なになに何ニヤいったい!?

つて、ニヤんかキヨウリユウみたいなのいるんだけど……

えーつと、一応お聞きしますけどなんの御用かニヤ?

「ゴルルルル…!!」

あ、ダメだやっぱ何言ってるのかよくわかんないニヤ……

多分エサか何かと思われるから… ひとまず… 逃げるニヤ!!

シユラは逃げ出した!!

しかし回り込まれてしまった!!

「ゴルアアアアアアアアアツ!!」

や、やっぱり逃がしてくれないニヤね……

こうなったら仕方ニヤい……期待出来るか分からないけど……相手してやるニヤ!!

「ゴルアアアアアアアアアアツ!!!」

一声大きく鳴いてからの突進……

とりあえず受けてみるかニヤ

「ズンツ!!」

うん、中々の威力……。結構吹っ飛ばされたニヤあ

「ゴルツ……!? ゴルアアアツ!!!」

今度は火炎ブレスニヤ、うーん……
スファイア・ルフネ 星焰龍さんの焰の方が熱かつ

たからこれくらいじゃニヤあ……

「ゴルツ……!? ゴルルルルツ……!!!」

あつ、あまり効いた様子ないから警戒してるニヤね

まあまああの攻めだったニヤ、それじゃあ次はボクの番ニヤ

一蹴りで距離をキョウリユウモドキとの詰めて、一息に腕を振り抜く。

「並 連続ネコパンチ」

絶叫をあげることなく肉塊になっていくキョウリユウモドキ。

…… やっぱり一撃で終わっちゃまったのニヤ……

クソつたれええええええええええツ
!!!!!!!

懐かし友たちとの再会ですニヤ!!

大丈夫、ボク、サイキョーだから!

えっ?何が大丈夫なのかって? 知らんのニヤ(☒☒*)?

というわけで、ボク、アイルーことシユラですニヤ!!

あの後、普通に恐竜アンジャナフの解体をし終わったボクは散歩のつづきをしてたのですニヤ

そしたら、珍しいヒト達にであつたのニヤ!!

「ウオオンツ」

「ギャガアアアツ」

不意に背後から掛けられた声に振り向くと、そこにはナルナルガクルガさんとジンジンオウガくんがいたのニヤ

忘れていた人のために書いておくと、《ナルさんは女王蜂領域に住んでたナルガクルガの修羅種さんニヤ!!第1話 帰ってきたのニヤ!女王領域! 参照

ジンくんも同じ所に暮らしてたジンオウガ修羅種なのですニヤ!!
第五話 狩りの手伝いですニヤ!! 参照

どうしてこのヒト達が新大陸にいるのかは... まあ置いておくとして第25話 ぼ...ボクの家が...ですニヤ! 参照

「お久しぶりなのニヤ!! ジンくん!! ナルさん!!」

「ウオオンツ」

「ギャガアツ」

懐かしいニヤあ...。最後にあつたのは新大陸に来てすぐの時だったし.....

「え?『今までどこにいたのか?』ですかニヤ? こちらの獣人族さんのところにお世話になってましたニヤ」

「ウオオオオオオンツ」

「ふむふむ『戦うために探してた...』って... おお、ジンくんまた強くなれたのニヤ?! やるニヤあ」

ボクはこれ以上強くなれそうにないニヤ… なんだか新しい力をくれそうなヒトとも出会えぬし……

「ギャガアツ!!」

「ニヤニヤ? 『今はそんなことしてる場合じゃない?』えっと、どういうことニヤ? ナルさん」

「ギャガアツ」

「ふむふむ』なんでもいいから着いてくるの、ジンの背中に乗って』かニヤ? な、なんだか分からないけどわかったのニヤ!!」

そう言われたボクは軽く跳躍するとジンくんの背中に飛び乗る。それを見てナルさんが一鳴きする。

「ギャガアツ」

『乗ったわね、それじゃ行くわよジン』そ、そうでしたニヤ!! ジンくん、お願いするのニヤ!!」

「ウオンツ」

一飛びでジンくんの背中に飛び乗り、その長い毛をつかみ座り込む。

それを確認したナルさんとジンくんは風のように走り出した。

流石、ナルガクルガというだけあり、前を行くナルさんの背中がどんどん遠くなっていく。

でもそこは負けず嫌いなジンくん、走りながら超雷光虫を体に吸収させ、真帯電状態になると、一気に加速し、遠くなったナルさんの背中に追いついた。

「ニヤハハハハハッ♪ お二方また早くなったニヤア〜」

『これはもうボクじゃ追いつけないかニヤ?』と言ってみたところ、二人から『いや、それはない』って言われたのニヤ、解せぬ…… (

— 3 —)

様子見… ですニヤ!!

えへっ… じゃないだろ!!

ニヤ? いきなりなんなんだって? まあ気にしないでほしい

ニヤ

というわけで、ボク、アイルーのシユラですニヤ!!

修羅オウガ弟 修羅クルガ姉
ジンくんとナルさんから怒られてすぐ、ボクはゾラさんの後を着いて
峡谷を進んでいますニヤ

二匹は耳と頭が痛くなったといって先に帰って行ってしまったのでボク一匹ですニヤ

なんか体調でも悪かったのですかニヤあ…? 〇(・・・)ウーン

えっ? 大体お前のせいだって? 何をバカなこと言ってるのですニヤ…?

ボクがそんなことするわけじゃないですよニヤあ(・ワ・)と、ゾラさんの進行方向の先に何かあるニヤ

どれどれ? アレはなんですかニヤ…?

…ニヤツ!? あ、アレはこちらに来てたハンターさんたちじゃないですかニヤ!?

ニヤ
なんかデカい砦みたいなもの作ってるし、近くに船も止まっているの

しかもよく見ると…

メランさんとあの時に出会った女の子もいるじゃないですニヤ!!
うっわあ… めんどくさい人たち見つけちゃったニヤあ…

しかもゾラさんの進行方向に思いつきり陣取ってるし…
アレ、間違いゾラさん狙いで来てるニヤよね…

まあ、ゾラさんならあの程度の砦障害にはなり得ないと思うけど
ニヤ…?

けど、なんだかさつきから胸騒ぎがするのニヤ

これが何の事か分からないけど、ゾラさんになにか良くないことが起こりそうな気がしてならないのニヤ……

よ、よし……そつとゾラさんに飛び乗ってあの人たちハンターメランSに気付かれな
いように様子を見て着いて行くニヤ!!

方針を決めたボクは脚に力を込め、勢いよく大地を蹴り跳び、離れていた距離を難なく跳び超えてゾラさんの上に飛び乗ったのでしたニヤ



嫌な予感……当たったのニヤ……

ゾラさんの頭上（あくまでハンターさん達からは見えないように）から様子を見てたら、急におかしな龍脈の気配がして、変な古龍？（多分古龍のはずニヤ）がゾラさんの背中に降り立ったのですニヤ

明らかにゾラさんを攻撃する気満々だったから相手するか迷ったのですが、ハンターメランさん達が戦い出したから出てくに出ていけなかったのニヤ……

途中から熟練者のようなハンターさんが出てきて太刀で渡り合ってたけど、あまり実力が拮抗してなさそうだったから変古龍目掛けて殺気混じりの睨みを効かせてやったニヤ

変古龍のやつ、何処から来たか分からない殺気に怯え怯んでから何処か飛び去って行きましたニヤ

なんだったのニヤ？アイツいったい……

でも古龍なら一度アイツの力も貰いに行かないとニヤあ……

とと、これ以上いたらメランさん達に気付かれてしまいそうだニヤ
気づかれる前に撤退するのニヤ!!

「ゾラさん、また様子を見に来るのニヤ、それまで元気でいて欲しいの

ニヤ」

「ゴルルルルオオオ」

ニヤハハ、さすがにまだこんなところでは死ねない…か
ニヤあ…：さすがは老練のゾラさんだニヤ!!

少し笑った後、ボクはゾラさんの上から跳び去って行ったのでした
ニヤ

「……………」

その小さな背中をゾラさんは見送った後、静かに方向を変えたことにボクは気が着くことはなかった…：…